ダライアス・レポート　～天才と呼ばれたくない技術屋の開発奮闘記～

雑草弁士

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

さあて、今回の新メカはいったい何だ!?

「君にこの新型機のテストを頼みたい」

「はぁ!? な、なんじゃこりゃあ!?」

「新型機だが？」

自由都市同盟冒険者組合所属の機兵技師、ダライアス・アームストロング。彼が製作する『機兵』と言う戦闘ロボには、必ずと言ってよいほどに何らかの新機軸の機構が組み込まれている。

そして彼の開発品は、様々な『操手』……ロボットの操縦士の手に渡り、様々な騒ぎを引き起こす。ときにはシリアスに。ときには馬鹿騒ぎを。そして、ときにはハートフルに。

さあ今回の実験機は、いったいどの様な物なのか。そしてそれを扱う操手たちは、どの様な者たちなのか。ダライアス・レポート、どうかご覧あれ。

【表紙】

【Ａｍａｚｏｎ　Ｋｉｎｄｌｅ様にて、電子書籍版発売中！】

ｈｔｔｐｓ：／／ｅｌｔｏｒｉａ．ｗｅｂ．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｓｅｉｋａｂｕｎｋｏ．ｈｔｍｌ#ｄａｒａｒｅｐｏ

【ＢＯＯＫ☆ＷＡＬＫＥＲ様にて、電子書籍版予約受付中！】

ｈｔｔｐｓ：／／ｅｌｔｏｒｉａ．ｗｅｂ．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｓｅｉｋａｂｕｎｋｏ．ｈｔｍｌ#ｄａｒａｒｅｐｏ

※Ｒ―１５、残酷な描写の両タグは保険です。
※本作品は、旧「Ｄａｒｉｕｓ　Ｒｅｐｏｒｔ」を改定し、一次作品として立ち上げ直した物です。
※本作品は、「小説家になろう」様にも掲載されております。
※話数の番号にときどき抜けがありますが、この部分は電子書籍版のみとさせていただきます。

目次

File0「ダライアス・レポート」 1
File1「其の名はジャック」＆File2「画期的な新型機？」 10
File3「実験機奪還依頼」 14
File4「軍師エルトシャン」 19
File6「足なんてキャタピラです」 29
File7「次なる戦場へ」 45
File8「魔弾の射手……？」 52
File10「魔装兵の少女」 62
File11「二人の客人」 77
File13「秘密の計画」 94
File14「お見合い」 105
File15「農業指導員物語」 122
File16「空を駆ける」 127
File17「巨人の鎧」 139
File19「試作実験機をテストしてみよう」 149
File20「ゲームセンターの少年」 158
File21「旧きを以て新たなる力に」 168
File22「筋力増強」 179

Ｆｉｌｅ０「ダライアス・レポート」

その男は、冒険者組合本部棟の自分に与えられた一室で、考えに沈んでいた。

「……駄目だ、没（ボツ）」

そう言って男は、今の時代珍しいと言うよりは存在さえもが疑われるレベルのノートＰＣ（パソコン）上で走らせていた、ＣＡＤソフトを停止させる。無論、きちんとデータをセーブしてからだ。

たとえ没（ボツ）にしたアイディアとは言え、彼は無下にすることは無い。いつか役に立つかもしれないのだから。

ちなみにそのＣＡＤ画面には、全高八メートル程の人型の機械の塊……。この世界における戦場の覇者、人型兵器『機兵（きへい）』の姿が、様々なアイディアの書き込みと共に描かれていた。

男はセーブしたファイルを、自作した魔導器（まどうき）……外部記憶装置にバックアップする。ノートＰＣ（パソコン）自体の動力を落すと彼は、深々と事務用椅子に腰かけてため息を吐いた。

「ふぅ……」

男の手には一通の書類……細密かつ正確、精密な、一機の機兵（きへい）の図面があった。機種はおそらく、全高八メートル程度であるが故、標準タイプである『機装兵（きそうへい）』ではないかと思われる。その図面には、無数の細かな書き込みがなされていた。

彼はその図面をひっくり返す。図面の裏側には、クリップで書類に留められた白黒の写真。その写真には、無機質な印象を与える……しかし絶世の美少女の姿が写し出されていた。

彼は、その少女の無機質さに負けず劣らずの無機質な視線を、その写真に送る。

「……必ず、打ち負かす」

男の名は、ダライアス・アームストロング。自由都市同盟は冒険者組合の、お抱え機兵技師である。だが二年前まで彼は、自由都市同盟は都市同盟軍所属の技官、技術少佐であった。

＊

その機装兵、コードネーム『仮面の怪人』は、ダライアスが全身全霊をもって設計し組み上げた、彼に取って最高傑作だった。

もっとも今思えば、性能こそ尋常でなく高いものの整備性は劣悪、なおかつ頻繁に高度な技術者――ダライアス本人――による調整や修理を必要とし、結果的に稼働率も低い。あげくに価格は高く生産性は目を覆わんばかりのありさまであった。

だが都市同盟軍高官は、その性能にばかり目を取られて狂喜した。そしてその機体に箔をつけるためだけに、最近発掘されたばかりの『幻装兵』相手に、トライアルの場を設えたのである。

幻装兵とは、今現在の技術では模倣すらもできない高い性能を誇る、古の機兵だ。そしてそれを打ち負かしたとあれば、ダライアスの『作品』には大いに箔が付くと言う物だった。

「……？」

その幻装兵……仮称『ブラック・カタナ』、正式名称は不明なのだが、それを目の当たりにしたときダライアスは一瞬目を疑った。

（なんだ……？　あの動きは……）

その幻装兵は、非常な高性能機ではあった。あったのだが、現代の機装兵のそれも最高性能の物であれば、充分に対抗可能な能力しか発揮できていなかったのだ。

そしてダライアスの『仮面の怪人』であれば、確実な勝利を得られるはずであった。

発掘に関わった考古学者、技術者たちによれば、おそらくは古代に大量に作られて、なおかつほぼ全て破壊されてしまった一般兵用の凡百な機体なのだろうとの事である。そうとでも思わない限り、あくまで幻装兵としてはであるが、説明のつかない低性能っぷりであったのだ。

それ故に此度のトライアルの、当て馬、噛ませ犬として選ばれたのだ。

ちなみに形状だけは、かつて八〇〇年前の旧大戦において新人類解放軍の中核となって、旧人類の奴隷であった新人類たちを解放した、八英雄の乗機……。八機神と呼ばれる機体群の一機、刀神イザナギ駆る『破裂の幻装兵　アメノハバキリ』によく似ている。そのため、それを元にした大量生産品の安物ではないかと思われていた。

しかしダライアスの眼は、その幻装兵の異様さを見抜いていた。

（なんだ、あの滑らかな可動ラインは。断じてあれは低位機体の構造じゃないぞ。

……いや、出力の応答がうまく噛み合っていない、だと？　そのために、転換炉が魔力収縮筋に魔力を十分に流せていないんだ。結果として、パワーロスや反応速度の低下が起きている。

……問題は、制御系か!?）

ダライアスは、『ブラック・カタナ』の整備責任者――この幻装兵の発掘時の責任者でもあった――に、噛みついた。

彼は相手に足枷をはめて戦って、勝利を盗むような真似はしたく無かったのである。実戦の場ならばともかく、少なくともこのようなトライアルの場では。

「エリベルト技術大佐!!　あの機体を発掘した際に、何か別口で発見されなかったか!?」

「な、何かね、いきなり!?」

「あれは一般兵用の凡百な機体なんかじゃあない！　明らかに、なん

らかの目的を持って製作された一品物だ！　だがおそらく、パーツが足りない！　発掘された物品の中に、何か鍵があるはずなんだ！」

相手方の整備責任者であるエリベルトは、唖然とする。

「な、なんじゃと？　し、しかしだな……」

「頼む！　エリベルト師！　……わたしは相手の手足を縛った上での、欺瞞に満ちた勝利など欲しくは無いのだ。たとえ、わたしが負ける事になったとしても、だ！　それは今の負けではあっても、最終的な負けでは無い！

だが……今、嘘の勝利を受け入れてしまえば、それは最終的な敗北だ。わたしには、そこから先は無いだろう。技術者として……」

「……」

エリベルトは沈黙する。そして彼は、助手に命じて一人の少女を連れて来させた。その少女は、絶世の美少女であった。だがしかし、何処か無機質さを感じさせる。

「この娘はララ……。『ブラック・カタナ』を発掘した遺跡から発見された少女じゃ。魔術で体組成などを調べたが、旧人類とも我々新人類とも異なっておる。

おそらくは、この機体の操手（そうしゅ）として作り出された、量産兵士なのだと思われた。

彼女には記憶が無い。おそらく基礎的な知識も命令も何もかもインストールする前に、大戦が終わってしまい、彼女だけが遺跡のカプセルに残されたのだろう。

哀れに思って、な。軍の検査が終わった後に、引き取ってララと名付けたのじゃよ」

「では……」

「いや、この娘に操縦させても、この幻装兵の性能は他の操手（そうしゅ）が動かすのと大差は無い。いや、熟練の操手（そうしゅ）の方が優秀ですらあった。

貴君の考え過ぎでは、と思うがの……」
「……くっ！」

ダライアスは『ブラック・カタナ』の胴体中央に位置する操縦席、『操縦槽』へと走った。彼は肉体的には貧弱な方ではあったが、操縦技術は一流の部類に入る。彼は幻装兵の操縦槽の中を、徹底していじりまわした。
そして、幻装兵の拡声器から、ダライアスの声が周囲に響いた。

『……見つけたぞ』
「!!」
「ら、ララ!?　どうしたんじゃ!!」
幻装兵『ブラック・カタナ』の頭部が展開して行く。そこには、人間の大人では座れない小さなサイズの……ちょうど少女であれば、すっぽりと収まる程度の、バケットシートが存在していた。
少女ララは、エリベルトの制止を振り切って、幻装兵の方へと駆け出した。その身体能力は信じ難く、八メートルはある機体の頭部まで、一瞬のうちに跳ぶ様に登り切り、そのシートに身を沈めた。

＊

そして『ブラック・カタナ』が『目を覚ま』す。

＊

「おお……!!」
「う、うわぁ!?」
「なんだこのデタラメな魔力の波動は!!」

周囲に噴出した魔力の余波が、その場にいた全員の身体を総毛立たせる。その魔力の渦の中心で、『ブラック・カタナ』は腰に二本差しに

なっていた双刀を抜き放ち、信じ難い速度で舞うような動きで振るっていた。
双刀はありあまる魔力を本体から供給され、凄まじい威力の妖刀と化している。
その一閃は、まさしく稲妻の如し。今現在の機兵(きへい)では、何がどうあろうと太刀打ちできぬ事は明白だった。たとえそれが、ダライアスの最高傑作であろうとも。

『……しかも、剣に素養が無く、技術も無いわたしが操っていてコレなのだからな。く、くくく』

ダライアスは自嘲の笑みを漏らす。『ブラック・カタナ』操縦槽(そうじゅうそう)にある、外部を映し出すスクリーンである映像盤(えいぞうばん)には、これからトライアルに挑む『はず』であった自分の最高傑作『仮面の怪人(ファントム・オブ・マスク)』が映っていた。
ダライアスには、その自身が造り上げた機兵(きへい)が、とてつもなくみすぼらしく思えてならない。
彼は、『ブラック・カタナ』から降りる。

「お、おいアームストロング技術少佐……」
「……わたしの完敗……ですよ。いえ、戦う以前にわたしは敗れていました。自分自身に……。自分自身の驕(おご)りに、ね」
「……」
「ああ、操縦槽(そうじゅうそう)内のパネルを外した裏側の更に奥に見つけました。あの機体の正式名称は、『ヴェイルー・ヌ・ザアンティス』、だそうですよ。では……」

そのままダライアスは、悄然(しょうぜん)とその場を立ち去った。そんな彼を、『ヴェイルー・ヌ・ザアンティス』の頭部ハッチを開いて、ララがいつまでも見つめていた。……無機質な瞳で。

＊

そしてダライアスは目覚める。そこは冒険者組合本部棟の、自分の研究室であった。

「ふう……。夢、か」

この二年間で彼は軍を退官し、冒険者組合へと移籍していた。理由は単純、しばらく頭を冷やす必要に迫られた事と、軍にいては思うような研究ができないからである。

無論、研究資金は軍の方がたくさん使える。湯水のごとく、とまでは行かないにせよ。しかし研究の多様性と言う面では、冒険者組合の自由さには敵いはしなかった。

ちなみにダライアスほどの技官を野に下らせる事について、当然の事ながら軍は難色を示した。

だが最終的には軍も首を縦に振る。何かしら、軍と冒険者組合の間で裏取引があった様なのだが、それにはダライアス本人は関与していない。

「……」

ダライアスはノートＰＣを起動し、ＣＡＤソフトを立ち上げると、眠る前に没にした機装兵の設計データを再びロードした。

（ふむ……。そう言えば、わたしも普段使い用の機装兵が必要なんだったな。実際に古代の機体を発掘に行くにせよ、古戦場へパーツ漁りに行くにせよ、組合から借り出せる従機では頼りないにもほどがある。

……造るか）

彼はいったん没機兵をＣＡＤソフト上でばらばらに分解すると、骨

格を別の物に変更する。

（二世代前の、旧式機装兵（きそうへい）『ピラニア』……。これは、初期性能は低いものの、カスタマイズ上限値は阿呆の様に高い。これをベースにして、わたし得意の射撃戦用に機体を造り直す……）

彼は再度ＣＡＤデータをセーブしてバックアップを取ると、ノートＰＣ（パソコン）をシャットダウン、椅子から立ち上がった。

（古戦場……アントシニアン平原がいいか。あそこに残骸を漁（あさ）りに行かねばな。ニコイチ、サンコイチすれば使える骨格が集まるだろう。機体名は何としようか……）

その時ダライアスは、ノートＰＣ（パソコン）の壁紙になっていた、古代魚の写真を思い浮かべる。それは水中より口で水を吹き出して、樹上の昆虫をはじき落として捕食する、特殊な魚の写真だった。

「……テッポウウオか。よし、この機体の名は『アーチャー・フィッシュ（アーチャー・フィッシュ）』にしよう。射撃戦を得意とする、わたしに相応しい機体名だな。」

そして彼は意気揚々と研究室を出て行った。

＊

「なあ、あの男は？」

「ああ、うちの秘蔵っ子ですよ。『子』って歳じゃありませんがね。うちの組合の誇る、天才機兵（きへい）技師です。名前は、ダライアス・アームストロング。

……あ、天才って言ったのは内緒にお願いしますよ？そう言うと、怒るんで」

「ほお？　……天才、ねえ？　くっくっく。もしかして、俺の機体は奴が造る事になるのかい？」

ダライアスは、そんな会話が交わされているとは知らず、簡易型の機兵（きへい）である従機（じゅうき）、『ミメラ・スプレンデンス』を組合から借り出して、アントシニアン平原へと出立して行ったのである。

Ｆｉｌｅ１「其の名はジャック」　＆　Ｆｉｌｅ２「画期的な新型機？」

［Ｆｉｌｅ１「其の名はジャック」］

ジャックは自分の従機の中で、必死に死んだふりを続けていた。従機とは全高４～５メートルほどしか無い、廉価版の機兵である。その能力は低く、一般からは機兵扱いされないほどなのだ。

その操縦槽に設置してある、性能のあまり良くない映像盤に、自分に興味をなくした敵機……。ジャックの従機とは比べ物にならないほど強力な、陸戦の王者、戦場の覇者たる全高八メートルの機装兵がよぎっていくのが映る。

……その行く手には、抵抗できない徒歩の仲間達がいる。

映像盤に映る照準を、ジャックは一生懸命に敵機の脚間接に合わせる。チャンスはこれしかない。この従機を作ってくれた、冒険者組合の技師であるダライアス師の言葉が、脳裏によぎる。

『魔導制御回路を書き換えて、わたしの使ってる照準プログラムを載せておいた。あとは君の腕しだいで、わたしが機兵相手にやってる技……。敵機の関節を貫いて行動不能にする『間接貫き』が可能だ。あくまでも理論上だがね』

ジャックの機体は従機である。その反応性は低く、動作の精度も甘い。敵機の関節部を狙うのは至難と言うレベルでは済まない。

また射撃武器である『魔導砲』は普通、装甲の無い魔獣相手の武器である。装甲を施された機装兵相手では、関節部以外に命中したところで、効果は望めない。

勝てる可能性はほとんど無い。しかし、彼と仲間が助かる可能性もまた、これしかないのだ。

ジャックは残る魔力を機体に漲らせると、死んだふりをやめて全砲

門を撃ち放った。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

［Ｆｉｌｅ２「画期的な新型機？」］

「ちっくしょう、何が新型だ！　従来機とたいして変わらんじゃないか！」

　煤まみれ、泥まみれになりつつ、チェスターは味方の基地に辿り着いた。徒歩で、である。

　彼は自分の乗機たる機装兵（きそうへい）を、魔獣（まじゅう）との相打ちの形で破壊されていたのだ。

　なお彼が乗っていた新型機と称する物は、その機体のテストを兼ねて無償供与されていた物である。

　チェスターの本来の乗機は大破しており使えない状況だった。そこへテスト機供与の話である。

　しかし無償という美味しい話にうかうかと乗った過去の自分を、彼は罵倒したい気分だった。

「まあ脱出装置は確かな様だけどよ。肝心な戦闘能力が元の機体と大差無いんじゃ……。乗りやすくはあったが」

「おう、生きて帰って来たな」

　整備主任のオヤジが、チェスターに向かい声をかけて来る。

「済まんが、戦線が押され気味だそうだ。また出てもらえるか？」

「鬼かッ!!　機体がねーよ!!」

「あるぞ、ほれ」

　オヤジが指差す先にはチェスターが先ほどまで乗っていたのとまったく同型の、完全に型にはめたかの様に瓜二つの機体、八メート

ルサイズの人型兵器、機装兵が鎮座していた。

「ま、まてよオイ。機体にゃ一機ごとにクセがある。それに慣れないうちに戦闘になんか……」

「つべこべ言わずに、乗れッ!!」

チェスターはオヤジと徒弟の整備士達に、強引に操縦槽へ放り込まれる。ため息を吐きつつも、チェスターは操縦席に着座し、機体を起動した。

(……!? こ、こいつ、手足の様に動く!?)

「おまえが前回乗った時に、データ取っておいて、それをデータカートリッジで移殖したんだよ。

専用機やらカスタム機やらでは意味無いシステムだし、一般兵用の安物に積むにゃ高価い。こんな低価格機に搭載してあるなんざ、おどろきだ」

『やっぱり安物だったのか!?』

「おうよ。だがな、ただの安物じゃねえぞ。値段は従来機の三分の二、しかし機体能力は従来機からなんら劣ってない。しかし問題はそこじゃねえ。

量産性、整備性、そして稼働率。あらゆる物が桁外れだ。あれを見な?」

オヤジが指差す先に機体の頭部、機外の映像を得るための眼である魔晶球を向けたチェスターは、唖然とする。そこにある大扉からは、この場に搬入されつつある三機の機装兵……。チェスターの乗っているソレと全く同じ機体が見えていた。

それだけではない。その後ろからは中破、大破した同型の機装兵が運び込まれて来る。おそらくチェスター同様にテストを任された奴らの機体だろう。

整備士が、いっせいにその損傷機に取りつくと、無事な部分をひっ

ぺがし、それを使ってあっという間に一機の機体を組み上げてしまった。

『う、嘘だろ？　こんな短時間に？』

「ほんとも、ほんとだ。ある程度の残骸が残ってりゃ、ニコイチ、サンコイチ、ヨンコイチであっと言う間に機体を復旧できる。個々のパーツの頑丈さが桁外れで、故障が少ない。

俺たち整備の人間からすれば、夢の新型機だ」

チェスターは開いた口が塞がらなかった。

「ダライアスって奴が設計して、組合が制作、製造した機装兵なんだがよ。操手さえ生きて還ってくりゃあ、いくらでも再出撃ができる。生きて帰還できるなら、いくらでもブチ壊してかまわんぞ。

さあ、出撃しろ！」

たしかに戦術的、戦略的には大きな意味のある機体だ。特にチェスターの様な中堅操手には、ふさわしいのかも知れない。

（でもなあ……。やっぱり高性能機、乗りたいよなあ……）

チェスターはため息を吐きつつ、再出撃した。

Ｆｉｌｅ３「実験機奪還依頼」

（……なるほど、これは『機装兵』と言うにゃ、ちょっとなあ）

ホルヘ・ソブリノはこれでも一流の端の方に指先ぐらいは引っ掛かってると自負している操手である。またその乗機も、それ相応の強力な機体だ。

都市同盟軍で正式採用されている機装兵の一種『スペーア』を特別な伝手で払い下げてもらい、カスタマイズした機体。その名も『ブリッツエス・スペーア』である。

……まあ、順次最新機種へと切り替えが進み、退役しつつある機種だからこそ、彼の伝手で手に入れる事ができたのであるが。

しかしそれでも未だ第一線で使用されている傑作機であり、それを高い金をかけてカスタマイズしたのだ。それと彼の技量があれば、生半可な相手には負けないはずだった。

（しかし……。こいつはキツいぜ）

ホルヘは、機体の右手に持たせたランスを振るって敵機に突き立てる。操手としての機体感覚に伝わる、ぬるりとした感触。

胸部に増設された噴射式推進装置を噴かし、ホルヘは機体を急速後退させる。いましがた敵機につけた傷からどす黒い液体が迸り、地面に落ちるとジュウジュウと煙を上げて大地を腐らせる。

見れば、敵機の傷は若干の痕跡を残して癒えてゆく途中だった。

『こ、こいつぁ凄えや！　こいつを引き渡せば、たいした金に……』

「……『何処』の『誰』に引き渡すのか、教えて欲しいものだな」

だがまあ、想像はついている。自由都市同盟は冒険者組合に所属している中でも一、二を争う英才技術者、ダライアス・アームストロング師が試作した、実験機である『生体』機装兵。

機械で作った骨格の周囲を、ナメクジの集まりの様な生体部品で固めた、不気味な外観の機兵(きへい)であった。ぶっちゃけ、気持ち悪い。
ダライアス師本人は、『ちょっと『機(き)』装兵(そうへい)と言うには機械部分が少なすぎるんだがね』と言っていた。
あまりに斬新な実験機であるソレを、アルカディア帝国かカーライル王朝・聖王国のどちらかに流す気なのだろう、この盗人操手(そうしゅ)は。
もともと今回の依頼は、廃棄処分にするはずだった『失敗作の実験機』が盗まれたため、危険だから奪還、回収してほしいとの物だった。だから万一の場合は、破壊も許可されている。
しかしできるならば、ボーナス目当てで奪還し、かつ盗んだ犯人を捕縛もしたいところだった。
……何故って、既に大損害が出てるから。

(エルネストにレオニートの阿呆め。欲をかいて、機体を壊されやがって……)

当初ホルへは、危険すぎるから奪回は断念、最初から目標を破壊するつもりだった。しかしチームリーダーであるホルへの意見に異を唱えたのが、チームを組んでいたエルネストとレオニートの二人である。
彼らの機体も『ブリッツェス・スペーア』……『スペーア』に徹底的なカスタマイズを加えた高級機であった。

(それを無様にブチ壊されやがって……。是が非でも目標を奪回せにゃ、報酬から修理代で足がでちまうじゃねえか……)

エルネストとレオニートは、目標の敵機が並の機装兵(きそうへい)とは比べられない戦闘力を持っている事を知らされながら、敵操手(そうしゅ)が元々下級の機体でしかない従機(じゅうき)乗りの三流だと言う事で侮り、二機がかりで敵機を抑え込もうとした。
盗人操手(そうしゅ)はそれに対し、わざと自機の組織を一部破壊して、二人の

機体にその『体液』を振りかけたのだ。二人の機体は装甲板を溶かされて、そこに敵の『体内』から発射された無数の鉄球を浴びた。
普通、そんな飛び道具は機装兵の装甲があれば、ほぼ完全に無視できる。だがその装甲が溶かされていれば、話は別だ。
二機の高級なカスタム機、『ブリッツェス・スペーア』は修理できないとは言わないが、完全に行動不能にされてしまったのである。下手すると、新しく払い下げてもらった『スペーア』を再度カスタマイズした方が、安く上がるかもしれない。

（とほほ、こいつら見捨ててやりてえ……。そんなわけにも行かんが）

ホルヘが助かったのは、命令無視した二人に追随せずに、油断せず行動していた、ただそれだけの差であった。そして彼は、損害を補填するためになんとかしてこのナマモノ機装兵を、せめて完全破壊せずに捕獲せねばならない。

（だが……時間がねえ……。）

この『生体』機装兵が失敗作とされる所以、それは戦闘出力での稼働時間に限界がある事だった。そしてその限界稼働時間を超えて戦闘した場合には、どうなるか……。

「おい！　最後通牒だ！　その機体から降りて、逃げろ！　機体さえ返せば捕まえないからよ！」
『へっ、馬鹿な事を言うな！　こっちの方が有利じゃねえかよ！』
「馬鹿野郎！　こっちゃ、親切で言ってやってるんだぞ!?　それは危険なんだ！手前、死ぬぞ！」

ホルヘは最後の望みにかけて、必死で説得した。実験機を破壊せずに取り戻すには、それしか方法が無かったからだ。
ホルヘの腕をもってすれば、ヒット・アンド・アウェイを繰り返す

事で、まず確実に敵機を破壊できる。だがそれはしたくなかった。だってボーナスが入らなくなって、報酬から修理代で足が出るし。
それに、時間が無かった。

『ふん！　何を馬鹿な……』

相手の声が途切れた。どうやら全て無駄だった様だ。ホルヘは操縦槽（そうじゅうそう）の中で脱力する。

「……あーあ。大損だ」

ホルヘの眼前で、実験機『生体』機装兵（きそうへい）は、その機体と言うか、肉体？　そのあちらこちらから、どす黒い体液を迸らせて、ぐちゃぐちゃになって崩れ落ちて行った。
そしてそのまま、ドス黒い水たまりの中へ、ドロドロに溶け崩れて完全に消滅してしまったのである。後に残ったのは、臭いにおいを放つどす黒い水たまりだけだった。

＊

一週間後、ホルヘはエルネストとレオニートの乗る最新型機装兵（きそうへい）二機を引き連れて、冒険商人の隊商を護衛していた。もっとも、部下二人が乗るのは最新型とは言えど、超廉価版の非常に安価な超安物の、つまりは大量生産に向いた凡百な機体である。
何故ってソレしか買えなかったから。彼らの『ブリッツエス・スペーア』は、思ったより損傷が大きく、修理するより買い替えた方が安上がりな状態だったのだ。

（……まあ、いい薬にはなったのかもな。代償は高かったが）

あれ以来従順になった二人の部下に、ほんの僅かだけ慰めを感じる

ホルへであった。

Ｆｉｌｅ４「軍師エルトシャン」

魔石灯の光が照らす部屋の中で、二人の男が声高に言い合っていた。片方は眼鏡をかけて、ノートＰＣ――今の時代、存在すらも疑われる様なオーバーテクノロジーの品――に繋がれたヘッドセットを身に着けている。

この男がダライアス・アームストロング……。自由都市同盟冒険者組合のお抱え機兵技師であった。

ダライアスは、眉を顰めて言葉を発する。

「やりたい事は理解できる。……前の機体と、その通信／指揮管制システムでは不満だったのもな。

しかしだな、通信の確保はまだ容易な方の要求だ。しかし問題は戦域全体を俯瞰して戦闘指揮管制を行う手法だ」

「ふ……む。通信の確保は、可能なんだな？」

「ああ。ちょうど研究中だった、風魔法を応用した通信システムが使える。そして、得られた戦域の情報を映像盤ではなしに、微弱な雷魔法を用いて操手の頭脳に転送する術も確立されている。

一般どころか軍にも、冒険者組合の部隊にすらも広めてはいないんだがね」

「ほう？　くくく、だとすると前の機体、ぶっ壊れた『フロズ・ヴィトニル』で不満だった点は、全て解決されるわけだ。なら何の問題も無いんじゃないか？」

無精ひげを生やした赤毛の男が、にやりと笑って言う。その男は、カナドと呼ばれるはるか北の地方風の衣装を身に纏っていた。ダライアスが、頭を抱えて言う。

「馬鹿を言うな。周辺の小隊単位の情報ならともかく、中隊規模の情報を整理せずに頭に直接叩き込まれてみろ。気絶するぞ。

そして大隊規模にでもなってみろ……。死ぬぞ。比喩じゃ無しに。

鼻血と耳血と、血の涙流して口からも血を吐いて。
動物実験で、そういう結果が出てる」
「……そいつは勘弁だな。頭に叩き込まずに、映像盤に映すんじゃダメなのか？」
「小隊規模なら、ソレでもいいさ。だが小隊規模ならマップ表示せずに、目視とかで戦術情報を得た方が早い。
で、中隊規模以上になるとだな。映像盤に戦域情報流すと、操縦の邪魔になるだけじゃなしに、映像盤一枚じゃ足りなくなる。実験用の機体では、予備の映像盤を操縦槽に組み込んでみたが……。
大隊以上だと、もうだめだ。
結局は今のところ、旧来のシステムを使った方がいいって事だよ。
……せめて通信システムだけは、さっき言った新型にしてやろうか？
値段的には、高くつくがな」

赤毛の男は、芝居がかった様子で落胆を表に出すと、頷いた。
「しゃーねえ。今現在できる範囲内で、そこが限界ってこったな」
「ああ。もし各部隊から送られて来る戦術情報を整理して、人間の脳が許容できるレベルまで……」
「……？」

急に押し黙ったダライアスに、赤毛の男は妙な顔になる。ダライアスは急にノートＰＣに向き直ると、物凄い勢いでキーを叩き始めた。
「お、おい……」
「ち、ハードディスクの中には無い。外部記憶媒体か？　……違う。と言う事は、紙媒体か！　なんてこった！」
「ちょ……」
「……あった!!」

急に部屋の端のキャビネットに飛びついて、中の古文書の類を漁り

出したダライアスは、素っ頓狂な声を上げる。その手には、ボロボロの古文書が握られていた。
彼は赤毛の男に向かって、言葉を発する。
「あんたは操手としての技量、落ちて無いだろうな？　以前会ったときは、そこそこのもんだったが……。ああ、いやいい。素人なわけが無いからな。手伝いたまえ、発掘に行く」
「お、おい発掘って……」
「必要な機材を、古代遺跡から漁ってくる。いや、機材そのものが無くてもいい。
設計書の類があれば、それを元にして今の技術で等価品を模倣して作る事ぐらい朝飯前だ」
「待てって！　必要な機材!?」
赤毛の男は、部屋から出て行こうとするダライアスを慌てて呼び止める。ダライアスは振り向いて言った。
「メモリと演算装置だ。メモリは既に魔力駆動の等価品を実現しているから、今回必要なのは機載用の超高性能演算装置……中央処理装置だな。
それを手に入れて来て解析し、等価品を作る。そして情報処理プログラムを組んで、指揮管制システムに組み込むんだ」
「読めては来たが……。つまり、だ。各部隊から得られた戦術情報を、俺の頭ん中に叩き込む前に、情報処理して簡略化して情報量を制限するってわけだな？」
「そうだ。そのために必要な機材を発掘にいく。機体は、わたしが造った実験機を貸してやるから心配するな。良い意味で特徴の無いのが特徴って機体だ」
「やれやれ……」
呆れた口調で言いつつも、赤毛の男……エルトシャン・グレイブは

不敵に笑った。

＊

そして、エルトシャンは自嘲気味に笑った。

「やれやれ、いつもは俺が振り回す立場だってのにな」

『何か言ったかね？』

「いんや？　で、どうすんだよ。あの化け物を」

彼は自機、『ドランカード・タイガー』の片腕を、そおっと遮蔽物の陰から微妙に出した。ダライアスはその機体を、『特徴が無いのが特徴』と評したが、実は面白い機構が仕込まれていたりする。

手のひらに、魔晶球――機兵の眼――が組み込まれていたりするのだ。

無論、普段はその機構は稼働していない。しかし物陰から敵機の様子を見たい場合などには重宝する。

そう、ちょうどこの様な場合だ。操縦槽の映像盤の片隅にウィンドウが開き、そこに一機の赤茶色をした機兵らしき物が映し出される。

いや、それは機兵であっただろうか。それはこの巨大な人工的地下空洞の中を、浮遊して自在に飛び回っている。機兵には……少なくとも現代の機兵には、空を自由自在に飛翔する能力は無い。

その姿は怪物的で、あちらこちらに銃砲の砲口が見受けられた。そして今この時までの戦いで、その銃砲が一般の機兵用魔導砲とは一線を画す威力を持っている事は、エルトシャンとダライアスには痛い程に理解できている。

ダライアスは溜息交じりに言葉を発する。

『なんとか撃墜してくれ』

「なんとかってな、オマエ……。こんな敵が一機の状況で、だだっ広い

こんな場所じゃあ、戦略や戦術を論じる意味も無え。相手より強力な戦力をぶつけて叩き潰すのが基本なんだがな。
あとは戦術よりも下のレベル、戦闘って分類になる」
『それは理解してるとも。しかし……』

一般的な機装兵の背中に巨大な機動ユニットを背負わせた、砲身と銃砲のカタマリみたいな一風変わった機装兵、ダライアス機『アーチャー・フィッシュ』が遮蔽物から飛び出す。
一見鈍重そうなその機体は、しかし背中の機動ユニットと、強化されているらしい関節構造により、異様なまでの機動性を見せる。
そしてその手に持たれたライフルから、砲弾が次々と吐き出された。機動ユニットに接続されている機関砲からも、火線が伸びる。弾は正確に、敵機の関節を撃ち抜く。
いや……撃ち抜いた様に見えた。しかし敵機の関節部は、まったくダメージを負っていない。
次の瞬間、いままで『アーチャー・フィッシュ』が居た場所へ膨大な火力の渦が押し寄せた。敵機が発射した、噴射推進弾や砲弾の嵐だ。『アーチャー・フィッシュ』は見た目からは信じ難い機動性で、全て躱していたが。
ダライアスは機体を遮蔽物の陰へ戻して来た。

『……これだ。相手が機兵だったら、これで関節が貫けて、行動不能にできるんだがな。
どうやら関節のフレーム自体が、装甲と同じ『エネルギー伝導素材』らしい。未だに生きている機体があるとは思っていなかったが。
しかも火力が違い過ぎる。射撃戦主体の『アーチャー・フィッシュ』とほとんど変わらない設計思想で、しかも機装兵を破壊できる威力の銃砲や噴射推進弾……ミサイルを大量に搭載している。
……火力で負けてるんだ。
幸いなのは、無人で動いているらしい事だな、おそらくだが……。動きが鈍いし、反応が単調だ』

「……やっぱ、機装兵(きそうへい)じゃないのかアレ。しかも無人機だと？」
『……聞かなかった事にしといてくれ。組合との契約上、話せない』
「契約は大事だな。一つ貸しだ」

そしてエルトシャンはこの地下空洞の様子を書き取ったメモを左手で開く。

「ま、これしか無えな。……おい、奴の注意をひきつけるからちょっと頼む」
『何をする気かね？』
「つまりだ……」
『フム、ならばそれは……』

二人は機体を遮蔽物から遮蔽物へと移動させながら、計画を話し合う。その間にも、遮蔽物の周辺には着弾の爆炎が上がる。
そしてエルトシャンの『ドランカード・タイガー』が遮蔽物から、中盾(ミディアム・シールド)を構えて飛び出した。彼は巧みな機動で噴射推進弾(ミサイル)を躱し、砲弾を盾(シールド)で防ぐ。
しかし砲弾の火力で、盾(シールド)はあっと言う間に破壊されてしまった。そして次の砲弾を、エルトシャンは機体の左腕そのもので弾く。無論、左腕は吹き飛んだ。が、機体の本体は護られた。

「今だ！　やれ！」
『わかった、わかった』

続けて遮蔽から飛び出した『アーチャー・フィッシュ』が、ライフルを連射する。その弾倉は、特殊弾の物に入れ替えられていた。
蛍光ピンクの訓練用ペイント弾が、正確に敵機のセンサー系を……メインカメラとサブカメラを塗りつぶして行く。
同時にエルトシャン機が、残された右腕で手榴弾(ハンドグレネード)を投げた。それは敵機を巻き込んで炸裂すると、周囲に煙幕をまき散らした。

この煙幕の粒子は、様々な属性の魔力を帯びている。これを敵指揮官機に用いて通信妨害を行うのが、本来の用い方だ。だが今回は、これを敵機のセンサー妨害に使ったのだ。

作ったのは当然ダライアスだ。あくまでも実験装備である。実用装備にするには、まだまだ費用対効果の面から、程遠いのだ。

というか、ぶっちゃけてしまうと今のままでは高価で一般兵レベルには配備ができない。こんなもんは、数を配備しないと意味が無いのだ。まあ、なんにせよ敵の眼は潰され、砲撃は止んだ。

『で、次はアレか』

「ああ。潰されるなよ?」

二機の機装兵は、装備を持ち替える。『アーチャー・フィッシュ』は長距離支援用の大口径砲を構え、『ドランカード・タイガー』は腰に戻しておいた長剣を抜き放った。

「これがカタナだったらな」

『贅沢言うな』

ダライアスの機体が、大口径砲を撃ち放つ。それは地下空洞の天井からぶら下がっていた、重量物運搬用クレーンと見ゆる構造物を撃ち落とした。それは狙い過たず、その真下を浮遊していた敵機にブチあたり、落下させる。

破片が飛び散り、敵機の赤茶色と、クレーンらしき構造物の黄色と黒が混じり合った。いや、赤茶色はとても頑丈で砕けず、黄色と黒の破片ばかりが飛んだが。

舞い散る破片と土煙の中を、エルトシャンは自機を走らせた。そして全身全霊の魔力を機体の魔導炉に叩き込む。

緊急出力レベルのパワーを強引に絞り出した魔導炉が転換炉を駆動し、そこから送り出された黒血油が機体全身の魔力収縮筋を稼働させる。

機装兵『ドランカード・タイガー』は渾身の力を込めて長剣の切っ

先を、動きが取れないでいる敵機の背中に突き入れた。

「くっ!!　堅ぇっ!!」

だが何とか長剣は、『エネルギー伝導装甲』を突き破った。幸いだったのは、背部機動ユニット部分が、構造上装甲板をどうしても薄くせざるを得ない箇所であった事か。

いかに分子間にエネルギーを通す事で疑似的に分子間引力を強化し、その強度を劇的に増す『エネルギー伝導材』であっても、やはりその厚さによる限界はあったようだ。

エルトシャン機の長剣の切っ先は、敵機の主動力機関を見事に破壊してのけた。

「ふぃーっ……。これで」

『あ、補助動力起動を感知。逃げたまえ』

「なにーーーっ!?」

『大丈夫、背部機動ユニットも死んでいるし、補助動力でいつまでも動けるものでもない。逃げ回っていれば、すぐに停まる』

「先に言えよ!　これも一つ貸しにしておくからな!」

その後、彼らは敵機が停止するまでの間、逃げに逃げたのである。

＊

赤茶色の敵機をパーツに解体して、『ドランカード・タイガー』と『アーチャー・フィッシュ』の二機に分けて積んだ後、彼らは敵機が出撃してきたカムフラージュされた施設を調べていた。

施設の中は暗く、調査は難航する。

「と言うわけで、予想以上の収穫があったわけだが」

「そらそうだろうよ。約束だから口にはしねえが、旧人類の兵器じゃ

ないかなーなんてもんを拾って帰るんだからな」
「口に出してるぞ」

ダライアスは唇の端を吊り上げ、不器用に笑う。

「パイロット無しで出撃して来た第四期型が、ほぼ無傷で手に入るとはな。第五期型じゃなくて、良かったよ。
しかしコレで、人格型人工知能（AI）を載せられるだけの演算システムの見本が手に入った」
「……ほんとに隠す気あるのか？　契約あるんだろう？」
「おいといてくれ。これだけの情報処理システムの理論が解析できれば、あんたの機体に載せる指揮管制システムの完成は目前だ」

そしてダライアスは、呟く様に言う。

「そうだな名前はシステム・ハンニバルといった所か」
「あん？なんだよ、そりゃあ」
「旧暦時代の英雄だよ。ハンニバル・バルカ。奇才に長（た）けた軍神の名前だ。
相応しいだろ」
「へっ、悪くねぇ。気に入った」
「……っと、動力装置は……コレか」

ダライアスがスイッチを入れると同時に、周囲が灯（あか）りに照らされる。天井その物が煌々と光っているのだ。次の瞬間、床下から三本の透明なシリンダー……巨大な試験管の様な物がせり上がって来た。
ダライアスは、それを見た瞬間凍り付く。エルトシャンは怪訝に思ったが、とりあえず口笛を吹いておいた。
三本のシリンダーには、美しい、しかし年端もいかない、どことなく無機質さを感じさせる少女が一人ずつ、計三人封じ込められていた。ダライアスは、凍り付いたように動かない。

ダライアスのその顔色は蒼褪めて、表情は驚愕？　恐怖？　によって引き攣っていた。

「おいおい……。どうしたもんかね、こいつぁ……」

エルトシャンは笑みを浮かべつつ、口からは愚痴を吐く。どうやらとんでもない厄介事に巻き込まれた様だった。

Ｆｉｌｅ６「足なんてキャタピラです」

運転技術では、誰にも負けない。それがダウルツに残された矜持だった。

ダウルツには姓は無い。貧乏人どころか極貧の三男だった彼は、だが必死の努力で金を貯め、一般の常識の二年遅れで学校に入った。

馬鹿にされつつも、必死の努力で学び、優等とまではいかないがそこそこ優秀な成績で初等科、中等科を卒業した。

だがそこで躓いた。

彼には夢があった。いつかあの全高八メートルの人型兵器、機兵の操手になると。いつか金を貯め、低級な従機でもかまわない、機兵の乗り手になるのだと。あの戦場の覇者、陸戦の花形たる人型兵器、機兵を操る身分になってみせると。

だが中等科を卒業し、いざ操手になるための手段の１つである、操手教育専門の私塾――引退した同盟軍人が教えている――の門を意気揚々とくぐった彼は、そこで挫折と絶望を知った。

＊

彼には機兵の操縦士たる、操手の才が無かったのだ。

＊

そこの私塾に置いてあった、最低位の従機ですらも、彼にはまったく反応を示さず、ぴくりとも動かなかった。機兵の類は格が下がるに従い……低位になるに従い、動かしやすくなると言う物なのだ。だがしかし、最低位の従機は彼に対し、何の反応も見せなかったのである。

……私塾の塾頭である老いた元軍人は、彼に残酷な事実を告げる。まれに……。ごくまれに、機兵の心臓である魔導炉と同調する才が、まったく無い者がおり、彼がそれである、と。

もしも少しでも同調できる能力があったなら、血のにじむ努力で伸

ばす事は可能だ。だがこれまで時折発見される、才がまったく無い者は、どうにもならないと。
彼は必死にあちこちの私塾や学校を駆けまわった。しかしどこでも同じ事を言われた。医者にもかかった。病気ではないから、と門前払いされた。酒に溺れた。酒に溺れても、どうにもならなかった。
そして今、数年を経てダウルツは立ち直り、大型蒸気車両を用いて様々な工事現場で重宝される作業員兼運転技術者（ドライバー）となっていた。

＊

「ふうー」
「よう、おっちゃん。コレ飲みなよ」
「よう、あんがとよ、操手（そうしゅ）さんやい」

若い作業用従機（じゅうき）の操手（そうしゅ）が、ダウルツに清涼飲料水を放ってよこす。それを飲みながら、彼は旧式従機（じゅうき）『ミメラ・スプレンデンス』を見上げる。
心の傷は疼（うず）いたが、さりとてソレを面に出すほど若くはない。

「おっちゃんと組めて、ありがたいよ。こっちはまだまだ未熟者だからな。おっちゃんは、それを見越して荷物を持ち上げやすい場所に車両をセンチ単位、いやミリ単位で寄せてくれる。
あと、盛り土や砂利を運ぶ時も、しんじらんねー速度で正確に荷下ろしする。
ったく、あのバカ監督。おっちゃんだったら、俺より高い給料取ったって損にゃならんてえのに」
「いやいやいや、操手（そうしゅ）はエリートだからな。それを押しのけて俺が高給取ったら、今度は俺が針のムシロだよ。しかしお前さん、エリートにしちゃ腰低いな。
くくく。普通、こんな工事現場に来るとしても、もっともっと偉くなるための勉強の合間のアルバイトだ。監督さんからすりゃ、『来て

いただいてる』って立場なのによ」
「俺はエリートじゃないからな」
若い操手(そうしゅ)は微笑んで言った。どこか苦いものを感じさせる笑いだった。
「こないだ私塾を卒業したばっかりさ。で、なんとか貯め込んだ金も尽きた。この機体だって冒険者組合配下の、この街……デイリーフの冒険者組合支部が死蔵してた機体を、口八丁手八丁でなんとか安値で借りだして来たんだ。
俺はエリートさんじゃないどころか、極貧の小作人の四男でさ。それこそ爪に火を灯す様にして貯めた金で、三年遅れで中等科を卒業して、私塾に入ったんだ。
……今に見てろよ。金を貯めて、自分の機兵(きへい)を手に入れてやる」
ダウルツは理解した。この若造は、才能がかろうじて有った場合のダウルツそのものなのだ。
「そうか。応援してるぞ。頑張れよ！　……さて、監督がそろそろ怒りそうだ。工事の続きといこう」
「おうよ！」
ダウルツは、なんとなく少しでも救われた気がした。まあ、自己欺瞞(じこぎまん)だと言うのは百も承知なのだが。

＊

で、その若者の操手(そうしゅ)がしばらく仕事を休んだかと思うと、今度はヨレヨレの白衣を着崩した、眼鏡をかけたガリガリのひょろっと背の高い、ボサボサ頭の青年を連れて来た。
ちなみにその周囲を、赤、緑、青のコートに身を包んだ、一見する

と十三〜十四歳ぐらいの子供にしか見えない少女たちが、油断なく固めている。
更にそれと連携して、上から下までみっちりと金属鎧で身を固めた重戦士が、護衛に就いている。
青年の傍らで様々な書類を青年に手渡している秘書っぽい無表情美少女は、しかしそれこそ、十三〜十四歳ぐらいに見えた。
その眼鏡の青年は、現場監督に何か書面を見せて、しばらく見学させてほしいと言う。現場監督は、下にも置かぬ扱いでその青年を迎えた。

「なんだってんだろな、あの男は」
「あのひとは、自由都市同盟でも片手で数えられるほど高位の、多数機兵関連技術を会得した開発技術者、ダライアス・アームストロングさんですよ。
あの人が機体に施してた仕掛けのおかげで、俺はこないだ運よく命拾いしました。
……まあ、あの人が俺に安く作ってくれた試作品従機。……そのテストを兼ねた冒険に、強引に駆り出されなきゃ、その危険にも遭わなかったんですけどね」
「ほう！　それじゃ、お前さんとうとう機兵持ちかよ！　おめでとう、よかったなあ！」
「あはは、ありがとう。たださあ、まだそれでもローン残ってるんだよなあ。ちょっと壊れたから、その修理代も……。もっと稼がなきゃ」
なるほど、壊れたからそれで、何時もの組合支部から借りた従機、『ミメラ・スプレンデンス』に乗ってるわけだ。納得したダウルツだった。
……と、そのダライアス師が、こちらへやって来る。
「貴方がダウルツさん、ですか」
「さん付けで呼ばれるような男じゃないぜ？」

「ならダウルツ。君に依頼がある。新型の、機兵支援用車輌の試験運転技術者だ」
「へ？」
唖然としたダウルツだった。

＊

うかつに『ああ、うん』などと呟いてしまったのが運の尽き。ダウルツはデイリーフの街の工事現場から、自由都市同盟首都、中央都市アマルーナの冒険者組合本部まで連れてこられてしまった。
そこで見せられた物に、ダウルツは思わず叫び声を上げる。
「な、なんじゃこりゃあぁ!!」
「今にも路地裏でチンピラに刺されて死にそうな叫びはやめたまえ。この『車両』の運用試験には、君の運転技術が、是非とも必要なのだ」
そこにあったのは、下半分が履帯……キャタピラを装備した車両、上半分がぶかっこうな従機の上半身と言った代物であった。
背中には、大きな背負子が取り付けられている。腕の先端は手ではなく、四連装魔導砲になっていた。
「い、いや、しかしよ。上半分、どう見ても機兵じゃねえか。俺は……」
「操縦系は、機兵の物ではない。あくまでレバーとハンドルで操縦するだけの、『モドキ』だ」
「……。まあ、俺に動かせるもんなら、いいけどよ」
「どういう意味かね？」
ダウルツは、ふっと微笑みを漏らし、言葉を紡ぐ。
「俺はよ。機兵の操縦の才が無えのよ。今まで、どんな低位従機の魔導炉ですらも、俺に同調してはくれなかった。

……ぴくりとも動かなかった」
「ふーん」
「ふーん……って、オマエ……」
「そんな事はどうでもよかろう？　君にはこれを動かす事ができる。あの工事現場で見た、君の精緻（せいち）な運転技術。わたしが必要としているのはソレだ」

一息ついて、ダライアス師は言い放つ。
「あの精密な技量は、どれほど高位の機兵（きへい）乗りとて持っているものではない。それこそ……。
そこに居るアレクシア・アーレルスマイアー都市同盟軍（としどうめいぐん）大尉が、わたしの見た事のある操手（そうしゅ）のうちでは唯一、かろうじて比肩し得ると言ったところだ。
言っておくが、彼女は色々と残念なところがあるために出世できないだけで、本来ならば将軍職に匹敵する腕前を持っているからな？」
「だ、ダライアス師、貴官は褒（ほ）めているのか？　貶（けな）しているのか？　はっきりさせてくれないか？」
「両方だ」

崩れ落ちるアレクシア大尉を尻目に、ダライアス師は言った。
「君はもう、ついうっかりかも知れんが、書類にサインをしてしまっている。何が何でも、これに乗ってもらうぞ」
「……上等だ。乗ってやろうじゃねえか」

ダウルツの心に、火が付いた。わずかに残されていた彼の矜持、運転技術ならば誰にも負けないと言う自負をくすぐられた。
しかもエリートたる都市同盟軍（としどうめいぐん）大尉に比肩するとまで言われて！
「これで燃えなきゃ、男じゃねえよな」

＊

そしてしばらく、彼は運転漬けの日々を送った。と言うか、運転漬けはいつもの事ではあったが、内容がハード過ぎたのだ。

ちょっと動かしては感想を聞かれ、小休止の間にはレポートを書かされ、試作車がハンガー入りして改装が行われている間などは『ようやく休める』と思ったのもつかの間、試作二号車でのデータ取りが待っていたり。

その分たっぷり報酬はもらえたが、使うヒマなど、ありはしなかった。

「だがようやく……。試作車の完成、か。つ、疲れたぜ……」

「ご苦労だったな、ダウルツ。これはありとあらゆる場所で、機兵を支援する事になるだろう。

両腕の先に装備した、四連魔導砲での火力支援。擱座した機兵を回収し、基地まで連れ帰るための背中の背負子。この背負子には、戦闘前の往路には大量の荷を積んで行けば良い。

しかも操手としての訓練もいらないんだ、これは。値段も馬鹿みたいに安い。まあ普通の車両よりは高いが、それでも新車で、中古従機の三分の一にも満たない価格だ」

「そうか……。これでお役御免となると、少し寂しいものがあるな」

「何を言っている。一応の完成は見たが、更なる改良を目指し、まだまだ試験は続くぞ」

「はぁ!?」

ダライアス師の言葉に、ダウルツは阿保面を晒す。そのとき、ダライアス師の懐の携帯多機能通信魔導器（ENIGMA）が呼び出し音を鳴らす。ダライアス師はENIGMAを開いた。

『ダライアス師！　今すぐに機兵で出られるかね!?』

「開発局長ですか。何事です？　わたしは技術者であって、冒険者じゃないんですがね。わたしとの契約内容には、抵触しないんですか？」
『抵触する！』
「するんかい」
『だが、今使える魔装兵はおらん！　射撃武器を得意とする、君でしかできない事なのだ！　そこを曲げて願いたい！』

通信機の向こうからは、兵器開発局局長の悲痛な叫びが響く。少女のソレならばともかく、おっさんのソレは耳障りで仕方が無かった。

＊

隊列の最後尾にいるダウルツの機兵支援／回収車両一号試作車に、中衛にいるダライアス師の機装兵『アーチャー・フィッシュ』から通信が入る。

『君まで付いてこなくても、良かったのだよ？』
「いいんだよ。問題の集落……サパヌ村は、俺の故郷だ。
問題の翼竜に、六人も食われちまったそうじゃねえか、男衆がよ。
……極貧の寒村で、働き手が六人も殺されたあげくに、畑を耕す畜獣が食われまくっちゃ、下手すりゃその集落は終わりだ。いや、たぶん間違いなく終わりだよ。
局長さんとやらが、旦那を無理に指名してまで翼竜始末しようとしたのは、間違いじゃねえよ。サパヌ村が潰されて、食い物に困る様になったら、翼竜は飛ぶんだろ？
山は普通の手段じゃ越えられないが、飛べば越えられる。そしたら即、デイリーフの街だ」
『デイリーフの街は、物流の拠点。破壊されたら、いえ一寸した騒ぎになるだけでも、大損害』

中衛にいる『アーチャー・フィッシュ』の陰にぴったりと付き従う機装兵『ドランカード・タイガー』から、無感情な声が通信で届いた。例の秘書役だ。その周囲を固める様に、赤、緑、青に塗られた従機『ミメラ・スプレンデンス』が護っている。

その他の機体まで、全部合計すれば機装兵三機、従機六台、車両一台のけっこうな大部隊だ。冒険者組合と、そこに依頼してきた国が、どれだけこの事態を重く見ているかの表れだ。

都市同盟軍は諸般の事情あって、正規部隊は動かす事はできない。ダライアス師の護衛とか秘書になっている大尉と中尉をこの件で動かす許可が出ただけ、満足せざるを得ないだろう。

先頭を行く、標準型にちょっと手を加えただけに見える機装兵『ロイヤリタートＴｙｐｅⅣ』から、声が届いた。

『そろそろサパヌ村だ。気をつけろ。口惜しいな……せめて低空に降りてこなければ、翼竜にはわたしの刃は届かぬ……。一応魔導砲は持って来たが、射撃技量については最近初歩からやり直している途上故に。

……!!』

サパヌ村は、鮮血に塗れていた。わざと食い散らかしたのだろう、畜獣の残骸がばらまかれている。いや、畜獣だけではない。……人間の残骸も、ばらまかれていた。ダウルツは息を飲む。

……人と畜獣の残骸と、わざと原型を残したのか粗末な家々……掘っ立て小屋に等しいが、それらの中央、村の井戸がある広場に、ソレは居た。井戸に長い首を突っ込んで、ごくごくと水を飲んでいる。そしてそれは首を上げた。

赤い瞳が、一同を射抜く。ダライアス隊に随伴してきた従機の操手が、泡を食って砲火を撃ち放った。

『うわっ！　うわ、うわわ!!　わあああぁぁぁ!!』

『馬鹿、まだ早い!!』

制止した声は、ダウルツにダライアス師を紹介した、あの若い操手だった。だがその警告も虚しい。射撃は大きく的を外した。いや違う。撃たれた相手が、さっと身を躱したのだ。

あきらかに、こちらを馬鹿にしている。翼竜が、飛ばずに脚力だけで射撃を躱してみせたのだ。

そして炎の吐息による返礼が来る。やみくもに撃ちまくっていた従機『センクリクテ・クラーベ』の一台が、灼熱の圧力鍋になった。

従機の防御力は弱い。打撃に対しても、熱に対しても、だ。搭乗していた操手は、操縦槽の中で良く焼かれた肉の塊になり果てた。

ダライアス師が、射撃命令を下す。

『総員、魔導砲装備！　敵に向かい、三時方向から十二時方向に向け、掃射！』

『『『『「了解！」』』』』

全員が叫び、各々の機体が一斉に魔導砲を撃ちまくる。

無論ダウルツも、乗っている機兵支援／回収車両一号試作車の上半身両腕に搭載されている、四連魔導砲二基を撃ちまくった。

単純な火力では、魔導砲一門だけの普通の機兵を凌駕している計算になる。

さすがにこの密度の砲火を受けては、翼竜とてたまらない。大きく羽ばたき、上空に飛翔して回避したのだ。だがそれがダライアス師の狙いだったらしい。

「グギェエエエェェェアアアァァァ!!」

耳障りな絶叫が響く。翼竜は、両翼の皮膜を引き裂かれ、地上に墜ちる。

ダライアス師の機装兵『アーチャー・フィッシュ』は、白兵武器をほとんど持たない代わりに、砲戦能力は極めて高い。翼を破壊された

おまけで翼竜は、片目までもを失っていた。
しかし翼竜は、再度絶叫する。

「グガガアアアォォォアォォォォ!!」

それは苦痛の叫びでは無かった。周辺の家々が吹き飛びその下から幾匹もの、幾頭もの、多数の魔獣が現れたのである。

『伏兵!!』
『ば、馬鹿な！　魔獣が……翼竜が部下を使い、あまつさえ戦術を……』
『現実を見ろ、アレクシア大尉！　考察などは後で良い！　今は敵が策を用いている事、そしてこちらもそれに対処せねばならん事が大事だ！』
『りょ、了解、少佐！』
『……退役、違う。……予備役技術少佐、だ』

ダライアス師の指揮の元、一瞬崩れそうになった味方たちは、秩序を取り戻す。そして整然と反撃を開始した。

＊

横転した一号試作車から、ダウルツは必死で這い出した。味方従機の一台をかばい、装甲された蜥蜴の様な姿をした中型魔獣の体当たりをくらったのだ。
ダライアス師の指揮と戦術は適切であったが、だがゲーム盤の盤面や、その下にあるちゃぶ台をひっくり返せるほどの奇跡的な力量ではない。
この場合、勝利はなんとか可能だが、ある程度の損害は覚悟せねばならなかった。そしてその犠牲者に入りかけたのが、ダウルツがかばった従機の操手であり、犠牲者になるのがダウルツだと言うことな

のだろう。
眼の前には、片目を潰されて両翼の皮膜を破り取られた翼竜が、それでも良き獲物を見つけたとばかりに、にやりと嗤った。爬虫類顔で嗤えるだろうか、と言う問題は残るが、ダウルツにはそう感じられたのだ。

『うおおおぉぉぉ!!』
「!?」

そして従機『センクリクテ・クラーベ』の改造機と思しき機体、あの若い操手が乗っていた機体だが、それが槍を構えて突撃を敢行し、翼竜の胴体を刺し貫く。翼竜の絶叫が上がった。

「グァギャァァァァァァァァァァァ!?」
『に、にげろ、おっさん!!』

翼竜は槍の刺さった胴体をねじった。その力だけで、非力な従機の腕から槍が吹き飛んだ。
従機は転倒し、膝関節をねじってしまい、動けなくなる。翼竜は、再度にやりと嗤うと、炎の吐息を吹くために大きく息を吸い込む。
なんてこった、あの若いのがやられちまう。誰か、誰かいないのか。ダウルツは慌てて周囲を見回す。
一番強そうだったアレクシアとか言う大尉……。だめだ、三匹の魔獣を相手に丁々発止の戦いで手が離せない。
ダライアス師、今こそあの神業的射撃を……。だめだ、気付いてはいるが全体の指揮と、何より今は弾倉を入れ替えてる最中だ、間に合わない。
ダライアス師の護衛や秘書が乗る機体……。だめだ、ダライアス師の『アーチャー・フィッシュ』を護るので手一杯だ。
最後の一台、俺がかばったあの従機……。だめだ、別の魔獣に追われて、逃げ惑ってる。誰か、誰かいないのか。

焦るダウルツの目に、1台の従機、『センクリクテ・クラーベ』が映る。最初に翼竜の吐炎を浴びて、操手を蒸し焼きにされた機体だ。ダウルツは、それが呼んでいる気がした。

彼は疾走し、その操縦槽からこんがり焼けた遺体を引き摺りだす。幸いなことに、もう機体の熱は冷めていた。

そして操縦槽の操縦席に座り、学生時代に幾度となく勉強した通りの、機体起動手順を行う。

ダウルツは思い願う。一度だけでいい、一度だけの奇跡を起こしてくれ。神でも悪魔でもいい。俺の願いを聞いてくれ。

＊

奇跡はあっさりと起きた。ダウルツが乗った『センクリクテ・クラーベ』は、機敏な動きで転がっていた戦斧を拾うと、疾走。

一瞬で戦闘速度に達した機体は、稲妻のごとき一撃を、敵の斜め後ろからその首筋に振り下ろした。

＊

冒険者組合のガレージに戻っても、ダウルツは首を傾げていた。

「……いったい何で、機兵が。……従機が動いたんだ？　あの一時だけじゃない、その後もずっと、従機を動かせてる？　俺が？　俺が??」

「そりゃあ普通はそうだろう。理論上、機兵を起動すらできない人間は、まず存在しない。新人類の類ならばな」

「だ、だが俺は……」

ダライアス師に反論しようとするダウルツだったが、ダライアス師は言った。

「適性が、極めて低かった。ただそれだけだ。今の従機は最低ライン

で十の適性が必要なところが、お前は六しか無かった。そう言う事だ。試験運転技術者に任じた際に身体検査したろう？　アレで、そう言う結果が出てた。
普通は亜人も含めて人類なら、最低で一の適性は持っている。機兵に乗れないから、その適性を磨く方法が無いだけでな。極々まれに、本当にまれに適性が本当に無い者もいるんだが……。そう言うのは代わりに何かしら、特別な才能を持ってるのが、基本パターンだ。しかしお前はそうじゃなかった。
でもって、アレだ」

ダライアス師は、ボロボロになった一号試作車を指さす。

「アレはレバーとハンドル操作だけで操縦できるが、補助的に、あくまで補助的に、従機の操縦機器も埋め込んである。あくまで操手の能力を持つ者が運用する際の、補助としてな。
だが、レバーやハンドルと言った操縦装置の補助と言う形に作った結果、ソレがお前を操手として成長させる働きをした様だ。あくまで偶然の産物だがな」
「そ、え、あ、それじゃ……オレは……」
「あの『センクリクテ・クラーベ』の動きから見て、さっきの指針で言えば、二十七・五ぐらいまで適性が成長しているのではないか？　機装兵にはちょっと厳しいが、低位から中位の従機ならば余裕、楽勝だな」
堪え切れない喜びが、ダウルツの腹の中からあふれ出す。彼は爆笑した。
「はは、ははははは、あははは、ぃやったあああぁぁぁぁぃ!!　ばんざあああぁぁぁぁぃ!!」
「……」
「ははは……。は、ど、どうしたんでぇダライアス師？」

不機嫌そうに、ダライアス師は言った。

「報告が、握りつぶされた」

「は？」

「翼竜にアレだけの知能があり、戦術を駆使したなどと、大笑いだ、とな。そして実際に大笑いされた。本気にされなかったよ。一人、操手が死んでいると言うのにな。

アレクシア大尉が軍の方に報告したが、そちらでも笑い飛ばされた。伏兵じみた展開になったのは、あくまで偶然だろう、影に怯えるのもいいかげんにしろ、と言う叱責まで付け加わってな。

あの翼竜、おそらくは表面的ではない部分で……。頭脳的部分で、変種だったのだろうさ。そしてソレさえも捨て駒とした威力偵察……。考え過ぎだと、良いのだがな」

ため息を吐き、ダライアス師は踵を返して立ち去って行った。それを見送った後、ダウルツは相棒のところへ歩み寄る。一号試作車は、魔獣に追突されてひっくり返ったのを従機で無理矢理起こしたので、傷だらけだった。

だが骨格に歪みは無く、そのまま満足に使用できる。ひたすら頑丈だった。

「……ありがとよ。お前のおかげだ」

ダウルツは、しみじみと言葉を漏らした。

＊

その後もダウルツは、一号試作車と二号試作車で、試験運転技術者を続けた。その報酬で、中古の低位従機を購入、悦に入ったりもした。

だが同時に彼は量産型機兵支援／回収車両の一番最初のモデルが

発表されると即座に購入、基本的に仕事は全てそれで行ったと言う。
冒険者たちは腕が立ち、仕事が堅実で操縦が繊細(せんさい)な彼を特に選び、
擱座(かくざ)した機兵(きへい)の回収を依頼したものである。

Ｆｉｌｅ７「次なる戦場へ」

安っぽい。それが、そいつを見たときのカイクスの第一印象だった。

「見た目で安っぽいと思ってるだろうが……」

開口一番そう言ったのは、冒険者組合所属の兵器開発局局長である。彼は続けた。

「実際安い。値段だけじゃなく、運用にかかる経費もな。

これの開発者は今、軍の方にも説明しに行ってる。バフォメット事変による被害を立て直すため、軍は今少しでも機体や操手が欲しいところだからな。内心複雑ながら、安価な機体を歓迎しているらしい。

同じ事は、ウチにも言える。あの化け物魔獣のせいで、失った物は数多いなんて言葉じゃ表せない。冒険者たちに対する支援、組織そのものの再建などなど」

バフォメット事変と言うのは、昨年の年末からこの年の初頭にかけて自由都市同盟を襲った一連の魔獣災害を指して呼んだ言葉だ。

何があったかと言うと、魔王級とまで呼ばれる超絶絶頂に強力な巨大魔獣バフォメットが、自身が率いる強大な八万の魔獣軍団と共に自由都市同盟南部を蹂躙しつつ北上し、首都である中央都市アマルーナの目前まで迫ったのだ。

幸いと言って良いのか分からないが、バフォメットそのものは多大なる犠牲を払って撃滅に成功した。しかし自由都市同盟の南半分の土地は致命的なダメージを受け、都市同盟軍もまた大きなと言う言葉では表現しきれない程の大打撃を受けたのだ。

それはともかく、カイクスは眼の前の機体の姿に、首を傾げる。

「これ、今までのどの系列機でも無いですよね？」

「ああ。ただ、アイディアの元になった機体はあるそうだ。もっとも、そのアイディア元の機装兵も、その男……ダライアス・アームストロング師の作品ではあるのだがね。

たしか、ここに資料が……。ああ、あった。

アイディア元の機体は、機種名が『アーミィ・アント』……。昔に聖王国から輸入された『ミーレス』系列機の基礎構造を流用し、改良を加えた機体だな。量産性が高く、運用にかかる費用がべらぼうに安い上に、操手データをカートリッジ移殖できるから緊急時の乗り換えも楽。

パーツ強度がべらぼうに高いため、ニコイチ、サンコイチ、ヨンコイチでの復旧が容易……。

その『アーミィ・アント』から、直接血筋は繋がっていないものの、設計思想を受け継いで更に発展させたのが、コレだそうだ」

局長は視線をその機体に再度移す。カイクスもまた、その眼前にある二機の機体を再び見つめた。いや、二『機』と言ってよい物だろうか。

カイクスは、ソレを二『台』と呼びたくて仕方がなかった。いやサイズは明らかに機装兵で、頭と思しき構造物も付いている。しかしどう見たって、デカい従機だ。

「言いたい事はわかる。だが能力的には機装兵だ。この従機くさいデザインは、量産性を徹底的に突き詰めたが故だ」

「……この二『機』、上半身はそれぞれ別ですが、下半身は両機とも同じに見えますね」

「同じだ」

「……」

「タイプDR共通戦術歩行システム。まったく同じ下半身の骨格と、機兵の心臓部である魔導炉を組み込んだ腰。どちらの機体の下半身も、完全に共通の設計で作られている」

クレーンが、二機の上半身を吊り上げ、取り外して行く。そして別の上半身を、空いた腰の上に載せ、接続する。
あっと言う間に、安っぽいのは変わらないが、そこにあった二機は別の種類の機装兵（きそうへい）に変化していた。

「……なんか、物凄い可能性を見た気がするんですが、気のせいですか？」
「気のせいじゃないぞ。下半身は大量生産品、上半身は顧客のニーズに合わせたオーダーメイドと言う作り方もできる。また、上半身も規格を揃えた大量生産品にすれば、大口注文受けた時とか非常に楽だ。
そして今ダライアス師が検討してるのが、右腕、左腕、胴体中央、頭でバラバラに色んなタイプを造って共通の下半身の上に組み付けると言う計画だな。その組み合わせで、様々なタイプの機装兵（きそうへい）を、たいした作業量なしに実現すると言うものだ。
まあ、それの実現はまだまだ先だが。とりあえず今は、色々な上半身と共通下半身を大量に用意して、可能であれば軍に売りつけたいな」
「うーん、いいことづくめに聞こえますけど、何かデメリットは？かっこわるい以外にも、あるんでしょう？」

局長は、苦笑する。

「それは無論だな。最大の欠点として、限界性能の低さが挙げられる。
従来の『ミーレス』系列機は、カスタマイズによる限界性能が極めて高いのも売りだったが、これはそこをきっぱり諦めた。
いや、拡張性自体は高いんだ。一見カッコ悪い箱型の筐体は、新たに内部機器を組みつけたりする改造がやり易い。ただ、素体そのものが安すぎるため、そう言った形でない強化改造、直接にスペックを上げたりするチューニングは難しいんだな」
「ふうむ……。ああ、肝心な事を訊くのを忘れていました。
……自分が呼ばれたのは、いったい？」

「ああ、それはだね。この機体の試験操手(テストパイロット)をして欲しいんだ」
「げ」

思わずカイクスの口から、本音を乗せた異音が発せられた。まあ、さもあらん。

「自分は、単なる事務員ですよ!?」
「だが機兵(きへい)の操縦は習っている」
「従機(じゅうき)だけです！　しかも素質が低いから見限られて、訓練校を放校処分になって、仕方なしに簿記学んで、ここの事務員に!!」
「今はそんなのでも、操手(そうしゅ)と言うだけで必要になるほどの人手不足なのだよ。事務仕事をしているからには、理解できているだろう？」
「契約違反です！」
「君は契約書よく読んだかね？『業務内容は組合の都合で、変更される事があります』と書いてあったはずだが。
ダライアス師はちゃんと読んで、その条項消したぞ？　おかげで予定外の緊急の仕事を受けてもらうのに、苦労した事が何度あったか……」

カイクスは、最後の抵抗を試みる。

「辞職ってのは……」
「あー、それなら仕方ないが……。組合の機密を見てしまったね？
まずはとりあえず拘束。そしてその後は監視も付くし、あとは……」

カイクスは、屈した。

＊

そしてカイクスは、驚く。機体の動きは鈍いのだが、操縦し易いのだ。動きの鈍さは、最下級の従機(じゅうき)並であったが。

「局長、これって……」
『右に普通の機兵(きへい)には無いセレクトレバーがあるだろう？今はF、G、H、I、Jのうち、Jに入ってるはずだ』
「はい……」
『今用意してる四つの上半身には、全部その機構が組まれてる。それは機体の動きや負荷を調整することで、操縦難易度を減らすためのレバーだ』

カイクスは、乗り込む前に渡されたマニュアルを慌てて読み進める。

「これは……。Jランクで、最低位の従機(じゅうき)に相当するのか。ただしあくまでこれは、訓練用のモードであって……。Fランクで本来の動き、並の機装兵(きそうへい)の動きになる、と。
Fより上が無いってことは、この機体の限界がそこって事か」

なるほど、これならばカイクスでも操縦が楽にできる。テスト項目には、Fランクでの操縦が必要な項目も存在しているが、それは追々だ。徐(おもむろ)にカイクスは一つ一つ、機体のテスト項目をこなしていった。

＊

そしてカイクスは、ぼやいた。

「反則だよなあ……」
『教官、何を仰(おっしゃ)ってらっしゃるので？』
「ん？　お前らも、契約書はちゃんと読んでサインしろよ？」
『はっ！　了解であります！』

そう答える訓練生の契約書に、いくつも文面上のトラップが仕掛け

てある事を、カイクスは知っている。なにせ、この組合所属機兵部隊訓練中隊の、各事務処理は、『もと』事務員であった経歴を買われてカイクスがやっているのだから。

この訓練中隊は、あくまで訓練中隊と言う事で、少尉待遇のカイクスが中隊長をやっている。なおこの隊には、本来であれば操手としての才が低く、操手としての未来が無かった者たちばかりが集まっている。

機体は全てが、カイクスがかつてテストパイロットを行ったタイプDR共通戦術歩行システムに、これも組合の工房で生産した規格品の上半身を載せたものだ。カイクス機は、隊長機と言う事で大型の通信アンテナがくっついているが。

「あー、今日の訓練はセレクターをGランクまで上げるぞー。」

『『『『了解！』』』』』

元気よく応える訓練生たち。だが、返答の背後から『うぇぇぇぇ～』『あー……』とか言う声が聞こえて来るのを、カイクスは聞き逃さない。

聞き逃さないが、見逃してやる。気持ちは重々分かるからだ。かつて、自分も通った道だ。

（けどなあ……。Gランクでもまだ合格点じゃないんだよな。想定される実戦までに、Fランクを自在に操れる様に鍛えてやらんと）

そしてカイクスは怒鳴った。

「おらぁ！　B―011番！　カシワギ!!　セレクターがHランクになってっぞ!!」

『げ、す、すんません！　いえ、申し訳ありません、教官！』

「今のは単にセレクターの操作間違いか？　それとも上手く見せようとして、わざとか？」

『操作ミスであります!!』

（よーし、よしよし。馬鹿正直に『わざと』なんて言うなよな？）

もし訓練生が、馬鹿正直に『わざと』とか言ってしまったら、カイクスはこいつを鞭打ち程度の隊内処分、最悪で軍法会議開いて処罰せねばならない。

実際、以前教えた隊で、一人いたのだ。軍法会議のあげく、禁錮一年実刑をくらって除隊処分を受けたバカが。

「よし、じゃあうっかりミスの罰に、訓練終了後に腕立て百回だ。いいな？」

『ひ、りょ、了解!!』

「じゃあセレクターをGにしたら、全員グランド十週のランニング開始！」

『『『『了解！』』』』』

カイクスは操縦槽内の操縦席で、一人悩む。

（出世したのはいいけど……。給料も増えたけど……。はぁ～。なんとかコイツらを最低限従軍できるまでに育て上げないと……。ガラじゃない、ガラじゃないよ訓練教官……。最近、国境線で国境侵犯らしき事件が相次いでるらしいし……。

バフォメット事変がついこの間だった気がするんだがなあ。なんとか枯れ木も山の賑わいで、こいつらでさえも戦力化したいのは分かるけど……。こいつら生き残れるか？）

そして彼は、大きく息を吐いた。

「は～～～……。救いと、安息と、給料使うための休みがホシイ」

カイクスは大空を見上げるも、そこには金属製の天井があるだけだった。

Ｆｉｌｅ８「魔弾の射手……？」

その日ジャスターは、普通なら機兵が登れない峻険な山地の上に、あろうことか機装兵で陣取って、敵である帝国軍の様子を眺めていた。

無論、彼の愛機は特別製である。そうでもなければ全高八メートルの戦場の覇者、陸戦の王者たる人型兵器機装兵であっても……。いや兵器、機械であるからこそ、この様な場所には登って来られない。

彼の機体の腰に装備された魔動ウィンチには、呪文を唱えつつ投げると目標物にしっかり自動的に食い込む、という魔力を持ったワイヤーフックが付けられている。その上、登山用手鉤を前腕部外装に装備、つま先やかかとにも滑り止めのスパイクが取り付けてある。

おまけに白兵武器は、登山用のピッケルのみに見える。いや、腰にかろうじてコンバットナイフを差しているぐらいか。……機装兵の操手は、普通は剣に誇りを持っている事が多い。だがこの機体は、大型の剣の類は一切装備していなかった。

「……ま、俺はそんな高尚な人物じゃないからな」

ひとり言を呟いたジャスターは、機装兵頭部の『眼』……魔晶球の前に下ろしたバイザーに仕込まれた望遠装置を使い、ただひたすらその時を待つ。

そして『ターゲット』が視界の中に現れる。見るからに芸術品と言える、最高級品の、上位機装兵だ。あきらかに将が乗る物だ。

ジャスターはため息を吐く。本当は彼とてあの様な芸術品を駆り、戦場の支配者として戦う事を夢見ていたのだ。そう、『いた』のだ。過去形だ。彼は呟く。

「今の俺は、いいとこただの『暗殺者』だしなあ……」

だからと言って、彼は自分の仕事に誇りを持っていないわけでは無

かった。彼の働きで、自由都市同盟は何度も危機的状況を乗り越えて来たのだ。彼がいなければ、バフォメット事変から立ち直り切っていなかった同盟は、たとえあの名軍師と名高いエルトシャンが居ても、結局はじり貧で敗退していた可能性が高い。

戦術の問題ではない、その前の段階、戦略レベルで圧倒されているのだ。何もかも、バフォメットが悪い。あの魔王級魔獣が、全て悪い。ジャスターは苛立ちを無理矢理に沈める。イライラしていては、『仕事』に差し支える。

彼は一瞬で明鏡止水の境地に至る。ジャスターの心は、既に何の曇りも無い。彼は自機に、馬鹿みたいに長大な『物干し竿』を構えさせた。

この『物干し竿』……。同盟軍の、縁の下の力持ちである技術士官……。バフォメット戦にて予備役招集され、その後は再び冒険者組合に戻るも、都市同盟軍が今度こそ手放さなかったために組合への出向と言う形で落ち着いたと言う超級技術者、ダライアス・アームストロング技術中佐。その彼がこの世に蘇らせた、『電磁加速砲』である。正確には『魔力型』の三文字が頭に付くが。

エルトシャンは彼に言ったものだ。

『お前さんは、『香車』だ。ただまっすぐに、敵の『要』になる部分を撃ち貫き、大穴を穿つ。敵は『ポーン』『ナイト』『ルーク』『ビショップ』果ては『クィーン』まで揃ってる化け物陣営だ。何度『キング』を討ち取っても、その都度新たな『キング』まで補充されちまう。

だが、お前さんが『キング』を何度か討ち取ってくれれば、時は金なり、貴重な『時間』が稼げる。ダライアスが用意してくれれば、数だけは沢山いる『歩』が、『と金』に『成って』くれるであろう『時間』がな』

彼が駆る機装兵『イエロー・ジャケット』は、その名と違い、緑を基調とする迷彩塗装の外装をしていた。その外装の隙間から三チャンネルの魔力伝導ケーブルが、『物干し竿』に繋がれている。機体の心

臓部たる魔導炉がうなりを上げた。阿呆の様に、としか言えない強大な莫大な魔力が、『物干し竿』へと流れ込んでいく。

この魔導炉も、それを搭載する機装兵『イエロー・ジャケット』も、『物干し竿』……『魔力型電磁加速砲』と同様、ダライアス自らの手になる、そして彼が技術の粋を尽くして建造した、恐るべき超高性能な代物である。

整備性は高く、ほぼメンテナンスフリー。ジャスターが山の中に陣取って以来、彼の手で僅かばかりの整備しか受けていない物の、平気な顔で完全に動いている。よって稼働率も高い。

欠点はと言えば値段が馬鹿高い事。『物干し竿』とほぼ同額、大国の最上位機兵に匹敵する値段だ。更に言えば、超遠射程の狙撃に対応させるために器用さを追求した結果、機体構造が脆弱になってしまった事か。もし万が一にでも敵から発見され肉薄されたなら、あっさりと敗北してしまうこと必定だった。

「……加速リング運転開始。電磁加速砲、弾種選択、徹甲弾。弾体打突部、魔力による強化開始。モース硬度……八、九、十、十一、十二、十三……ここまで。弾体電荷付与開始。第一ロック解除。ターゲットスコープ、オープン。対ショック、対閃光防御」

スコープの中には、敵陣に現れた美麗な機装兵が映っている。そしてそれに重なるように表示された照準もまた。あとは引き金を引くだけだ。命中する事は既に決まっている。

……今までも、そうだった。敵軍は大将首を彼の魔弾に討ち取られ、混乱の最中エルトシャンの指示に基づいて手足の如く動く特務部隊に引っ掻き回されて、何もできず撤退していったのだ。

彼が狩った大将首は三個……。これが正々堂々の一騎打ちであるならば、とんでもない名誉であったろう。しかしこれは狙撃……。暗殺に等しいと認識されている行為だ。彼は莫大な褒賞金を手に入れたが、名誉はこれっぽっちも掴む事はできなかった。

だが、それでも良いのだ。同盟が護られるならば。

彼の狙撃は百発百中。対抗する術は、先に彼の機体を見つけるしかない。しかしそれは困難、いや至難だった。いや、もう一つ対抗措置は無い事は無いが……。

「……三、二、一、ゼロ」

ジャスターは引き金を引く。強烈な電荷を纏った徹甲弾が、多数の加速リングを配された銃身レール内を疾走。雷魔法により齎された電荷で、秒速にして十二・五ｋｍ、マッハ三十六・七に加速された砲弾は、何物にも躱しようがない。あっさりと、目標の機装兵に命中。

そして徹甲弾は、目標が周囲に纏った魔力の障壁に衝突し、四散した。目標の機装兵には、傷一つない。

「……やれやれ。三人も将軍を狙撃で討たれちゃ、流石に出してくるか。幻装兵……」

そう、敵が今回『キング』として出して来たのは『キング』ではなく『クィーン』であった。チェスで言う最強の駒。ただでさえ現在の機兵では太刀打ちできない超高性能を誇る上に、射撃兵装を完全に無効化する魔導障壁を機体周囲に展開する、古の時代の大いなる遺産たる機体。その機種名を、幻装兵と呼ぶ。

そしてジャスターは、通信機に向かって叫ぶ。

「敵は『クィーン』を出して来た！　『クィーン』だ、『キング』じゃない！　オーバー！」

更に彼は、『イエロー・ジャケット』の腰に据え付けられたホルスターから、機体に拳銃を抜かせると、上空に向けて撃ち放った。天空に、光の花が咲く。信号弾だ。

既にここの位置はばれている。味方に適切な情報を伝える方が優先だ。信号弾の意味は、さきほどの通信と同じく『敵は幻装兵を配備』

である。通信機は能力が低く、信頼がおけない。
かつて彼ら新人類は、仇敵たる旧人類が用いた科学技術を放棄し、魔導工学でその代替を図ったのだが、魔導工学によるシステムは未だに科学技術製のソレに追いついていないのだ。ぶっちゃけた話、通信機よりも信号弾の方が、まだ信頼できる。
彼は山の岩肌に機体腰の魔動ウィンチから引き出したワイヤーフックを噛ませると、機体を崖にダイブさせる。狙撃成功時には、なんどもやった呼吸だ。そして狙撃失敗時にも、同じくコレをやるしかない。勿論『物干し竿』は半分に折りたたんで、背中のラッチ行きだ。
あっさりと着地に成功した彼は、機体にワイヤーを切り離させる。ちょっともったいないが、仕方ない。そして彼の『イエロー・ジャケット』は、音も無く走り出す。本当にほとんど音がしない。まさに超高級機である。
だが彼は、逃げ切れるとは思っていなかった。敵には『クィーン』がいるのだ。

＊

そして彼は、出会ってしまった。ダライアス・アームストロング技術中佐の施した隠密機構……。それも、この敵が装備するセンサーの感知力には、意味を為さなかったらしい。『イエロー・ジャケット』の前に立ちはだかったのは、敵『クィーン』である幻装兵であった。
だがこの幻装兵は、帝国の象徴である『始祖の幻装兵』では勿論なく、ファリオン公爵家の『未明の幻装兵』でも無い。
「秘匿機体、か。帝国はいったい幾つの幻装兵持ってやがるんだ」
これはある意味で勝利、そしてある意味で敗北だった。いや、勝利する側は居なかった、と言い換えてもいいかも知れない。
自由都市同盟は、今まで時間稼ぎの『勝利の鍵』となってきた『香車』……ジャスターと『イエロー・ジャケット』、そして量産が難しく、

今現在同盟に４丁しか無い『魔力型電磁加速砲』のうち一丁を失う。
残り三丁は同盟が擁する幻装兵、『轟砲の幻装兵　ヴェイルー・ヌ・ザアンティス』の専用兵装であり、幻装兵の魔導炉出力をもってしか撃てない代物なので、使うに使えない。事実上、一丁限りの切り札を潰される事になるのだ。
対してアルカディア帝国側は、一見勝利に見える。今まで小賢しくも将軍の首を三つも討ち取った暗殺者……狙撃手を撃滅し、ようやく最初の戦略通りに大戦力をもって、自由都市同盟を攻められるのだから。同盟の『歩』が『と金』になるには時間が足りなかった……。
しかし実情は、既に将軍級三名を喪い、そして秘匿機体である幻装兵を表に引っ張り出す羽目になってしまった。これは同盟とは別に角突き合わせているカーライル王朝・聖王国に対し、大きなポイントを与えてしまった事になる。

「それに、まだ俺も死ぬと決まったわけでは無いしな。まあ、いざとなれば楽に死ねるのが慰めか。
しかしこっちが忌むべき暗殺者だからって、名乗りもしないのはどうよ。ま、いいけどさ」

ジャスターはデフォルメされたドクロマークのカバーが付いた、大仰なスイッチを見遣る。これは自爆装置だ。この高価な『イエロー・ジャケット』と、それと同等に高価な『魔力型電磁加速砲』を、これまた秘匿技術が注ぎ込まれている専用砲弾とともに、一瞬で灰にしてしまう破壊力を持っている。
彼はにやりと笑って、呟いた。

「同盟の、否、家族のためだ。ためらいは無い」

エルトシャンの言葉が、耳にこだまする。

『敵に拿捕されそうになったら、即座に自爆しろ。帝国に、『魔力型

電磁加速砲(レールガン)』の技術を渡すわけにはいかない。いや、『イエロー・ジャケット』とて同盟の最高レベル技術の粋(すい)だ。渡すわけにはいかない。

……死ぬのは一瞬だ。一瞬で灰になる。苦しむ事は無い』

その空耳に、ジャスターは笑って応える。

「わかってらあ、軍師サマよ。充分とは言えないが、俺に出来るかぎり時間は稼いだ。あとは頼んだぜ。ま、だけど少しぐらいは足掻いてみるかね」

そして『イエロー・ジャケット』は、一つだけ装備されているコンバットナイフを後ろ腰から引き抜く。リイイイィィィン……と、耳障(みみざわ)りな耳鳴りにも感じる金属音が響いた。このコンバットナイフは、『魔力式高周波ブレード』……つまりは魔力で駆動する様にされた、『高速振動剣(ヴィブロブレード)』なのだ。万が一にでも、うまく急所にあたれば……。

ぽとり。

機体の右手首から先が、前触れなく落下した。『高速振動剣(ヴィブロブレード)』は、魔力の供給を断たれて停止、地面に突き立った。そしていつの間にか『イエロー・ジャケット』斜め後ろに、剣を抜き放ち、振り切った姿勢になっている幻装兵(げんそうへい)がいる。ジャスターは理解した。こいつがやったのだ。

思わず機体の左手で、『高速振動剣(ヴィブロブレード)』を拾おうとする。しかし次の瞬間、今度は機体の左肘から先が落ちる。また見えない速度で斬られた。

「勝てない、か。いや勝負にもならんな。そんじゃ、ま」

ジャスターの親指が、ドクロマークのボタンのカバーを跳ね上げる。彼はそれを押し込もうとした。機体の右拳と『高速振動剣(ヴィブロブレード)』、それに左腕の肘から先を残してしまうのを、心の中でエルトシャンに詫びながら、彼の親指は自爆スイッチの上に乗った。

なにかしら感じたのか、敵の幻装兵は一瞬で間合いを詰めて来る。ジャスターは慌てず、親指でボタンを押し込もうとした。

＊

ガギィイイィィン!!

＊

耳障りな金属音と共に、敵の幻装兵がよろよろと後退する。その場にはいつの間にか、赤い機装兵がいた。その機装兵は、大きな頭飾を持ち、両肩から大盾を生やしている。背中には巨大なバーニア・ポッドを背負っているが、大きすぎて動きの邪魔になっていそうだ。その手には、使い込まれていつの間にか魔力の宿ったらしい、片手半剣が握られている。

見ると、赤い機体の両脇には緑と青の機装兵が一機ずつ合計二機、出現している。この二機は、赤ほど常識外れの機体ではなさそうだ。と、赤い機体から声が上がる。声からすると、若い女の様だ。

『さっさと逃げてくれ！　長い時間は無理だ！』
『大尉、こっちから相手に弱点を教える必要無い』
『あああ?!　しまった!!』

思わずジャスターは、唖然とする。あの機体、二人乗り？　ジャスターは通じるかわからないが、通じたら儲けもんだと直通回線を赤い機体と開く。ちゃんと通じた。

「こちら、ジャスター・マクグレイ都市同盟軍大尉。そちらは？」
『こちらはアレクシア・アーレルスマイヤー都市同盟軍大尉およびルージー・アームストロング士官候補生！　何故逃げない!?』
「足元に転がってる右手首と『高速振動剣』……それに敵の足元の、こ

の機体の左肘から先。あれをなんとか始末する方法を考えてたんだがな」
『わかった！　こっちでどうにかする！』

言うや、アレクシア大尉機は、両肩の大盾先端を、それぞれ転がっているパーツに向けた。次の瞬間、盾の先端――ジャスターが再度よく見たら、砲門だった――が火を吹き、パーツは一気に燃え上がって融解した。焼夷徹甲弾だったようだ。

『これで、うおわっ!?　ふう、躱せた。ルージー、『加速装置』の残り稼働時間は？』
『通信が繋がっているのに、そうポンポン機密情報を垂れ流さないで。残り八・二秒』

唐突に、敵幻装兵が赤い機体の前に瞬間移動し斬りかかって、直後後方に瞬間移動した。赤い機装兵は、からくも躱す。緑と青の機体が支援しているが、なんとかそれでギリギリ互角の様だった。ジャスターは思う。

（しかし赤い機体に乗っている大尉、うかつだな……。まあ、これで敵の能力の秘密と、あの赤、緑、青の機装兵が、まがりなりにも互角で戦えている理由がわかった。『加速装置』かあ……。そんなのと正面切って向き合うなんて、無茶だったな。パーツの始末もしてもらえたし、とっとと逃げよう。
……ぶっちゃけ、邪魔になってるしな。俺がいちゃ、彼女らも逃げられん）

そしてジャスターは、機体を翻して全力で走らせた。その後の事は、彼は知らない。だが彼が無事に駐屯地へと帰還できたのは、間違いなくあの赤、緑、青の三機編制の機装兵部隊のおかげであった。

＊

「……と言うわけで、逃げてこられたんですがね」
「まあ、良かったな。自爆命令を出しててなんだが、お前があそこまで優秀だとはな。いいかげん勿体なくて、友人に貸してあった分を返してもらう事で、友人が管理してる秘匿（ひとく）部隊を送り出してもらった。感謝しろよ？」

ジャスターの報告に、軍師エルトシャンはニヤニヤと笑った。が、急に真面目な顔になる。

「だがその秘匿（ひとく）部隊をもってしても、あの敵……仮称『X』は倒せなかった。いや、逆に危ないところすら有ったと聞く」
「直接礼を言う事はできないんでしょうな。俺が礼を言っていたと、伝えていただきたい」
「わかった」

そしてエルトシャンはソファに沈んで、陰鬱（いんうつ）な口調で言った。

「さて、あの化け物が出て来た以上、何か方策を考えんとな」
「ええ。……何枚か、『歩』は『と金』に化けましたか？」
「んー？一応少しは、なんとかな。だが、まだ予定してた作戦には足りん。まだもう少し時が欲しい。文字通り『時は金なり』だな。
……だが、いつの間にか『香車』が『成香』になってたのは、嬉しい誤算だったがな。『飛車』三枚出した甲斐があったってもんだ」

ジャスターは、思わずその表現に苦笑を漏らした。

Ｆｉｌｅ１０「魔装兵の少女」

男は、必死で機体を操っていた。この機体の動きは俊敏で、彼が乗り慣れた高機動タイプの機兵たる軽機兵『ディナイド』にすら勝る。されどパワーは致命的に低く、機体構造は極めて華奢、あげくにバランス性能は劣悪もいいところだった。

彼は必死で機体が転倒しない様に努めつつ、峻険な地形をひたすら駆け抜けていた。

操縦槽に相乗りさせていた、彼の姪が心細そうに言葉を漏らす。

「おじさん……」

「大丈夫、シュテファーニエ……。もうすぐ同盟領だ。自由都市同盟に入れば、追手は……」

そしてその時、追手の『ディノ』型軽機兵が彼の機体を追い抜き、前に立ちはだかる。型遅れになった機体ではあったが、機体各所に山岳戦闘用の手鉤、脚鉤、魔動ウィンチとワイヤーフックを装備し、機体の装甲を削って関節の可動域を増大させる改造が施されている。

追手の『ディノ』型は、後ろ腰から小剣を抜いた。追われていた男も、機体に大振りの鎚矛を構えさせる。だがこの勝負、相手の方が圧倒的に有利であった。こちらの機体が唯一相手に勝るのは、新型機『ディナイド』以上の敏捷性、ただそれだけだ。

「やらせはせん……。兄さん義姉さんに濡れ衣を着せた上に……。この子までも手にかけようと!! シュテファーニエだけは、この子だけは殺らせはせんぞおおおぉぉぉ!」

「きゃ!」

彼……兄夫婦の忘れ形見である十四歳の姪を連れ、自由都市同盟への亡命を敢行せんとする元聖王国の辺境警備中隊隊長であった男、ユストゥス・ゲルステンビュッテルは、絶叫と共に乗機である魔装兵『ブ

ラウェ・ローゼ』の足踏板を踏み込む。『ブラウェ・ローゼ』は疾風の速さで敵機に襲いかかった。

＊

「で、魔装兵で殴り合った、と。しかも魔法戦士型では無い、純魔法行使型の機体で。結果、勝利を収めたが……。酷いな、これは。相手が欲しがっていたのが、この『ブラウェ・ローゼ』でなければ、完全破壊されてやられていただろうな」

「……面目ない」

「……」

自由都市同盟首都、中央都市アマルーナにある冒険者組合本部で、ユストゥスはしょんぼりしていた。彼の前には、冒険者組合所属の機兵技師、ダライアス・アームストロング師が腕組みをして難しい顔をしている。ユストゥスの傍らでは、どうしても彼の傍を離れようとしないシュテファーニエ嬢が、必死な面持ちで彼の袖を掴んでいた。

ちなみに魔装兵とは、乗り手たる操手の魔法行使能力を拡張し、普通では使えないほどの強大な魔法を放てる様にする、特殊な機兵の事だ。ただし普通の魔装兵はその特殊能力の代償に、白兵戦や格闘戦では貧弱な力しか発揮できない。まあ、ダライアス師が言う様に、ある程度の白兵戦闘力を兼ね備えた魔法戦士型もしくは魔法剣士型と呼ばれるタイプも存在はしているのだが……。

ダライアス師のボサボサ頭が、左右に振れる。

「しかし、これは酷いな……」

「な、直らないのか!?」

「直るが……。君、亡命のときに金はどれだけ持ち出せたのかね？はっきり言おう。普通の機装兵を、十機買えるだけの金がかかるぞ」

絶句するユストゥス。彼が持ち出せた金は、たいした額ではない。

しかも亡き兄夫婦からあずかった大事な姪、シュテファーニエを養育するために必要な、大事な金である。ユストゥスは途方に暮れた。その様子を見て、ダライアス師は苛立たし気に言う。
「ああ、わかったわかった。裏事情、はっきり言おうか。自由都市同盟も、亡命を認めたとは言え慈善事業をやってるわけじゃない。都市同盟軍から依頼を受けているんだ。君を懐柔して、この魔装兵が持つ秘密……。この機体だけが持つ、特殊なエーテル出力増幅機構の秘密を暴いて新型魔装兵の試作品を数体建造せよ、とな。そのデータを使って、軍は……。同盟は、何か企んでいる様だが」
「構わんさ。結局のところ、同盟を利するんだろう？　それが転じて結局は、兄夫婦の仇討ちに繋がるならば文句は無い。協力する。
　ただ俺が知る事はほとんど無いぞ。機体そのものを調べるならば、好きにしてくれ。うちの血筋の者しか動かせないロックがかかってるが、言ってくれれば何時でも動かすぞ」
「で、軍は一応新型魔装兵試作品数体分の発注代金と、『調査費用』とやらを冒険者組合に支払っていったがね。その『調査費用』から目一杯代資金を捻出しても、まだ『ブラウェ・ローゼ』修理代金には程遠い。あと機装兵に換算して、六機分は必要だ」
「むむむ」

　腹芸ができない男同士だと、交渉はこうなると言う見本だったりする。互いに許容できる限界点を、真っ先に提示してしまうのだ。まあそれはともかくとして、ダライアス師はため息を交えて言った。
「で、だな。試作実験機のテストを手伝ってくれないか？　ちょうど手が空いている者が、誰もおらんのだよ。それでチャラ、とまではいかないがね。かなり割り引く事ができるぞ」
「試作実験機？　先ほど言っていた、新型魔装兵の試作品の事か？　だ、だが俺は……」
「知っている。魔法が使えないわけでは無いが、『飛ばせない』のだろう？　魔力という、言わば君の一部分である物、それをエーテルと言

う魔法に必須なエネルギーに変換する。そこまではできる。だが自分の『内』の存在である『エーテル』を、自分もしくは機兵の『外』に出すイメージがどうしても湧かない。だから魔装兵の試験は無理だ、と？」

「ああ。いくら修行しても駄目だった。自分の内、あるいは機兵の内に対する魔法なら使いこなせたが……」

ダライアス師は頷く。そんな事は、既に幾度か説明されていたから。

「ああ、大丈夫だ。君にテストを頼むのは、コレだ……。機装兵に魔装兵の能力を持たせた、二人乗りの『疑似魔装兵』……。名前はまだ決まって無いがね。

八三一年に開発された同盟の法撃型魔装兵『リャグーシカ改』のコンセプトを踏襲した機体だよ。リャグーシカ改の機構の追試と、その方向性の更なる発展の可能性を探るための機体だ」

「二人乗り、だと!?」

「ああ。君が操手を務め、別個に魔法使いが後部座席で魔法の行使に専念する。一機に白兵戦闘力と魔法行使の能力を持たせる事で、単体としての戦闘力は数倍……は大げさだが、跳ね上がる。おまけに、君が持ち込んだ『ブラウェ・ローゼ』から得た成果も注ぎ込む……のは当たり前か。

魔装兵と機装兵を一機ずつ揃えて、機装兵に護衛させた方が楽だとか、単に魔法戦士型の魔装兵造った方が、とか言うなよ？　それらの例に比して、倍とは言わんが二割から五割増しの効果が見込めたんだ。『リャグーシカ改』の運用データからは、そう言う結果が出ている。

まあそれも、前席と後席の相性や息がぴったり合った場合の話だがな。まあ、先に言った純魔法行使型や、魔法戦士型も作るが。

やってくれるかね？」

どうやら、魔法の使い手として致命的な欠陥を抱えているユストゥスであっても、可能である仕事の様だ。彼は頷く。
そしてダライアス師は、にやりと笑った。

「では、決まり、だな。さて、となると今度は後席に乗る魔法の使い手を探さねばならん。誰か……」
「わ、わたしが、わたしに、わたしを後席に乗せて下さい！」
「!?」

声を上げたのは、今の今まで黙ってユストゥスの袖を掴んでいた、シュテファーニエ嬢だった。ユストゥスはまず唖然とし、次に愕然とし、泡を食って彼女を制止する。

「い、いかん！　試作実験機のテストなぞ、何が起きるかわからない危険な物だぞ!?」
「おじさん、わたし、お父様とお母様の仇を討ちたいんです。可能ならば、自分の手で。
そんなわたしが、ただ守られてばかりで、どうなるんですか。おじさんには全然敵わないけれど、操手（そうしゅ）としての訓練は欠かした事はありません！　魔法使いとしても、そこそこだと師匠だった方からお墨付きを頂いてます！」
「だ、だが……」

何か断ると言うか、シュテファーニエお嬢の試作実験機テスト参加を禁じる理由は無いだろうかと必死で頭を回転させるユストゥスだった。しかしそこでダライアスが嘴（くちばし）を挟む。

「君の負けだな。何、確かに試作実験機は何が起きるかわからんが、実戦ほどではないさ。わたしが造るんだ、保証する。
と言うか、プランは既に出来ている。さっき修理できるかどうかで機体を調べたんだが、まあある程度秘密は分かったからな。基本的な

理屈とか。あとはまあ、良くわからんブラックボックスもあるが、とりあえずその辺はデッドコピーする」
「「早!?」」
「そして実際に動かして、それぞれのブラックボックスがどう動くか確かめないといかん。テスト項目は莫大な数に上るぞ？　覚悟しておきたまえ。ああ、あと君は魔法使いとしても、そこそこだったな。他の二機のテストも頼むと思うが」
「はいっ!!　やらせていただきます!!」

その台詞に、シュテファーニエは必死に声を張り上げる。というかその大声は、それでもなお反対しそうな叔父に対するけん制だ。大声と言うのは、きっちり意見を持っている人間には効かない事も多いが、逆に迷いを抱えている人間は、大声に流される事がよくある。

「あ……。ぐ……」

そして結局、ユストゥスは姪のテスト参加を許可する事になった。流された結果だと言うのが、ちょっと物悲しかった。

＊

そして一週間後、三体の試作実験機が完成した。壱号機は重機兵『フォッシュ』をベースにした二人乗り疑似魔装兵『ナルラハ・フォッシュ』。とりあえず機装兵用の魔導炉と、魔装兵用の魔導炉を同時に搭載し、心臓部たる魔導炉二基、操手二名と言う奇想天外メカになっている。
まあ無論、操手一人でも動かせば動かせるのだが。だがその際は、どちらの魔導炉に同調、起動するかを操手が選択しなければならない。
無理に二基の魔導炉を一人で動かした場合、あっと言う間に操手が魔力切れになってしまう。それを防止するため、一人では一基の

魔導炉だけしか同調できない様に安全装置が組まれていた。
弐号機は、『ファルネウス・リンデ』……聖王国製の魔装兵『ファルネウス』を輸入して独自改修を加えたリンデ・タイプと呼ばれるカスタム機なのだが、それを更に改造しまくった純魔法行使特化型魔装兵『ファルネウス・サヴァンナ』。まあ、純粋に実験用と割り切って、整備性や生産性など二百万光年の彼方に放り捨てた機体だ。これがこのまま量産されることは、いかに強力であろうと無いであろう。
参号機はこれも『ファルネウス・リンデ』をベースに無茶な改造を加えた実験機で、魔法を併用して白兵戦を行う、魔法戦士型『ファルネウス・アーサラ』だ。器用貧乏ではあるが、かゆい所に手が届くタイプである。
ダライアス師は、流石に三機同時の機兵建造指揮は疲労した様だが、それでも精力的に働いていた。ユストゥスとシュテファーニエも、負けずに頑張っている。そして数日が経過。今日は壱号機を使って、戦闘機動をしながらの魔法使用試験だ。軍のお偉いさんも、観に来ている。

『ユストゥス！　シュテファーニエ！　動かない標的、完全スクラップの再利用もできない残骸を出してあるからそれを魔法……魔法の種別は任せるから、それで標的を攻撃してくれ！
従機隊がそちらを模擬武器と模擬弾で攻撃する！　不動目標の撃破を優先し、従機には魔法攻撃はしないこと！』

『了解！』

彼ら二名の息はぴったり合い、ほどなく標的は全て撃破扱い、従機隊もまた全滅の扱いになる。都市同盟軍のお偉いさんは、非常に満足して帰って行った。ダライアス師は二人を労う。

『ご苦労、二人とも。珍しい事に軍が追加の研究費用を出すと確約してきた。君らのおかげだ。『ブラウェ・ローゼ』の修理費用の足しに、

ボーナスを出すぞ』
「それは有難いな」
「助かります！　おじさん、今日は帰ったら美味しい物作るわね！」
「それも有難いな」

そんな日々がしばらく続いた。壱号機だけではなく、弐号機参号機のテストもどんどん進んで行く。一回テストを終える度に、ダライアス師はトライアル・アンド・エラー的にあちこち削ったり付け加えたり改造したりを繰り返した。

＊

ユストゥスは驚愕し、叫ぶ。

「壱号機が奪われた!?」
「ああ。今、追手を手配しているが……」
「……！」

深刻な表情でダライアス師が言った、その時である。シュテファーニエが何を思ったか、弐号機へと走り出し、飛び乗って起動した。なんと言うか、流れる様な動作だ。
次の瞬間、あっけに取られていた野郎二人が我に返る。彼らは口々にシュテファーニエを制止した。

「待て！　シュテファーニエ！」
「機体を勝手に動かすんじゃない！　それ以前に、言っただろう！
それは試作実験機だと！」
「危ないから、降りて来なさい！」

だがシュテファーニエは、聞く耳を持たなかった。

『駄目です！　あの機体には、おじさんとわたしの、愛の日々が詰まっているんです！』
「……は？」
『いっしょに乗ったと言うなら『ブラウェ・ローゼ』も同じですが、あの壱号機の様に、二人で協力して動かしたわけじゃありません。あの機体は、二人のはじめての共同作業なんです!!』
「まてーーーい!!」

待たなかった。シュテファーニエの乗った弐号機は、疾風の速さで、と言うか魔法による疾風を纏いソレに乗る形で、超高速で駆けだして行った。

「くそ、わたしも『アーチャー・フィッシュ』を出す！　追いつけはしなくとも、せめて現場近くでの情報支援をしなければ……」
「ダライアス師！　頼みがある！」
「皆まで言わんでいい。乗って行け。参号機だろう？　追いつける可能性があるとしたなら、アレしか無い」

ユストゥスは許可を貰ったと見るや、参号機に走り寄り、飛び乗った。そして魔導炉と同調し、起動。直後、最近習得したばかりの魔法を行使する。ただし、特殊な方法を用いて。

「魔導簡略発動デバイス起動。魔法選択。三、二、一、イグニッション。……ぐうっ！」

魔導簡略発動デバイスとは、これもまたダライアスが実験試作中の装備だ。これは微弱な雷魔法を応用して、操手の脳内から術イメージを電気信号の形で読み取り、それを魔装兵の魔導炉に流す事で、詠唱無くして魔法を発動させるシステムである。
だが実験中装備のため、使用者は現状では若干の違和感を感じたりする。ユストゥスはこの場合、少々の苦痛を感じた模様だ。あげくに

今は本当に試作実験装備なので手間がかかり、詠唱した方が早い可能性すらある。ただ今回は、複数の魔法を合成して発動するために、この装置を使用した。

で、ユストゥスが今回何の魔法を発動したかと言うと、機体に対する筋力強化、反応速度強化、骨格強化の強化魔法三点セットである。これならば、魔法を『飛ばせない』彼であっても行使できる術法だ。彼は機兵（きへい）を立ち上がらせると、閃光の様な速度で機体を駆けださせた。

＊

ユストゥスの参号機『ファルネウス・アーサラ』がダライアスの誘導指示に従って現場に到着した時、弐号機『ファルネウス・サヴァンナ』はボロボロになって大地に伏していた。ユストゥスの血が凍る。

「シュテファーニエ!!　シュテファーニエ!?」

『ぐ、くううっ……。お、おじさん、ごめんなさい。勝て……なかった』

「そんな事はいい。生きて、いたか。よかった……。

……シュテファーニエを、ここまで痛めつけてくれた返礼、させてもらうぞ！」

『……これはいい。壱号機だけで我慢しなければならんかと思っていた。だが弐号機のみならず、参号機まで追って来てくれるとはな』

壱号機『ナルラハ・フォッシュ』の操手が、感情の無い声で言葉を発する。それはユストゥスの心を逆なでした。彼は激昂しかけ、なんとか平静を取り戻す。

敵は冷たい声で言う。

『あらかじめ言って置こう。わたしには勝てん。素直に機体を引き渡せば、命は助けてやろう。裏切り者、ユストゥス・ゲルステンビュッテル。名前を知っているのが不思議か？　そこの『シュテファーニエ』と言う娘が『おじさん』と呼んだ。それで根拠は充分だろうに。

貴様らの事は、聖王国の上の方まで話が届いているぞ。それを見逃してやると言っている。再度言うぞ？　素直に機体を引き渡せ』
「笑わせるな。兄に濡れ衣を着せて殺した敵の肩を持つ、聖王国の犬が」
『濡れ衣？』

敵はそう呟く様に、その言葉を確かめる様に、疑念のわずかなりと込められた声で言った。だがユストゥスの兄が濡れ衣で処刑された事件を、怪しんで言った言葉ではない。それはすぐに分かった。

『……その程度の事で、貴様は国を裏切って脱走したのか？』
「!!」
『何よりも大事なのは、聖王国の秩序。そうであろう。そのためには、一人二人の犠牲など、どうでもよかろう』

今度こそ、ユストゥスは激怒した。しかし、表面には出さない。

「それが貴様や、貴様の家族が犠牲になっても、そう言えるのか？」
『あたりまえだ。それでこそ、聖騎士と言える。貴様は腕は立っても所詮、辺境警備隊の中隊長クラスだったと言う事か。我は魔法の行使に問題を抱え、なれど腐らずに剣技を磨く、貴様の事を買っていたのだがな』
「……」

この男とは……この存在とは、相容れない。ユストゥスは理解した。彼は機体の両腕で、二振りの突剣（レイピア）を抜き放つ。突剣（レイピア）こそが、彼の本来の武器であった。

（だが……。本来の武器を使えるからと言って、勝てる、か？）

敵の機体『ナルラハ・フォッシュ』は、重機兵（じゅうきへい）『フォッシュ』の改

造機であり、機動性以外はすべてこちらを凌駕している。こちらは魔法戦士型とは言えど、しょせんは純魔法行使型の魔装兵『ファルネウス・リンデ』型がベースである。彼は、後ろで倒れ伏した弐号機を横目で見遣る。そして決意した。

突然前触れも無く、全身全霊の速度をもって突撃し、まだ効果を失っていなかった強化魔法分まで含めた突剣での強烈な突きを、彼は敵機に見舞った。外装の隙間から、操縦槽内まで刀身が滑り込み……。次の瞬間、自機が吹き飛ばされた。

「ぐほぉぁッ……」

『弐号機は迂闊にも、かなり痛めつけてしまったのでな。せめて参号機ぐらいは可能な限り無傷で持って帰りたい』

その言葉に、ユストゥスは戦慄する。この化け物は、操縦槽を狙った渾身の一撃を躱さずに……。いや、操縦槽内部にある操縦席の操手に攻撃があたらない様にだけ、最低限の動きで躱した。その上でカウンターを取って、掌打によってこちらの操縦槽への一撃を見舞ったのだ。

その掌打も、ただの一撃では無い……。無いと思う。この化け物操手は、何らかの素手武術をも習得しているのだ。機兵の機体やその装甲に傷を付けず、衝撃のみを内部に浸透させる技……。彼は、聞いた時は眉唾物だと思った。眼前で見てさえ、自分の身にくらってさえ、彼は信じる事ができなかった。

敵機から、声がする。

『さすがは……。技だけならば第四階梯にも昇進できるだろうと言う男だけはある。完全に躱したつもりが、肩口を負傷してしまった。本当に惜しい。これで心根さえ真の聖騎士に相応しければ……』

一歩一歩、胸板に突剣が突き立ったままの壱号機が、参号機の方へと歩いて来る。ユストゥスに、とどめを刺す気だ。万事休すだった。

身体は傷一つないが、衝撃波で体内を何処かやられたらしく、ぴくりとも動けなかった。彼はせめて怒りだけでも叩きつけようと、敵機を無意味に睨みつける。

そのとき、彼の視界の隅で何かが動いた。

＊

『お、じ、さ、ん、に、近づかないでえええええーーーッ!!』

＊

「……ひどい呪文も、あったもんだ」

そう言ったのは、ダライアス師である。ユストゥスは、命拾いをしていた。いや、シュテファーニエも、勿論無事だ。壱号機から参号機は、けっこうな損傷はあったものの、無事に研究開発施設のハンガーに戻っている。

あのとき、ぎりぎりまで愛機を疾走させ、バーニアポッドや魔道スラスターが推進剤切れになる事さえもダライアス師は覚悟していた。いや、それはいい。それはいいのだが。彼の機装兵（きそうへい）『アーチャーフィッシュ』がようやくの事で現場に着いたとき、彼は目を疑った。

いや、十三～十四歳にしか見えない美少女が、彼女の叔父を操縦槽（そうじゅうそう）から救出して応急手当していたのは良いのだが。しかしその美少女シュテファーニエが、身動きの取れない叔父の胸元に顔を埋め、クンカクンカ衣類の匂いを嗅いでいたら、それは引く。絶対に引く。もう思いっきり引いた。

で、奪われた壱号機の敵操手（そうしゅ）だが……。こんがり焼けていた。シュテファーニエはあのとき、限界まで振り絞った声で絶叫した。『おじさんに、近づかないで』と。それは実は、彼女に言わせれば意図的にそう構築した呪文であり、あの時はその呪文に対人用炎の矢（ファイア・アロー）×二百五十六本のイメージを乗せて解き放ったそうである。

ダライアス師は、しみじみと言った。

「ひどい呪文も……。本当にひどい呪文もあったもんだ」

「でも、勝機はあれしかありませんでしたし」

シュテファーニエは、悪びれなく言った。まあ、決め手になったのは、その炎の矢（ファイア・アロー）だ。普通であったなら、あの化け物じみた強敵が張っていた対魔法の術のせいで、ただでさえ対人用の炎の矢（ファイア・アロー）は、効果をたいして上げられなかっただろう。シュテファーニエが最初、ボロ負け状態であったのは、その対魔法の術のせいだ。

しかし炎の矢（ファイア・アロー）は、決め手になった。炎の矢（ファイア・アロー）が、敵機の操縦槽（そうじゅうそう）に突き立ったままのユストゥス機の突剣（レイピア）を直撃し、刀身に伝導した純粋に物理現象と化した高熱が、敵機の操縦槽（そうじゅうそう）内部をオーブン状態にして、完全に蒸し焼きにしたのである。当然、突剣（レイピア）は真っ赤に焼けていた。焼きなました様な物で、もう突剣（レイピア）としては使えないだろう。

シュテファーニエは、左腕でユストゥスの右腕を抱え込んでいる。ユストゥスは、強張った顔で、彼女の好きにさせていた。彼はシュテファーニエが、彼女自身の出生の秘密を知っていると聞き、今ちょっとばかり、心折れていたのだ。

シュテファーニエの母は、かつて聖王国の某偉いヒトに弄ばれ、ユストゥスの兄である父に押し付けられる形で捨てられたのだ。だが誠実で優秀かつ優しい夫は、傷付いた母を優しく受け入れたのだ。しかしその時には、母のお腹には既にシュテファーニエが宿っていたのである。しかし父は、子供には罪は無いと、実の子同然に愛情を注ぎ、育てたのだ。

シュテファーニエは言う。

「何時かわたしは、聖王国へ戻ります。いえ、戻らなくてもいいですけれど、かならず本当の『父』に会います。会って、認知してもらうんです」

「……まあ、なんと言うか、頑張ってな。で、相続権の分でもふんだく

るのかね？」
「いえ、そんな物いりません。認知されたら、その場で始末します。そして、法的に血縁じゃないと証明された、おじさんと結婚するんです！」

ガタタッ！

ダライアス師と、ユストゥスが椅子から転げ落ちそうになり、音を立てた。本当に十四歳なのだろうか、この娘は。ダライアス師はシュテファーニエを、ジト目で見遣る。

「……最初の頃の初々しさが、嘘の様だな。演技でもしていたのか？」
「いえ、あの時はこちらも必死でしたから。気持ちに余裕が出てくれば、こんな物ですよ？」

ダライアス師は、うつろな眼差しのユストゥスに、同情の視線を送った。

Ｆｉｌｅ１１「二人の客人」

聖華暦八三四年六月。ここは自由都市同盟中央都市アマルーナの、冒険者組合本部。そこの廊下を、二人の男が一人の女性に案内されつつ歩いていた。

男のうち一方は、冒険者組合鍛冶師組合所属技師であるルント・デルフィン。そしてもう一方は、アルカディア帝国からの亡命者であり今は傭兵の扱いで同盟に所属している、ヴィレム・デーゲンハルトである。

徐(おもむろ)に、ルントが口を開く。

「……え……っと。大尉さん？　オレはここの所属だから、別に案内されなくても自分で行けるんだけど。ヴィレムさんも俺が連れて行くから……」

「……いや。命令書こそ無いが、口頭でとは言えレーヴェンハルト大佐から仰せつかった任務だからな。わたしが引率していく」

「そ、そっか……」

「……」

ルントと違い、ヴィレムの方は別に異を唱えるつもりは無い様で、黙って大人しくその女性大尉に従っている。……ただ、その大尉を時折ついつい目で追ってしまうのは、避けられなかった。

その女性大尉は、なんと頭のてっぺんから足のつま先まで、重装甲の鎧を身に纏っていたのである。敵と戦うわけでもないのに、この大都市の中央もいいところの、冒険者組合本部の真ん中で。

全身を銀色の錬金金属で編まれた鎖鎧で包み、頭は同質の金属で出来たバケツ型ヘルムを被っている。肩には同じく銀色の錬金金属の肩当てが、左胸には心臓の上にのみ錬金金属の胸当てが装備されている。更にその上、重厚な手甲と脚甲を着用していた。

おまけに彼女は、腰には何物をも叩き斬りそうな片手半剣(バスタードソード)を佩(は)き、背中には巨大なハンマーとカイトシールドを、後ろ腰には予備武器の

モーニングスターを装備している。重ねて言うが、何と戦うわけでも無いのに。
そう、彼女は言わずと知れたアレクシア・アーレルスマイヤー大尉殿であった。
「……」
ルントもヴィレムも、アレクシア大尉に聞こえない様に、小さくため息を吐くのだった。

＊

長い廊下をしばし歩いた後で、ルントとヴィレム、アレクシア大尉は目的の部屋へたどり着く。その部屋の主、冒険者組合に都市同盟軍（としどうめいぐん）から出向している、ダライアス・アームストロング技術中佐は彼らを歓迎してくれた。
「よく来たね、ルント・デルフィン技師、そしてヴィレム・デーゲンハルト殿。二人の噂はかねがね。
ルント技師、その技量の程はここ本部でも噂になっているよ。さすがはシュウ殿の秘蔵っ子だとね。ヴィレム殿は今年三月にあった同盟への帝国軍侵攻とハウゼンシュトリヒ攻防戦での八面六臂の活躍は、義勇軍に従軍していた友人から聞いているよ。」
「えっ、あっ、ありがとうございます！　ダライアス師！」
「ふむ……。自分としては、そこまで持ち上げられると……」
二人の反応に微笑したダライアス師は、ふと目を眇（すが）める。ルントとヴィレムに、少し疲労の色が見えたのだ。
「……？　あー、何か疲れている様だが？」
「い、いえ。その、まあ。あはは」

「……うむ。まあ、気にしないで欲しい、ダライアス師」

二人は一瞬アレクシア大尉に目を遣って、急ぎその視線を逸らす。ちなみにここまで彼らを案内して来たアレクシア大尉の本来の任務は、ダライアス師の護衛である。そのため彼女はこの部屋……ダライアス師の研究室に入ると、ダライアス師の斜め後ろに直立不動の姿勢で立った。

ルントはついつい、ダライアス師をまじまじと見てしまう。今まで直接一対一で会った事こそないが、ダライアス師は同盟の冒険者組合においては有名人である。更に彼がオヤジさんと慕うシュウ・フォールズ技師とも、ダライアスは知己であるらしい。

そんなルントの様子に苦笑しつつ、ダライアス師はさっそく本題に入る。

「さて、先にこちらに送られて来ていたヴィレム殿の機装兵(きそうへい)……。『ジェンティーレ』、だったね。それの調査と分析、そして機装兵(きそうへい)本体の基本的な整備は既に終わっている」

「早い!? たしかオヤジさんの工房の、アマルーナ支部を送り出したのが今週の頭だから……」

「……凄いな」

ルントとヴィレムがわざわざ冒険者組合の本部にまで出向いて来たのには、わけがある。彼らはヴィレムの機装兵(きそうへい)『ジェンティーレ』を調整する必要から、ここに常駐している機兵(きへい)技師ダライアスの力を借りるためにやって来たのだ。もっともルントの方には、もう一つの目的があったのだが……。

ヴィレムが徐(おもむろ)に、言葉を紡ぐ。

「それで、グライデンパックなんだが……。なんとかなりそうか？可能ならチェインバスタードも」

「要望は、『ジェンティーレ』のオプション装備であるグライデンパッ

クの調整と修復、改良。そして武装であるチェインバスタードの修理と、可能ならば改良強化、だったな？」

グライデンパックとは、機兵（きへい）の機動力を劇的に向上させる、ランドセル型の追加装備だ。

元々はエアボードと呼ばれるサーフボード状の、機兵（きへい）の機動力を向上させるための機器が存在していた。複数の風のルーンを組み合わせる事で地上一～二ｍの高度を高速で滑空すると言う物なのだが、それの理論を応用しているのがグライデンパックだ。

これは『エアボードの機動力をエアボードに乗らずに確保する』という目標を掲げ、アルカディア帝国軍にて開発された物だった。しかしエアボードよりも複雑に風のルーンを組まねばならなかった等の理由で、量産に不向きであった事。そして何よりも、その能力を完全にコントロールし得る操手（そうしゅ）が存在しなかった事。

これらの理由で開発製造は中止され、後々ヴィレムと言う極めて高い技量を持つ操手（そうしゅ）が登場するまで、誰にも見向きもされなかった装備なのだ。

チェインバスタードは、帝国軍機兵（きへい）の標準装備であるバトルブレードをベースにして強化された武器である。雷（いかづち）のルーンを刻む事により、鎖鋸（チェーンソー）のごとく刃を高速回転させて斬れ味を増す仕組みになっている。しかしこの武装は、この年の三月に起きた帝国との国境紛争時に、破損していた。

ダライアス師の確認に、ヴィレムは言葉少なに頷く。

「ああ」

「ララ」

「はい、技術中佐」

ダライアス師の呼び掛けに応えて、彼の傍らに控えていた秘書兼護衛役の美少女、ララ中尉が手に持っていた書類ケースから、書類の束を抜き出して彼に渡した。ダライアス師はそれに目を通しながら、赤

ペンで書き込みを入れつつ言う。

「……はっきり言うと、そちらの要望を全て盛り込むと、けっこう高くつくぞ？　特にグライデンパックは、駆動系や動力系はともかく制御系がぐちゃぐちゃのスパゲッティ状態だ。ヴィレム殿、お前さんよくこれを制御できてたな？

制御系は全部、一から作り直しだ。一応、マギアディールのシュウ殿が作って送ってくれた制御系の外部仕様書があるから、それから内部仕様を書き起こして細部を煮詰めて制御術式を新しく組み上げないと」

「高くつくって、いくらぐらいになるんです？」

ルントが不安そうな顔になる。ヴィレムの顔色も優れない。だがダライアス師は、にやりと笑う。

「脅かし過ぎたな、安心してくれていい。シュウ殿とクライブ・レーヴェンハルト大佐が冒険者組合上層部と同盟軍とに色々と手を回してくれてな。グライデンパックの簡易量産型を同盟軍に販売する利益の一部を充当することで、何とかする。

どうにかヴィレム殿が払える金額に収められると思うぞ」

「グライデンパックは、ヴィレムさんじゃないと扱えない代物なんですが、それを量産するんですか？」

「ああ。帝国でも産廃扱いされていた装備なんだが……」

「そこはこの書類を見てくれ」

ヴィレムはその書類を受け取る。だが、すぐに眉を寄せて難しい顔になる。

「……すまん。技術的な専門用語が多くてな……」

「ああ、オレが見ますよ」

ヴィレムから書類を受け取ったルントは、その書類にざっと目を通す。

「……なるほど、グライデンパックの操縦は極めて難しいから、半自動化するんですか。操縦槽（そうじゅうそう）にテンキーボードを置いて、そのキーを叩く事で様々な機動を自動的に機体に行わせる……。1キーを押せば左方向に横滑り機動。2キーを押せば急速後退機動。5キーを押せばバク宙と言う様に」

「無論、ヴィレム殿ならば細かい機動は手動操作でやった方がいいだろうから、手動操作と自動化操作が被った場合は手動操作を優先するがね。それと、負傷して細かい手動操作が困難になった際など、キーによる一発入力は役に立つと思うよ」

「簡易量産型グライデンパックからは、手動操作を全廃して全てキー入力による自動操作での機動を行うんですか。なるほど、細かい機動はできなくなるけれど、おおざっぱに高機動を行うなら、これでいい……」

そこでヴィレムが口を挟む。

「……キー入力による自動操作なんだが、そのうち一つに、わたしが万全な状態でも不可能な強引な機動をセットしておいてもらえないだろうか。万が一の切り札として」

「……操手を殺す様な真似はできんな」

「死ぬためじゃない。……死なせないためだ」

ダライアス師とヴィレムは、しばし睨み合う。ルントは対峙する二人に口を挟もうとして、だがタイミングを逸（いっ）する。ルントからして見れば、ヴィレムの言葉は本当であり、同時に嘘も含んでいると思えた。

ヴィレムの『死なせないため』と言う言葉は、彼の本音だろう。だがルントが見るに、ヴィレムは死に急いでいる側面がある。もしその機能を付けたなら、ヴィレムは誰か仲間が危地に陥ったときなど、他

に方法があってもその機能を乱用してしまい、仲間を救うのと引き換えに、あっさり死んでしまいかねない怖さがあった。
と、そこで声を上げた者がいた。

「良いのではないか？　ダライアス師」
「アレクシア大尉……」

そう、それはダライアスの斜め後ろに直立不動でいた、アレクシア大尉だった。彼女はゴツいバケツ型ヘルメットの奥から、眼光鋭くヴィレムを見つめる。

「ヴィレム殿にとっては、必要な機能なのだろう。その機能を付けてやったからと言って、さっさと死ぬとは限らない。いや、絶体絶命の窮地に置いて、九死に一生を得る事もあり得るだろう」

アレクシア大尉はそこで言葉をいったん切る。そして再び口を開いたが、その声音にはなんとも言い様のない、異様な迫力が宿っていた。

「だがな、ヴィレム・デーゲンハルト殿。貴殿がもしその機能を死ぬために使った時！　わたしが先に、貴殿を殺す!!」
「!?」
「その機能を死ぬために使う時、それはダライアス師に自殺の手伝いをさせるに等しい行いだ！　わたしが尊敬するダライアス師に、そんな真似をさせてみろ！　わたしは貴殿を赦さない!!」

彼女の言葉に、ヴィレムは思わず息を飲む。ルントもダライアス師もララ中尉も、一言も発しない。だがララ中尉は、アレクシア大尉に賛同するかの様な視線を送っていた。やがてヴィレムは重々しく頷く。

「肝に……命じよう」
「そうしてくれ。……ダライアス師、失礼しました」
「いや、アレクシア大尉……。ありがとう」

凍り付いていた空気が柔らかくなる。ダライアス師も、ララ中尉も、微笑を浮かべていた。ルントがヴィレムの表情を窺うと、ヴィレムは何か感じ入った顔つきをしている。ルントは、安堵の息を吐いた。

＊

夜分遅くに、ダライアス師は自分の多機能通信魔導器（エニグマ）が通信の着信音を鳴らすのを聞いた。彼は急ぎ回線を開いて着信を受ける。

「はい、こちらダライアス・アームストロング。」
『よう、ダライアス師。元気か？　俺だ、シュウだ。ちゃんと飯食ってるか？』

通信の相手、シュウ・フォールズは、自由都市同盟の工業都市マギアディールに本社がある古参の工房に所属する技師であり、整備長の地位に居る人物だ。

若い頃のダライアスとは、その頃のダライアス師が性能偏重で使い勝手や整備性が悪い、量産性皆無で稼働率も低い、言わば『尖った高性能機』を好んで建造していた事もあり、折り合いが悪い時期があった。今はダライアスの方がシュウの正しさを認めた事もあり、関係は劇的に改善している。

「シュウ殿か！　……いや、久しいな。大丈夫、面倒見の良いお目付け役がいるからな。飯どころか、毎日のティータイムには手製の菓子と美味い茶をご馳走になってる」
『ほう!?　お目付け役か……。女か？』

「ああ。もっとも、残念ながら色っぽい話は無いがな」
『……ほんとに変わったなあ。昔のお前さんだったら、こんな冗談には乗って来なかったろ』
「昔の事を言うのは勘弁してくれ。若気の至りだったんだ」
『今でも若いだろう。はっはっは』

ダライアス師はふと、通信費が気になった。いや、こちらから相手に通信したならば、冒険者組合本部の大型通信機を仲介に使えるから、それほど費用はかからない。だがシュウから通話をかけてきたのだから、彼のいるマギアディールにある通信屋を使わねばならないだろう。通信屋を使うと、通信費は一分で五十ガルダと馬鹿高い。

「シュウ殿。なんならこちらから通話をかけ直すが？　こちらからなら、通信費はそこまでかからん」
『あ、いや構わん構わん。だが、そうだな。そろそろ本題に移るか』

そしてシュウは、突然話題を変える。彼の言によれば、こっちが本題の模様だが。

『ところでよ。そっちに行かせた二人はどうだ？』
「ヴィレム殿とルント技師か？　ヴィレム殿はまあ、作業がある程度進むまでは、お客さん扱いだな。作業の費用を少しでも浮かせるために、物が出来上がってからのテストは彼自身にやってもらうつもりだが。
ルント技師は、中々だな。流石あなたの弟子だけの事はある。来たばかりで申し訳ないとは思ったが、早速実作業を手伝ってもらっているよ」
『ルントの事なんだが、単に手伝いにいかせただけじゃねえんだ。奴からもその内にお前さんに頼み込むたあ思うが、一応俺からも話を通しとこうと思ってな』
「む？」

『いや、な……』

その後少々の間、ダライアス師は通信越しにシュウと会話を続けた。通信を終えた後、ダライアス師は少々考え込む。シュウから持ち込まれた話は、少々判断が難しい事であった様だ。彼は古代の遺物であり彼の私物であるノートＰＣを開き、立ち上げる。しばしの間、忙しくキーボードを叩く音が、彼の研究室に響いた。

＊

ここ数日、ルントはダライアス師を補佐して、グライデンパックとチェインバスタード、そして『ジェンティーレ』本体の改造作業を行っていた。これは彼が、自分から申し出た事である。今日も彼らは冒険者組合本部の機兵用ハンガーで、改造作業に勤しむ。

「ルント君、『ジェンティーレ』本体への増槽の取り付けと、操縦槽の改装、進捗はどうなっているね？」

「はい、ダライアス師。作業自体は完了してます。チェックも済んでますし、あとは実際の稼働試験を待つばかりです」

「……流石、作業が早いな。シュウ殿の秘蔵っ子だけの事はある」

そう言うダライアスの方は、彼は彼でチェインバスタード関係の作業を既に終わらせていたりする。必要なのは損傷部位の修復の他、威力の強化と簡易的雷魔法の行使能力の付与であった。

これらの実現のため、ダライアスはいったんチェインバスタードをばらばらに分解した。そして威力を強化するために、本体フレームをはじめ、鋸刃やそれを回転させるための鎖部位や回転軸など、必要パーツを元々のそれよりも強度が高い高価な錬金金属を用い、新造する。

更に心臓部に刻まれていた雷のルーンを新たに刻み直し、鋸刃の回転駆動以外にも簡易的な雷魔法を放てる様にした。

ちなみにヴィレムは、ダライアスより機装兵『ドランカード・タイガー』を借り受けて、演習場にて完成したチェインバスタード改のテストを行っている。

「まあ、これだけやってしまうと魔力の消耗が激しくなるからな。だからこそ『ジェンティーレ』本体には増槽を取り付けたんだが……」

「グライデンパックの方は、ララ中尉さんが作業を？」

「ああ、グライデンパック本体の改造と、制御呪紋を書き起こすのまではわたしが自分でやったが。制御呪紋を情報圧縮して呪紋原盤にする作業は、彼女の方が得意だからな。

本当なら、義娘たちにも手伝わせたかったんだが。あの娘らは今は士官学校での勉強が大変な時期だから、呼び戻すのは避けたんだ」

突然出たダライアス師の義娘の話に、ルントは驚いて聞き返す。

「む、娘さんがいらっしゃったんですか!?」

「義理の、だがな。呪紋原盤ができれば、冒険者組合の魔術師組合に依頼して、原盤から呪紋を制御用の魔導制御回路に書き込んでもらわないとならん。

しかし、グライデンパックの制御のためだけに、機装兵制御用のコード・スフィアを転用しているとはな。量産に向かんわけだよ。同盟軍に卸す簡易量産型では、最低機兵用のタクティカルディスクあたりの品で代用できないか、ちょっと考えないといけないな」

「……」

「……？　どうしたね、ルント君」

急に考え込んだルントに、ダライアス師は怪訝そうな顔を向ける。ルントはしばし躊躇った後、決然と顔を上げた。

「ダライアス師。お願いがあります」

「……何か大事な話の様だな。ここには作業員もいる。一応彼らも守

秘義務は心得てはいるが、大事な事なら聞かせないに越した事は無いだろう。
そうだな……作業も一段落した事だし、少し休憩を入れて休憩所で休みながら話を聞こうか」
「はい」

彼らはその後しばしの間、ハンガーの休憩所を占領して真剣な顔つきでしばし話し合っていた。しばらく経って話が終わった後に、ルントが難しい顔で、ダライアス師が少々困惑した顔で、休憩所から出て来る。それを見た作業員たちは、いったい何があったのかと怪訝に思った。

＊

冒険者組合本部付き演習場で、ダライアス師の『アーチャー・フィッシュⅡ』とララ中尉の『ドランカード・タイガー』、アレクシア大尉の『ロイヤリタートＴｙｐｅⅣ』、ルントが借り出した機装兵（きそうへい）『アーミィ・アント』が、ヴィレム駆る新生『ジェンティーレ』の実機試験を見守っていた。
『ジェンティーレ』は増槽を装備したり様々な補器を追加されたために、若干重量増加してはいたが、グライデンパックの出力強化により以前よりも高い機動性能を発揮している。
ちなみにアレクシア大尉は本来ならば、加速装置実験機の『ローター・ブリッツ』に乗り換えていたのだが、『ローター・ブリッツ』はルシ三人娘の一人であるルージーと二人乗りで動かす機体である。そのルージーは今、三人娘の残り二人であるジェリー、ブリジットと共に同盟軍士官学校だ。
それ故彼女は、以前の乗機である『ロイヤリタートＴｙｐｅⅣ』に搭乗しているのである。
ダライアス師は、徐（おもむろ）に呟く。

『うむ……。これまでは問題無かったな』
『はい、技術中佐。どの実測データも、事前に予測した許容範囲です』

ララ中尉が無表情な声で、ダライアスに答えた。だがダライアス師の『アーチャー・フィッシュⅡ』は、操手の不安を反映してか、首を傾げる。

『しかし……。次の……最後の試験がある。例のヴィレム殿でも制御不能レベルの高機動を組み込んだ、0番のキーに割り当てた切り札とも言える動作……』
『では最後の試験項目だな、ダライアス師』

そこへヴィレムの『ジェンティーレ』から、声が上がった。ダライアス師は、それに応える。

『ああ。あちらに標的……。スクラップになった旧世代機の重機兵を出してある。あれを目標にして、0番のキーを叩いてくれ。ただし、くれぐれも慎重にな』
『グライデンパックの出力を限界まで出しての、全力での突撃行動をセットしてあるんだったな』
『その通りだ、ヴィレム殿。だが、万一異常が起きたら即座に手動操作で突撃をキャンセルしてくれ』
『了解だ。では始める』

言うやヴィレムの『ジェンティーレ』は、標的に向き直る。そして次の瞬間、凄まじい風の唸りが『ジェンティーレ』の背部から発生。そして『ジェンティーレ』は、爆音を発して一瞬で超高速にまで加速。

その手に握られ突き出されたチェインバスタード改が、紫電を纏いつつ標的のスクラップ重機兵を粉々に粉砕。更に副次的に発生した衝撃波が、標的の残骸を派手に吹き飛ばしていた。

標的を撃破した『ジェンティーレ』は、しかし即座には停止せずに

そのまま大きく弧を描いて徐々に速度を落とす。見ると『ジェンティーレ』の初期位置から標的のあった場所に至るまで、衝撃波による深い溝が大地に走っていた。ルントの呆れたような声が響く。

『凄い……』

『ヴィレム殿、無事かね？　……ヴィレム殿？　ヴィレム殿、返事をしたまえ！』

『ぐ……。いや、大丈夫だ……』

ダライアス師の呼び掛けに、多少遅れて返事があった。しかし大丈夫だと言う割に、その声には苦痛の響きがある。

そして『ジェンティーレ』がゆっくりと、のろのろした微妙な足運びで戻って来た。出来る限り、操縦槽に振動を与えない様な歩き方だ。それを見て、アレクシア大尉が突っ込む。

『……ヴィレム殿。貴殿、どこか痛めただろう』

『見ればわかるな』

『同意します』

ダライアス師とララ中尉も、同意を返す。ルントが慌てて叫んだ。

『ちょ!?　ヴィレムさん、無理をしないで！　今救護班呼びますから！』

『む……。肋骨が一～二本いかれただけだ。大事無い』

『大事ありますよ!!　衛生兵、衛生兵ー!!』

急ぎ救護班が『ジェンティーレ』の足元へと集まる。それを眺め遣り、ダライアス師はため息を吐いた。

『ヴィレム殿が制御できないほどの高速高機動を、との要望だったから、グライデンパックが吹き飛ぶ直前まで出力を高める様に調整した

が……。流石にやり過ぎだったか』
『いや、このぐらいの無茶が効く様でなければ駄目だ。要望通りに作っていただき、感謝する』
『いいから貴殿はさっさと救護班の担架に乗りたまえ。まったく……。ああ、まかり間違っても、今後0キーは連打するなよ？　それこそ風の魔力がオーバーロードして吹き飛ぶぞ？　いやいっその事、連打できないように、機構的にロックをかけるべきか……』

ダライアス師は疲れた様に頭を振った。彼らの機兵（きへい）の足元では、ヴィレムが担架に乗せられて運ばれて行く。少なくとも今の機動を発動するための0キーは、うかつに押せない様にカバーを取り付けるべきだと、ダライアス師は心に決めた。

＊

冒険者組合本部のゲートで、ダライアス師はヴィレムとルントを見送りに来ていた。ヴィレムの怪我のせいで少々遅れたが、ルントはここ同盟の中央都市アマルーナに実家があるためそちらへ帰省する予定であるし、ヴィレムもシュウの工房のアマルーナ支部に下宿しておりそこへ戻る事になる。
ちなみにまだヴィレムの肋骨はくっついてはいない。幸いなことに内臓の損傷などは無く、鎮痛剤の投与と固定具による固定で済んでいる。
なおダライアス師の左右には、ララ中尉とアレクシア大尉が立っているのは言うまでもない。ダライアス師たちは、ヴィレムとルントの傍らにそびえ立つ『ジェンティーレ』を見上げる。『ジェンティーレ』には、強化されたグライデンパックとチェインバスタード改が装備されていた。

「……まあ、なんとか形になったな」
「貴方のおかげだ、感謝するダライアス師」

「予定よりも長く居たのに、何かあっと言う間でした」

ヴィレムとルントの二人も、何と言おうか感無量の様だ。と、ダライアス師が左手に持っていた手提げカバンをルントに差し出す。ルントはきょとんとした。

「え？　……これは？」

「わたしが纏めた、魔力型電磁加速砲の、その論文一式だ。もっとも、同盟軍の軍機に関わる部分は削除してあるがね。持って行きなさい」

「えっ……。えっ!?　せ、先日お願いした時は、駄目だと言う話だったのでは!?」

驚くルントに、ダライアス師は苦笑しつつ答える。

「軍機に関わる部分があるからな。だからこれは、そう言う部分を削った、一般……と言っても学者向けだが、一般公開用の論文だ。君の能力と知識ならば、これに書いてない部分も自分で埋める事ができるだろう」

「……っ!!　あ、ありがとうございます!!」

「それを上手く役立ててくれる事を願うよ」

そしてダライアス師とララ中尉、アレクシア大尉は踵を返し、冒険者組合本部の中へと消えて行った。ヴィレムは手提げカバンから論文を取り出して興奮状態で読みふけるルントに、声をかける。

「……そろそろ行かんか？　私は機装兵（きそうへい）を歩かせて行くから構わんが、そちらはあまりのんびりしていると、蒸気バスが出てしまうだろう」

「えっ！　あ、そ、そうですね！　じゃあ行きましょうか！」

ヴィレムは不器用に微笑みを零すと、『ジェンティーレ』の操縦槽（そうじゅうそう）

へと登る。途中、折れたままの肋骨が痛んだが、なんとか乗り込みに成功した。

そして『ジェンティーレ』は起動し、ゆっくりと歩きだす。徒歩のルントを置いて行かない様に、そして折れている肋骨に響かない様に。目的を達した二人の男は、家路についた。

Ｆｉｌｅ１３「秘密の計画」

聖華暦八三四年八月、自由都市同盟の都市同盟軍、参謀本部事務局長ナイジェル・サイアース中将は、自分の執務室で分厚い書類の束を前に、眉を顰めていた。だが、その口元はにやりと笑みを形作り、表情全体としては苦笑じみたものになっている。

彼の手にある書類束の表紙には、第一級軍事機密を示すスタンプが、赤インクで押されていた。

「……ふむ。ダライアス・アームストロング技術中佐とエリベルト・エルナンド技術大佐が、連名で持ち込んできた計画書、か。だが計画の骨子を作ったのは、ダライアス技術中佐の様だな。

……たしかにこの計画が実施できれば、今現在のバフォメット事変で消耗しきったわが同盟にとって、起死回生の策ではあるが……」

徐にナイジェル中将は、傍らに立っている副官たる犬耳の士官、ジャレッド中佐に問いかける。

「どう思うね？　ジャレッド中佐。もし帝国や聖王国に中途半端なところでこの計画がバレようものならば……。しかし断行しなければ、同盟はじり貧だ。そう考えると、天の助けとも思えるがね」

「は？　は、はあ……。自分には……」

「ああ、いや。済まなかったね。無理に答えなくとも良い。

……そうだな。断じて行えば鬼神も之を避く、だ。ジャレッド中佐、冒険者組合に連絡を取ってくれたまえ。そして早急に、出向中のダライアス技術中佐との直接会談をセッティングしてくれ。

その際に、冒険者組合組合長と管理委員会議長、それと都市同盟軍研究所のエリベルト技術大佐も同席してもらえれば、ありがたい」

「……!!　はっ、了解であります！」

ジャレッド中佐は急ぎ自分の執務机へ戻り、備え付けの有線通話機

を用いて冒険者組合へと回線を開く。多機能通信魔導器を用いないのは、無線による通信では万が一の盗聴を危惧しなければならないからだ。そして彼は、冒険者組合の担当者と喧々囂々丁々発止の交渉に入る。

一方ナイジェル中将は、幾多の書類を処理しつつ、それと並行して頭脳を高速回転させていた。

（……ダライアス技術中佐か。バフォメット事変の英雄の一人。『轟砲の幻装兵　ヴェイルー・ヌ・ザアンティス』の操手。だがこの計画が上手くいけば……。その功績は彼がバフォメット事変で立てたソレなど、問題にならんほど巨大な物になる。

……まあ、かまわんか。彼は計画実行に際し、エリベルト技術大佐ともども、わたしを頼って来た。つまりは、そう言う事だ。

だがこれだけの大きな計画となると、わたしの派閥だけでは力量不足だな。ふむ、この際だ。巻き込める味方になり得る者たちは巻き込んでしまうか。ホーリーアイ武器工房、シームド・ラボラトリーズ、マギカライフ・テクノロジーズもどうにかなるだろう。ロココ設計所は巨大すぎるか？　いや、わたしの交渉力しだいか。

アイオライト・プロダクション……あそこはダメだな。あそこは帝国や聖王国とのパイプが太すぎる。そこから情報漏れでも発生したらたまらん）

そして後日、ナイジェル中将とダライアス技術中佐、他数名の重要人物を交えた会談は実現する。後の歴史を大きく変えたこの会談は、しかし秘密裏に行われたため、残念ながらその内容は参加者たち以外に知る者は無かった。

＊

そして計画は動き出す。

＊

『おい！　危ないからドリルに近づくな！』

「すんません！」

自由都市同盟に含まれる南部諸国連合のバラライカ共和国、その中央部太平洋側にある荒野で、二台の大型従機が大地に穴を掘っていた。従機の両腕は、巨大なドリルになっており、強固な大地をいとも容易く掘り進んで行く。ほんのわずかの間に大量の土砂、残土が従機の後方に吐き出される。

その脇では、都市同盟軍仕様の小型従機『ピギーバック』が何体も群がり、魔導動力のベルトコンベアに残土を載せていた。今しがたの叫び声は、『ピギーバック』の一体がうかつにも大型従機の腕のドリルに近づきすぎたためであった。コンベアに乗せられた残土は、蒸気自動車の荷台に載せられると、何処かの残土置き場へと運ばれて行く。

大地を掘り進んでいるこの二台の大型従機だが、その名を『モール』と言う。つまりモグラの事だ。ぶっちゃけた話、そのまんまの名前である。これこそがダライアス技術中佐が設計開発し、とりあえず現状で六台製造された地盤・岩盤掘削用の大型従機なのだ。

やがて二台の『モール』は予定していた作業を終え、大地に大きく開いた坑道から出て来る。そこへ大型の蒸気トレーラーに載せられた新たな『モール』二台が到着した。到着した『モール』に蒸気トレーラーに相乗りしてきた操手二人が乗り込み、機体を起動する。

新たな『モール』二台はそのまま坑道へと入って行き、しばし後に坑道から大地を掘削する轟音が響いて来る。先に作業を終えた『モール』二台は入れ替わりで蒸気トレーラーの荷台に載せられ、何処かへと運ばれて行った。

そう、『モール』は現状で六台あるのだ。二台ずつ八時間ごとの三交代で、二十四時間休みなく坑道を掘り続けるのである。無論、八時間掘削作業を行った機体は後方の基地に送られ、そこで綿密な点検整備と補修を受ける。場合によっては摩耗したドリルの交換なども行わ

れるのだ。
　そんな様子を、近場の丘の上から双眼鏡で見ている、一団の人影があった。
「……凄いものですな。あの『モール』と言う従機(じゅうき)は」
「あれを鉱山開発に用いた際に得られる利益は、利率を厳しく見た試算でさえも驚くべきものでしたぞ」
「正直な話、中将閣下が仰られた計画に用いるよりも、今すぐにでも鉱山開発に用いたいほどですが……」
　その人物たちは、いかにもどこぞの高官と言った姿をしている。周囲には護衛と思しき軍装の人間たちが、油断なく警備をしていた。高官たちの中で、ひと際存在感のある白髪の初老の男性が、言葉を発する。誰あろう、ナイジェル中将であった。
「それは浅慮と言うものだ。あの工事が完成した暁に、貴官らにもたらされる利益がどれほどの物であるか、理解しているだろう？」
「は、それは重々……」
「ですがついつい、考えてしまうのですよ」
「ええ、あの腹立たしいトカゲの親玉のおかげで、我々が被った損害を、可能であればわずかであっても、一刻も早く補填したいと」
　彼らは南部諸国連合(ラ・カルト)の重鎮たちであった。あの魔王級魔獣バフォメットの通り道であった、ただそれだけの理由で、南部諸国連合(ラ・カルト)各国は凄まじいとしか言いようのない被害を受けたのである。だがナイジェル中将は、柔らかく微笑んで言う。
「大丈夫だとも。従機(じゅうき)『モール』はその特殊な構造ゆえに、残念ながら今のところ大量生産はできない状況にある。しかしそれでも既に、小規模量産が可能な生産ラインは動き出しているのだ。
　あの工事が完成して得られるものは莫大なエネルギー、そしてそれ

によって稼働する巨大な工業施設群だ。だがいかに工業施設群があったところで、原料がなければ話にならんよ。原料を手に入れるためには、それこそ貴官らの所有する鉱山企業の協力が必要だ。
貴官らに貸し出すための従機(じゅうき)『モール』は、既に確保されている。来週にはそちらに届けられるので、存分に使いたまえ」

南部諸国連合(ラ・カルト)高官たちは、しかし顔色を青褪めさせ、ナイジェル中将に一糸乱れぬ敬礼を送った。彼らがナイジェル中将に怯えているのは、見た目で明らかだった。

「了解であります！」
「ありがとうございます！」
「この御恩は忘れません！」
「フフフ、そう硬くならないでもいいとも。……わたしは貴官らに期待している。近い将来、今現在の中央都市アマルーナではなく、貴官らの南部諸国連合(ラ・カルト)こそが自由都市同盟の中央になる。そのために、この計画が必須なのだよ。
だからこそ、協力関係を結んだシームド・ラボラトリーズを通じて南部諸国連合(ラ・カルト)に……。貴官らに働きかけたのではないか。
わたしがアマルーナからこちらへ視察に出向いて来たのは、それだけわたしがこの計画を重視しているが為だと理解して欲しい」

そう言ったナイジェル中将は、そして双眼鏡で再度工事の現場を見遣る。今はまだ坑道を掘り始めたばかりであるが、既に試掘ボーリングは済んでおり、目標である地下千mまでの地質は調査済みである。そして坑道が掘り終わった暁には、あの地点に巨大なプラントが建設される事になるのだ。
ナイジェル中将は、内心で独り言ちる。

(……そうすれば、この施設とその周辺に建設予定の工業施設群は、同盟にとって生命線となる。当然ながら、南部諸国連合(ラ・カルト)の同盟内での地

位は向上する。南部諸国連合(ラ・カルト)こそが、同盟をリードする立場になる。
それまでに……。この者たちには、もう少し成長してもらわんとな。自由都市同盟(じゆうとしどうめい)と言う大国を率いる一員として、足る器になるまでに。今のまま、近視眼的な視野のままでは困ると言うものだ。
……だが今のままでも、今現在の国家中枢にいる多くの連中より若干ましだと言うのが泣けてくるな。奸物(かんぶつ)どもは、除かねばならんか。使い物になるかと思って残しておいたが……。害の方が大きい）

双眼鏡の視野の中では、大量の土砂、残土が坑道からベルトコンベアで運び出され、蒸気自動車で運び出されて行く。ナイジェル中将は双眼鏡から目を離し、頷いた。

＊

数日後の事である。中央都市アマルーナの軍用区画中枢部にある自らの執務室で、ナイジェル中将は再びダライアス技術中佐と、今度は一対一で面談していた。

「ダライアス技術中佐、よく来てくれた。本当ならば忙しい貴官を呼びつけるのではなく、わたしから会いに行くべきかとも思ったのだがね。だが申し訳無いが、わたしも例の計画のためもあり、正直貴官以上に忙しくなってしまった」
「それは理解しています。幸い、自分の作業はちょうど一段落しておりました。次の山が来るまでは、多少時間があります」
「それならば良かった。いや、できるだけ早いうちに、貴官ともう一度会って話をしておきたかったのだよ。……貴官を見定めるために、な」

そしてナイジェル中将は、にっこりと笑う。だがその目は笑っていない。周囲の空気に空恐ろしいほどの圧力が満ちた。だがダライアス技術中佐はその圧力を、柳に風と受け流す。

と、次の瞬間、空気に満ち満ちていた圧迫感がきれいさっぱりと消滅した。

「……流石だな、技術中佐」

「申し訳ありませんが、先ほど程度ならば翼竜の突然変異体……魔導障壁（まどうしょうへき）を持ち、ヘルカイトに倍する体躯を持つあの化け物と、生身で相対する方が恐ろしいですな」

「ふっ、なるほどな。実戦の恐怖を克服している者に、下手な脅しは通用せんか。しかも貴官は、腹芸の類は苦手だと調べがついている。まあ……学者的な人間と言えば、そうなのだろうな。

ふむ。となれば、単刀直入に問うしかあるまい」

笑みを消したナイジェル中将は、ダライアス技術中佐に向けて真摯な表情で問いかける。

「……貴官は、何を求めている？　わたしは貴官らが持ち込んだ例の計画が同盟のためになると思えばこそ、その後ろ盾になる事を承諾してその推進にあたっている。だが立案者であるエリベルト技術大佐と貴官……。

いや、エリベルト技術大佐は名前を貸しただけである事は、調査済みだ。あの大計画を発案し立案した貴官は、いったい何を求めている？　富か？　栄達か？　権力か？」

「現状維持を」

間髪入れずにかえってきたダライアス技術中佐の返答に、ナイジェル中将の眉が一瞬ぴくりと動いた。ダライアス技術中佐は一拍置いて、言葉を続ける。

「無論、これは最低限の望みですがね。わたしが望むのは、自由な研究環境です。ですが近い将来確実に、それは脅かされる。間違いなく。……何もかも、バフォメットが悪い」

「ふむ……」
「今のままですと近い将来同盟は、帝国か聖王国に飲み込まれるのは避けられない。帝国の方が可能性は格段に高いですがね。わたしが望む、現状維持とはそう言う事です。
帝国の下でも聖王国の下でも、わたしの研究は異端です。獄に繋がれるか、処刑されてしまうか……」

ダライアス技術中佐は肩を竦めてみせる。

「わたしに自由な研究をさせてくれるのは、自由都市同盟しか無いのですよ。わたしにとって研究は、水や空気に等しい。そう言う意味でも、わたしは同盟を愛している。無くなられては、困るなどと言う程度どころではないのですよ」
「同盟を愛している、か」
「ええ。だから閣下にあの計画を持ち込んだのですよ。失礼ながら、閣下を調べさせていただきました。あの計画を持ち込む相手として、最適なのは誰か……。正直、必死でしたからね。色々調べた結果、閣下が最適であると判断いたしました」
「ほう？　わたしが周囲からどう思われているか、調べたのなら理解していると思ったがね？」

ナイジェル中将の広く一般に知られている評価は、腹黒く冷徹で容赦のない人物だ、と言う物である。そしてそれは決して間違った評価ではない。利用できるものは利用し、政敵は巧妙に排除して、軍官僚一本槍で都市同盟軍内でのし上がって来たのが、彼なのである。
だが、ダライアス技術中佐は再度肩を竦めて見せる。

「そうですね。周囲の閣下への評価は、間違ってはいない。ですが、それだけではない」
「……」
「閣下の行い……閣下の行動を子細に分析すれば、見えて来る物があ

ります。閣下は、閣下の利益のために行動している、それは間違ってはいない。
ですが、閣下の行動は閣下個人のためだけの物ではない。どの様な場合でも、閣下の行動はかならず『同盟のため』になっています。いや、そちらを優先して閣下自身の利益を度外視した行動に出ている事も、一度や二度ではありません」

ダライアス技術中佐はナイジェル中将の目を、真っ向から見つめて言った。

「閣下、あなたは……自由都市同盟（じゆうとしどうめい）を愛している。わたしと同じ様に。いや、わたし以上に。
……少なくとも、わたしたちの分析ではその様に確信できました。だからこそあの計画を持ち込む相手として、わたしたちの立場を勘案した上で閣下こそが最適だと判断したのです。無論あの計画を実施する上で、きれいごとだけで済むわけが無い。そう言った事も含め、わたしたちは……」
「そうか……」
「閣下？」

ナイジェル中将は、すっ、と右手を差し出して来る。一瞬ダライアス技術中佐はそれが何を意味するのか理解できなかった様で、右の眉をぴくりとさせた。しかし次の瞬間、彼はナイジェル中将の意図を理解する。そして彼もまた右手を差し出し、ダライアス技術中佐とナイジェル中将は固い握手を交わした。

「ダライアス・アームストロング技術中佐。忙しくなるぞ。一分一秒ですら惜しい。可能な限り早くあの計画……『海洋温度差発電所および完全電化工業都市群建設計画』を完遂させる。そして帝国と聖王国が気付く前に、自由都市同盟の国力をバフォメット事変以前……いや、それ以上に高め、都市同盟軍を再建するのだ。

万が一、帝国と聖王国との二正面作戦になっても戦いうるだけの……。いや、勝利し得るだけの力を、同盟は蓄えなければならん。貴官の力、貸してもらう」
「我々は、既に一蓮托生では？」
「ちがいない」

海洋温度差発電所と、完全電化の工業都市群……。名前からして明らかにこれは、科学技術の産物であった。この世界において、科学技術は忌避され、放棄された存在である。何故ならば、科学技術とはこの世界をいったんは滅ぼした、旧人類たちの邪悪な技術であるとされているからだ。

この世界に今を生きる新人類たちは、科学技術の代替として魔力を用いる『魔導工学』や『魔法』を使用している。そしてこの世界の三大国家、アルカディア帝国、カーライル王朝・聖王国、自由都市同盟のうち、帝国と聖王国ではヒステリックなまでに科学技術を嫌悪し、排撃している。その二国の領内で科学技術の産物を使用している……いや、所持しているのが発覚しただけで、投獄か、下手をすると粛清されてしまうほどなのだ。

科学技術に対してリベラルな自由都市同盟においても、そこまでヒステリックではないだけで、おおっぴらに科学技術を用いる事は無い。発覚すれば、帝国や聖王国からの干渉が避け得ないからである。しかし今、自由都市同盟は存亡の危機にあると言っても過言ではなかった。

国を揺るがすほどの一大事件、魔王級魔獣バフォメットによる襲撃……バフォメット事変が、全ての原因である。都市同盟軍の必死の抵抗、そして英雄たちの死を賭した戦いにより、多大なる犠牲を払ってバフォメットは討滅された。

だがその爪痕は深く、とても深く、自由都市同盟という国に刻み込まれたのだ。そして周辺国は、自由都市同盟が再起するのを待ってはくれないだろう。

それ故、ダライアス技術中佐は同盟を護るために、同盟を早急に再

起させるために劇薬を投与する事を決めた。同盟が他の二国に対し、わずかに持っているアドバンテージ……。科学技術に対する理解というソレを、最大限に活かす劇薬。科学技術による復興である。

そしてナイジェル中将はそれに賭ける以外、同盟の存続が難しいと見た。だからこそ、中将はそれに手持ちの全部の賭け札を張ったのだ。

後の世で、科学技術排斥派の者たちからこの二人は、悪魔のごとく、蛇蝎(だかつ)のごとく謗(そし)られる事になる。だがしかし、彼らからすればそれ以外に道は無かったのである。

Ｆｉｌｅ１４「お見合い」

重々しい音を立てて、魔導仕掛けのクレーンがそこそこ重量のありそうな機械装置を吊り下げ、引き上げていく。その装置は、巨大な台に横たえられている巨人兵器……機装兵から、つい今しがた取り外された物だ。その機装兵の名を、『イグナイト改９』と言う。

冒険者組合の兵器開発局に出向中の、都市同盟軍技術中佐ダライアス・アームストロングは、クレーンの操作をしている銀髪の少女、ララ・エルナンド中尉に合図を送る。ララは正確な操作で緻密に精密にクレーンを動かし、吊り下げられた装置を『イグナイト改９』の隣の台に置かれている別の機装兵の上へと移動させた。

その機体の名は、『ローター・ブリッツ』。『紅雷』を意味するその名の通り、紅に染め上げられた美しい機体だ。

ダライアスは再度ララに合図を送り、吊り下げられた装置をゆっくりと『ローター・ブリッツ』の、装甲板が取り外されたその胸の中へと下ろさせた。そして正確に装置が機体の胸に収まったのを確認すると、彼は吊り下げワイヤーを装置から取り外し、そして装置を機体内部にしっかりと固定、取り付ける作業を行った。

そう、今彼は間に合わせの実験機であった『イグナイト改９』から、本格的な加速装置実験機として建造した『ローター・ブリッツ』へと、加速装置本体を移殖する作業を行っていたのだ。

そして彼は、『ローター・ブリッツ』の胸部へ装甲板を取り付け、加速装置移殖を完了させる。

「ふむ……。これで『ローター・ブリッツ』は一応できあがりだ。あとは稼働試験をして、細々した調整を行えば、完成する。アレクシア大尉とルージーは、喜んでくれるだろうかな。」

「きっと喜びます、我が主。」

「とりあえず極秘作業中と言う事でこの工房は、余人を立ち入り禁止にしてはいるが……。できるならその呼び方は避けて欲しいんだがね。」

「大丈夫です。誰もいません。確認済みです。」

溜息を吐いて、ダライアスは周囲を見渡す。その瞳に『ローター・ブリッツ』の、未だ建造中の姉妹機二機が映った。それはまだ骨格のフレーム構造がむき出しで、内部機器の取り付けが半ばまで終わった程度である。

各々の名を、『グルウン・ブリッツ』『ブラウ・ブリッツ』と言う。『緑雷』『蒼雷』の名の通り、この二機は完成の暁には、それぞれ緑と蒼の装甲が施される予定だ。当然ながらこれらも、加速装置実験機である。

「さて、今日の作業は終わったが。そうしたら……。『宴会』だったな」
「はい。我が主の護衛を兼ねた、研究成果のテストを行う『実験部隊』の結成を祝うパーティーです」
「アレクシア大尉の率いる中隊、か。……『人材』が、見つかればいいんだが、な」
「はい」

ダライアスとララは、後片づけを終えて工房を立ち去る。工房を照らしていた魔石灯のスイッチが切られ、『イグナイト改9』を含めた四機の機装兵が、闇の中に沈んだ。

＊

中央都市アマルーナの西側にある冒険者区画、その南側にある料理店を一晩貸し切って、『実験部隊』の結成祝賀パーティーは行われた。と言っても、さほど豪勢な宴会ではない。

何せバフォメット事変の最終局面……魔王級魔獣バフォメットの襲撃により、アマルーナの商業区画の半分、本来の都市領域から溢れ出し、城壁の外側に広がっていた部分が灰塵と化したあの惨劇から、まだ一ヶ月と少ししか経っていないのだ。あまり派手な事をやるの

は、不謹慎と言うものだろう。
それに宴会の資金を出したのはダライアスとララ、アレクシア大尉の三人だ。ダライアスは余裕があれば研究にブッ込むし、ララの中尉の俸給などはたいした額では無い。まあ彼らの場合、様々な手当てが基本の俸給とは別に支給される上に、ダライアスの財布はララが管理する様になってから随分と無駄が減ったので、多少の余裕があるが。
アレクシア大尉は、彼女は彼女で実家が裕福な上にちょっとした事業を手掛けている。ただしその事業もバフォメット事変の影響で打撃を受けたが。俸給も諸手当の類も、彼女は無駄遣いせずに貯蓄しているつもりだ。そう、『つもり』だ。彼女はいつも四六時中装備している鎧や武具の手入れとか、予備の武具とかに実はけっこう無駄金を使っている。先日彼女はその事をララから指摘され、凹まされていたりするのだ。
そして結局彼女も、ララに財布を管理される様になった。そして同じく、経済的には多少の余裕がある、と言う程度に落ち着いている。
まあ、そんなわけで『多少余裕がある』程度の三人が資金を出した宴会は、それほど慎ましすぎず、しかし不謹慎なほど豪勢ではない、と言ったほどほどの物となった。立食形式で、堅苦しくは無い。

「あー、諸君」

ダライアスは、宴会に先立って挨拶の言葉を求められる。細身と言うよりガリガリでひょろ長く、いかにも頭でっかちな学者に見えるダライアスは、しかし『実験部隊』としてアレクシア大尉の下に集められた荒くれ――そうでない者もいるが――たちから、畏怖を持って迎えられる。
まあ、それはそうだろう。彼は『轟砲の幻装兵』の二つ名を持つ機体、『ヴェイルー・ヌ・ザアンティス』の操手として、かのバフォメット事変を戦い抜いた英雄の一人なのだ。
それに彼はこの宴会のスポンサーだ。美味い飯を食わせてくれる人物に、悪い奴はいないのである。

そしてダライアスは言った。

「固い事は言わん。好きに食って、好きに飲んでくれ。ただし羽目を外し過ぎて、店に迷惑をかけないようにな。以上」

「「「「「う……うおおおぉぉぉ!!」」」」」

満場の拍手喝采。操手(そうしゅ)だけではなく、整備などの支援人員、警備のための歩兵一個小隊二十八名まで含め、総勢六十人ちょっとが一斉に叫ぶ。店が貸し切りで良かった、とダライアスは思った。続けて部隊長たるアレクシア大尉が音頭を取って、乾杯をする。

「よし、貴様らコップを持て！それでは……。我らの部隊の結成を祝して、乾杯！」

「「「「「乾杯!!」」」」」

そして宴は始まった。

＊

宴も半ばの頃合い、飲酒をなるべく避けて――それでもときどき捕まってしまい酒を注がれたりもしたが――とりあえず食う事に専念していたダライアスのところに、小柄な少女三人を連れてアレクシア・アーレルスマイヤー大尉がやって来た。宴会で飲食せねばならぬので、今日はめずらしくバケツ型ヘルムではなしに前が開いたオープン・ヘルムを被っている。

と言うか、宴席でぐらい武装するなと言いたいダライアスであった。

「……先ほど、乾杯の挨拶の時にも思った事だが。君との付き合いは七ヶ月ほどにもなるか？　なのに顔を見るのははじめてだな」

「……そうでしたか？」
「ああ。茶を出したときなども、バケツ型ヘルムを脱がずにストローで吸っていたろうに。てっきり顔を出さぬ事に何かしらこだわりなり思い入れなり願掛けなり決意なりがあるのかと思っていた」
「まあ……。童顔なので甘く見られたくない気持ちは多少ありましたが……。そこまでこだわっていたわけでは。ルージーには見せろと言われたので、見せてやりましたし」
「はい、見せてもらいました」

そう言ったのは、ダライアスの義娘である赤髪の士官候補生、ルージー・アームストロングだ。彼女と彼女の姉妹は、自由都市同盟は都市同盟軍中央軍参謀本部の意向で、試験こそ行ったが特例中の特例をもって都市同盟軍士官学校への中途入学を認められた英才である。
もっともこれは、都市同盟軍がバフォメット事変により多数の死傷者を出した事が影響しており、彼女ほど才能がある軍志願者を放置しておくわけにはいかない、万が一にも逃がすわけにはいかない、と軍上層部が焦ったのが原因である。もっとも実は他にも、隠された秘密があるわけなのだが……。
なお彼女は今現在、休暇中である。というよりもバフォメット事変による影響で、自由都市同盟首都、中央都市アマルーナの都市同盟軍士官学校は、一時的なものとは言え機能不全に陥っていたのだ。それ故、士官学校が復旧するまではとりあえず士官候補生たちは休暇扱いになっていたのである。
ちなみに今現在の都市同盟軍上層部の焦りっぷりは、かなりとんでもないレベルであった。その一例として、ルワ魔導女学校の戦術機兵学科、戦術魔法学科、機兵工学科など、特例にて士官学校と同等とされている一般学校の卒業生で、都市同盟軍に士官もしくは魔導士官、技術士官として入隊する事を選ばなかった人材に対し、様々な優遇措置と引き換えに改めて軍への入隊を説得した事などが挙げられる。
この年、都市同盟軍はなりふりかまわず人材の確保に走っていたのだ。

閑話休題（それはともかくとして）、ダライアスはアレクシア大尉が連れて来た残りの二人に向き直る。彼女らがルージーの姉妹であるジェリー・アームストロングとブリジット・アームストロングだ。緑髪の方がジェリー、蒼髪の方がブリジットである。ダライアスは、彼女らに話しかける。

「で、どうだった？　相性が良い操手（そうしゅ）は居たかね？」

「候補を二名見つけましたが……」

「わたしも二名です。ですが……。二人ともジェリーと被ってしまって……」

「それはしかたない。わたしたち三名は、能力傾向が極めて近い。わたしはアレクシア大尉を『主（あるじ）』と定めたけれど、わたしほどでは無くても貴女たちも大尉と相性が良かったはず」

ルージーの言葉に、二人は頷く。ダライアスの傍らに控えていたララが、二人に訊ねた。

「候補の二人は、両方とも相性の順序は同じなのですか？」

「いえ、わたしからすれば犬耳をした女性士官の方が相性はいいです。相性の指数は１８１．２です」

ジェリーが語ると、それに続けてブリジットも説明する。

「わたしと相性が良いのは狼頭の青年士官です。相性の指数は１７９．９です。」

「互いの第一位が被っていないのならば、たいした問題ではないな。どの士官かね？」

「あの女性と……」

「あの青年です」

ダライアスの問いに、ジェリーとブリジットは二人の士官をそれぞれこっそりと指し示す。片方はシェパードの耳を持つスレンダーな

美女、もう片方は狼頭の細マッチョだ。女性の方は皿に料理を山盛りに取って他人から距離を取り、壁の華になっている。青年の方は彼は彼で、適当な若い少尉を捕まえては無理矢理に肩を組み、迷惑そうにしている相手にも構わずげらげら笑声を上げていた。ダライアスは、頭の中の人事書類を急ぎ捲る。

「ふむ、両方とも獣牙族で、女性の方は犬耳、男性の方は狼頭か……。それで、どちらも中尉……。なるほど、ジェナ・スホーンデルヴルト中尉にフーゴ・グラッツラ・ディンフィンブルム中尉だな。よし、準備が出来たら両者を呼んで、面談することにしよう。

ジェリー、ブリジット、それでいいな？」

「「はい」」

「よし、ではあとはルージーもいっしょに、のんびり飲み食いしてきなさい。もし絡まれたりしても、きちんと手加減はしてやりなさい。では、楽しんできなさい」

「「「はい」」」

ルージーを含めた三人は料理を取りに、手近なテーブルの方へと向かって歩み去る。と、ララがアレクシア大尉に問いかけた。

「けれど、よく思いつきましたね。」

「何をだ？」

「この宴席を用いて、ジェリーとブリジットの『主（あるじ）』を探す事です」

「ああ、いや。それはルージーの発案だ」

アレクシア大尉は、苦笑を浮かべつつ言う。ララはわずかに微笑を浮かべた。

「ああ、なるほど。理解しました」

「いや、そこで納得されてもな。まあ、ルージーは自分にだけ『相方』が見つかって、他の二人に見つかってないのをけっこう気に病んでい

てな」
「なるほど。……申し訳ありません。本当であれば、わたしたちが気付いていなければならなかったところを」
「あ、いやいや。わたしとて敬われてはいない様だが、それでもルージーの『主(あるじ)』なのだ。彼女の世話を焼くのは当然だ」

アレクシア大尉はララの謝罪に、焦った表情を浮かべる。彼女の表情が見えるのはめったにある事では無いため、ダライアスは若干の違和感とともに、それを少し面白く思った。そしてララが、アレクシア大尉に微笑みかける。ララも随分と、自然に笑う様になった。ダライアスはそれもまた、喜ばしく感じる。

「ルージーからすれば、あれは貴女に対し甘えているのです。つまりは信頼の証でしょう。敬っていないなどと言うのは、勘違い、と言うよりは単にそう見えないだけでしょうか」
「そうなのか!?」
「そうです」

ララとアレクシア大尉の関係も、随分と改善された。まあそれを言うなら、アレクシア大尉は最初がひどかったと言うか、ひど過ぎたのだが。いや、ララはララでけっこう無茶苦茶であったが。ダライアスはいつの間にか、以前の自分では絶対にしなかったであろう柔らかな笑みを、その顔に浮かべていた。

＊

パーティーから、一週間が過ぎた。ダライアスはその間に、制作中であった様々な装備品を完成させるため、頑張って作業をおこなっていた。一方アレクシア大尉は『実験部隊』の編制を発表し、彼らを訓練し、そして幾つかの実験装備の追試を行わせている。
そしてダライアスの作業が完了した時点で、アレクシア大尉はジェ

ナ・スホーンデルヴルト中尉とフーゴ・グラッツラ・ディンフィンブルム中尉の二名を、冒険者組合の演習場まで呼び出したのだ。
　ダライアスとララ、そしてアレクシア大尉が演習場までやって来たとき、二名の中尉は既にその場で待っていた。ちなみに何故か、ジェナ中尉は苦虫を噛み潰した様な表情を浮かべている。フーゴ中尉が狼顔でもはっきりと判る笑みを浮かべ、言葉を発した。

「たいちょー。大尉どのー。俺たちが呼び出されたのは、なんでッスかぁ？」
「フーゴ中尉！　上官で指揮官に向かい、なんて口の利き方だ！」
「いいじゃねぇかよ、ジェナさんよう。たいちょーさんは、そこまで気にしてなさそーだぜぇ？」
「フーゴ中尉！　言っておくが、わたしが先任だ！　軍隊ではわたしが上官として扱われる！　なれなれしい口調は……」
「へーへー。りょーかい」
「貴官、わかってないだろう!?」

　頭が固そうなジェナ中尉に、あからさまに不良士官なフーゴ中尉、そのやり取りにアレクシア大尉が苦笑する。もっとも今日はバケツ型ヘルムを被っているため、表情は分からないのだが。ちなみにダライアスとララは、持って来た書類に視線を落として何やら話し合っていた。
　アレクシア大尉が語る。

「ジェナ中尉、かまわん。フーゴ中尉は技量は高いし、少なくともあからさまな命令違反はせん。前の部隊では、たまに命令の拡大解釈はあるらしいがな」
「は、はぁ……」
「んで、俺たちは何で機体なしで演習場に？　まさか歩兵の訓練でもするっすか？　ま、撃墜されたらどうしても生身戦闘になりますからねぇ」

「まあちょっと待て。今、ダライアス師が説明してくださる」

その言葉に、ダライアスが書類から顔を上げる。

「ふむ……。二人とも、いい面構えだな。」

「はっ！　光栄に存じます！」

「そいつはどうも、技術中佐殿」

対照的な返事の二人に、ダライアスはニヤリと笑いかけた。

「貴官らに来てもらったのは、他でもない。余人には任せられない任務を与えるためだ」

そしてその言葉と共に、地響きが沸き起こる。明らかに複数機の機装兵（きそうへい）が歩いているために起きた物だ。そして演習場の壁の向こうから、門をくぐって三機の特注品と見える機装兵（きそうへい）が姿を現す。一機は紅（くれない）、一機は緑、一機は蒼に塗装されていた。

ジェナ中尉とフーゴ中尉は、目を見張る。

「こ、これは！」

「へぇ……。ピッカピカじゃないッスか。新型……。こいつの試験が、任務ですかい？」

「それもある。だが本質は試験だけではない。こいつらの『実戦運用』までもが、貴官らの任務には含まれる」

「!!　そ、それは……」

「ほおぉ……」

ダライアスは、ララに顔を向ける。

「ララ、周囲に人は？」

「いません。盗聴の可能性は無いと思われます」

「よろしい……。貴官ら、これから話す事は都市同盟軍の極秘事項だ。もしこの秘密をばらそうとしたなら……。わたしたちは貴官らを殺してでも、秘密の漏洩を阻止する」
「!!」

一瞬目を見開くジェナ中尉とフーゴ中尉であった。だが二人とも、すぐ落ち着きを取り戻す。

「了解いたしました！」
「上等……。俺も了解ですぜ、親分……ダライアス師」
「うむ。では……」

そしてダライアスは、三機の機装兵に手を振って合図を送る。すると三機が駐機姿勢になり、その頭部が展開、中から年端も行かない少女がそれぞれ出て来る。当然の事ながら、ルージー、ジェリー、ブリジットであった。フーゴ中尉が呟く。

「ありゃあん？　ありゃ、こないだ宴会のときに見たお嬢ちゃんたちだわな。けど、あの機装兵、頭部が操縦槽？　あれじゃあ、俺やジェナたんの体格じゃあ、乗れないじゃん」
「たん言うな」
「大丈夫だ。あの三機は二人乗りでな。頭のは操縦補助の副操手席だ。お前ら用の操縦槽は、一般機同様に胴体内にある。
……そして、あの三人の副操手だが。彼女らは、人類では無い。ルシ（LCE）と呼ばれる、旧人類が創造した人造人間だ。その本当の役割は、旧人類が幻装兵（LEV）に対抗して造り上げた超兵器（LEV）の副操縦士として、超兵器の機体制御を司る事だ」

ダライアスの言葉に、ジェナ中尉とフーゴ中尉は唖然とした顔つきになり、次に目を見開き、ぎょっとした風情を漂わせる。ダライアスは続けた。

「大丈夫だ。彼女らは我々新人類の味方だ。……最初に言っておくぞ？　貴官ら、あの娘たちを……わたしの大事な義娘（むすめ）を妙な色眼鏡で見て見ろ。わたしに可能なありとあらゆる手段を使って、地獄落ちにしてやるからな」

それは軽い口調で言われた言葉だった。だがしかし、その言葉に含まれていた異様な迫力に、中尉二人は引き攣った顔でぶんぶんと首を上下に振る。

「そうか、わかってくれたなら、問題は無い。……あの三機の機装兵（きそうへい）は、彼女たちの力が無ければ実力を発揮できなくてな。彼女たちと相性の良い操手（そうしゅ）が、是が非でも必要だったのだよ。そして彼女たちに選ばれたのが、アレクシア大尉と貴官ら二名だったと言うわけだ。

で、紅い機体『ローター・ブリッツ』がアレクシア大尉と赤髪のルージーの機体だ。まず最初に大尉とルージーに、『ローター・ブリッツ』の力を見せてもらう。大尉！」

「はっ！　了解です！」

アレクシア大尉は『ローター・ブリッツ』に走り寄ると、ルージーが解放した操縦槽（そうじゅうそう）の扉から勢いよく飛び込む。がしゃん、と重装鎧の塊が着座する音が聞こえた。

そして『ローター・ブリッツ』が胸板の装甲と一体化している扉を閉じて、立ち上がる。紅い機体は、背中に背負った片手半剣（バスタード・ソード）を抜き放った。その刃から妖気が滲み出しているのが、傍目でも判る。

そして幾つかの剣の型を披露した『ローター・ブリッツ』は、動きを止めた。それに続き、アレクシア大尉の声が響く。

『ダライアス師！　では行きます！』

「ああ、頼んだ！　あちらに立っている標的（カカシ）の前まで五百mダッシュ、そしてその勢いのまま標的（カカシ）を叩き斬ってくれ！」

『了解！』
「……いや、その程度だったらどんな機装兵（きそうへい）でも出来るんじゃね？」
「しっ！　黙ってみてなさい。何か考えがあるんでしょう。」

フーゴ中尉とジェナ中尉の言葉を他所（よそ）に、『ローター・ブリッツ』は今にも走り出しそうな姿勢になる。と、その姿が消滅した。ジェナ中尉とフーゴ中尉は、一瞬何が起きたのかわからなかった様だ。
そしてドカンと衝撃波の音が聞こえる。標的（カカシ）になっている何かの残骸は、次の瞬間衝撃波の余波により、綺麗さっぱり吹き飛んだ。更に次の瞬間、標的（カカシ）の上半分が見事に切り取られ、はるか上空から大地に落着する。
フーゴ中尉が呟く。

「なんだ、今のはよ……」
「加速装置だ」
「かそくそう……ち？」
「そうだ。頭部に同乗したルシ（LCE）が制御を担当する事で、今やった通り目に見えないほどの速度で戦闘が可能になる。あの三機の機装兵（きそうへい）は、全て加速装置の実験機でもある。各々ごとに若干の違いがある様、造ってはあるがな」

フーゴ中尉の目が、爛々（らんらん）と輝きだす。いや、ジェナ中尉も興奮を抑えきれない様だ。そしてフーゴ中尉が叫ぶ様に言った。

「す……げぇ。凄ぇ!!　凄え、凄えよ親分！　俺がアレに、って言うかアレのどれかに乗れるってのか!?　凄えじゃん！　いいじゃん!!　凄えじゃんかよ!!」
「フーゴ中尉！　なんて口の利き方!?　け、けれど確かにこの加速装置があれば……。もし量産されていれば、もしバフォメットとの戦いに間に合っていれば、もしあの時にこの力がわたしにあったのなら……」

「済まんがジェナ中尉。今現在の技術ではルシ(LCE)の助けなしに加速装置を制御する事はできんのだ。そして残念ながら、ルシ(LCE)は数少ない。更に連続稼働時間にも限界がある。そこまで便利な物では無いのだ」
「そ、そうですか……。そう、ですよね」

消沈するジェナ中尉だったが、しかしダライアスは言葉を続ける。

「だがね、悲観することは無い。技術は日々、進歩している。いつかこれが同盟機兵(きへい)の標準装備となる日が来るかも知れん。ルシ(LCE)の補助無くしても稼働できる加速装置の研究は、今も続いている。
そして安心する事もまた、できない。バフォメットとの戦いはかろうじて我々の勝利に終わった。だがその被害は深刻だ。そしてバフォメット以外の脅威は、この世界にいくらでも転がっているのだ」
「!!」
「その時のために、貴官らの力を貸してくれ。今はまだ量産不可能な装置に過ぎんが、少しでも多く加速装置のデータを取り、研究の糧にするんだ。まだ目標とする量産型には、遠いがな。
そして同時にこの三機の加速装置実験機は、わたしたちが振るえる最強クラスの剣でもある。三機で総がかりすれば、最強クラスはともかくとして中位程度の幻装兵(げんそうへい)になら立ち向かえるかも知れん。いやおそらく単機であっても、加速装置を駆使すれば『兵の幻装兵(げんそうへい)』あたりなら、あるいは……」

ダライアスは残った二機の加速装置実験機に向かい、手を振ってその頭部に乗っている少女たちを呼び寄せる。彼女たちは数mの高さをものともせずに、ひょいと言う感じで飛び降り、ぱたぱたと駆け寄って来た。

「ご苦労ジェリー、ブリジット。ジェナ中尉、この緑の髪をした方が、緑の機体『グルウン・ブリッツ』を担当しているジェリー・アームストロング士官候補生だ。ジェリー、こちらがジェナ・スホーンデルヴ

ルト中尉だ。挨拶を」
「はい、お義父さま。スホーンデルヴルト中尉、自分がジェリー・アームストロング士官候補生です。どうかよろしければ、わたしの『主』になって下さい」
「あ、主!?」

驚くジェナ中尉に、ララが説明をする。

「ルシと言うものは、基本的に旧人類の超兵器の制御装置代わりとして、パイロット……機兵で言う操手ですが、自分と相性の良いパイロットを『主』と定めて従う様に、精神構造の奥底に刻み込まれています。パイロットとルシは、何か特別な事情が無い限り一対一対応なのです。
どうかこの娘の『主』になってやってください。そしてその力を、存分に引き出し、使ってあげてください。それがルシとして生まれたこの娘の望み、この娘の幸せでもあるのです」
「!! ……了解です、エルナンド中尉。ジェリー・アームストロング士官候補生、わたしでは至らぬ事も多いと思うが、それでも良いならば……。よろしく、頼む」
「はい。こちらこそ至らぬ身ではありますが」

ジェナ中尉にジェリーが敬礼を送る。ジェナ中尉もまた、答礼を返す。こうして一組のペアが成立した。そしてダライアスが、今度はフーゴ中尉へ言葉を発する。

「こちらの蒼い髪の娘が、蒼い機体『ブラウ・ブリッツ』の制御担当、ブリジット・アームストロング士官候補生だ。ブリジット、こちらのフーゴ・グラッツラ・ディンフィンブルム中尉に挨拶なさい。上手く行ったなら、長い……本当に長い付き合いになるのだから」
「はい、お義父さま。ディンフィンブルム中尉、自分はブリジット・アームストロング士官候補生と申します。もしよろしければ、わたし

の『主』になって下さいませんか？」
「面白いじゃねえか。士官候補生って事は、士官学校だな？　さっさと卒業してきやがれ。待っててやっからよ」

フーゴ中尉の言葉に、だがダライアスが割り込みを入れた。

「ああ、その件だがね。参謀本部と話がついている。ルージー、ジェリー、ブリジットの3人はこちらでの任務が発生した際は、士官学校から特別休暇が与えられる事になっている。学校に戻った際には、特別試験とレポートが待っているがね」
「ほう！　わかった、親分！　よう、ブリジットって言ったな！　こき使ってやっから、覚悟しとけよ！」
「はい、了解です。泥船に乗ったつもりでいてください」
「泥船だと沈むじゃねえか!!　ククク」

アレクシア大尉の『ローター・ブリッツ』が、こちらへ戻って来た。操縦槽の扉と頭部装甲を展開しており、ルージーとアレクシア大尉の姿が見える。ルージーはこちらの様子を見ようと、身を乗り出していた。
ダライアスはそちらに小さく手を振ると、中尉二人に向かい声を掛ける。

「どうだね？　早速あの二機に乗ってみるか？」
「は！　お願いいたします！」
「おう！　喜んで！　さっきからアレに乗ってみたくて、うずうずしてたんだ！」
「了解だ。では行きたまえ。ただし今回は慣らし運転だと言うのを忘れるなよ？」
「「「了解！」」」

中尉二名とジェリー、ブリジットは『グルウン・ブリッツ』と『ブ

ラウ・ブリッツ』の方に急ぎ駆け出した。それを眺めつつ、柔らかく微笑むダライアスとララであった。

Ｆｉｌｅ１５「農業指導員物語」

ポール・ガターリッジは自由都市同盟農業水産省の下っ端役人である。彼はかつて、苦学生であった。幼い頃は地方の寒村に住む貧農、というか小作農の更に五男であり、上には姉も含めて八人の兄姉がいた。いや、下にも四人ばかり弟妹がいたのだが。

彼が一念発起して勉学を志したのは、九歳の頃であった。彼は貧しくなおかつ彼を無料の労働力としか見ない家庭を捨てて家出、近隣の物流の要所であったデイリーフの街へとやって来る。そこで彼は廃品回収で日銭を稼ぎつつ、幸運にも巡り合えた師――負傷除隊したかつて軍人だったらしい老人――に基礎的な勉強を教わった。十四歳の頃に師が亡くなり、彼は爪に火を点す様な思いで貯めた金で、中等学校普通科の特別枠を受験する。

幸運なのか奇跡なのか、彼は入試を突破。他人の二年遅れで中等学校の普通科に入学し、必死で勉強とアルバイトを積み重ね、これも他人の二年遅れで普通科を卒業した。その上で公務員の募集に応募し、見事試験に合格。農業水産省に配属されて五年。二十二歳になった彼は今、従機に乗ってヘアリージャッグの近縁種と見られる小型魔獣に向けて、機載の魔導砲を必死になって乱射していた。

ちなみに彼が従機の操縦を習ったのは農業水産省に入省後、従機レベルではあっても操手の能力を持っていれば給料が上がり、操手の技能を教える私塾に払う金を考えても、十二年と半年後ぐらいには収支がプラスに転じる、と言われたからである。そして真に受けた彼は私塾に通い、従機の操縦を身に着けた。

おそらく収支は十二年と半年後にはプラスに転じるのであろう。もしかしたら、危険手当なども含めればもう少し早まるかも知れない。操手としての能力を身に着けてしまった彼は、こうやって畑の害獣駆除などに便利に使われる事になったのである。手当は出るが、さりとて万一途中で死んでしまえば大損であった。

（害獣ってレベルじゃないよなあ……。ま、バフォメット事変のとき

よりかマシだ。あのときは後方とは言え、従機で物資運搬とかやらされたもんな。
あんときゃ酷かった。土中から突然魔獣が奇襲してくるんだもんなあ。味方の機装兵、前線で機体を失った操手が乗り換え用の機体を受領に来てなかったら……。その『アーミィ・アント』とか言うのが前線に戻る行きがけの駄賃に倒してくれなかったら、死んでたね。
そういや、あのアレクシアとか言う大尉さん、手柄立てたんだから出世とかしたかな？　してなかったら、都市同盟軍の昇進規定を疑うね）

なんとか魔獣を全て倒し、彼は自分が所属する農業指導課の備品である従機『ミメラ・スプレンデンス』の機体を休ませた。そして機体を降りて魔獣の死体を解体、魔石を取り出す。

（あー、小型の雑魚魔獣だけあって、どれもたいした等級じゃないな。今の戦闘で使った経費と、とんとんってところかな）

彼は魔石を集め終ると、『ミメラ』に戻って背後の農村へと機体を歩かせ始めた。

＊

「……流石にそのカタログに印刷されておる機械を買うのは、無理じゃのう」
「どうしても無理でしょうか、村長？　幾ばくか、国から補助も出ますよ？」
「補助が出たところで、とうてい足りぬよガターリッジ殿。村で一番余裕があるわしが買うて、皆に貸す事も考えたのじゃがのう。昨年末から今年の年初めに至るまでの、あのバフォメットとそれに操られる魔獣どもの襲撃で、村の畑は大損害じゃって。わしら村人が避難しておる間に、畑の小麦は全滅じゃよ」

「……」

村長の言葉に、ポールは唇を噛む。今彼がこの村長に販売を仲介したのは、畜獣に牽かせる犂の代わりに、畑を耕す耕運機である。この村ではバフォメット事変による損害で畜獣の全てを失い、今畑は鋤や鍬で手作業で畑を耕している。幼い子供ですらも、その労働力の一助となっているのだ。

本来ここの村では幼い子供たちは近隣にある街まで通い、そこの寺子屋で教育を受けられていた。この村は、本当であればかなり恵まれていたはずの村だったのだ。だがそんな村でも、このありさまだ。ポールは瞼を閉じる。脳裏には彼が幼い頃にやっていた、旧暦……旧人類が西暦と呼んでいた時代であれば、虐待と言われていたほどの重労働の思い出が浮かんだ。

「……この耕運機『耕す君Ｍｋ―Ⅶ』はこの村を始め、そんな村々を助けるために開発されたのですがね」

「とは言ってものう……」

「いえ、わかります。わかってはいるんです……」

「じゃが、この機械……。Ｍｋ―ＩからＭｋ―Ⅵまでは、どうなったのかの」

「それは、どうなんでしょうね？」

ポールは村長が重苦しくなった雰囲気から、話を逸らすために言ってくれた冗談に乗る。しかし彼の心は、この現実から離れられない。

（駄目だ……。都市同盟軍の技師、冒険者組合に出向中の天才技師、ダライアス師とか言う人物にまで協力を依頼してまで安価に造った機械なのに……。その安価な機械ですらも買う事はできないなんて……。あの耕運機が使えれば、子供らを勉強させる事ができるってのに）

顔ではほのかな苦笑を浮かべながら、ポールの心は荒れ狂っていた。

＊

村長(むらおさ)の家を辞去し、従機(じゅうき)『ミメラ・スプレンデンス』に乗り込んだポールを、村の人々が取り囲む。

「農業指導員のダンナ！　今日は害獣駆除、ご苦労だったね！」
「あいつらのせいで、せっかく直した畑が荒らされてさあ……」
「うちの旦那も、大怪我してねえ。子供らを寺子屋にやりたいんだけど、そうもいかなくなっちまったよ」

ポールは悔しい思いを必死で噛み殺し、明るい笑顔で言う。

「そいつは大変だね。なんとか子供らに勉強させてやれる様に、わたしも力を尽くすよ。実は秘密にしておいて驚かそうかと思ってたんだがね、収量がやや多い上に病害虫に強い、新しい小麦の種が手に入るんだよ。秋の種蒔きまでには持ってくるさ」
「うおおぉぉ!!　そいつぁ凄えぜ!!」
「じゃ、畑仕事頑張って、そいつを買うお金を貯めないと！」
「さ、従機(じゅうき)を動かすぞ！　離れてくれるかい？」

村人が離れ、ポールは『ミメラ』を起動した。『ミメラ』が騒音を立てつつ歩き出す。村人たちは、総出で手を振る。ポールも機体に、大きく手を振らせた。

ポールは決意を新たにする。

（あの耕運機(こううんき)の普及は、絶対に必要だ。必要なんだ。できれば草刈り機も。他の機械も。だが、それを買う資金が、村々には無い。支援が必要だ。今の場当たり的な補助金じゃない、きちんとした支援制度が

絶対に……。絶対に必要なんだ。
子供たちのために……。子供たちに、勉学の機会を与えるためにも！）

ポールはデイリーフの街に帰還したら、暇を見つけて上申書を書こう、と決意していた。彼が徹底的に考え抜いた農村支援制度が自由都市同盟（じゆうとしどうめい）の上層部に認められ、実施されるのは、しばし後の事であった。そして彼自身はその上申書により抜擢を受け、とある極秘の食糧増産計画に配される事になるのだ。
しかし今の彼は、その様な事は夢にも思わない。彼の頭には、かつての彼と同じ境遇の子供たちを救う事しか無かったのである。

Ｆｉｌｅ１６「空を駆ける」

『緊急事態発生。緊急事態発生。敵性陣営による鹵獲を確認。非常用脱出プログラム起動します』

『うわ!? こ、こいつ勝手に！』

『可変機構ロック、一時的に解除します。緊急用補助動力全開。変形開始』

ギゴガゴゴゴゴゴッ!! ドガン!!

軋む様な音がして、直後爆発音にも似た破砕音が響く。都市同盟軍研究所より冒険者組合兵器開発局へ出向しているダライアス・アームストロング技術中佐が精魂込めて開発した、速乾性魔導セメントがひび割れてはじけ飛んだ。いや、なんでも『魔導』ってつければいいもんじゃないと思うのだが。一応は魔導理論を応用した薬品を混ぜ込んで、急速に硬化するという代物ではある。あくまで一応。

そして通称「実験部隊」――ダライアスが管理し、彼の護衛であるアレクシア・アーレルスマイヤー都市同盟軍大尉が指揮する機兵中隊――の指揮小隊が見守る中、彼女らがさんざん苦労してセメント入り落とし穴の罠にかけた、帝国軍の自由都市同盟侵攻部隊擁する強力な幻装兵は、なんとも言い様の無い妙な形に変形する。『ローター・ブリッツ』を駆る指揮小隊指揮官のアレクシア大尉は、唖然として言った。

『……へ、変形した？』

次の瞬間、再び爆発音じみた轟音が轟く。

ドゴオオオォォォォン!!

『うわあああああああぁぁぁぁぁぁぁ!!!』

敵操手(そうしゅ)の絶叫が響き渡った。

『……飛んだ』

『なんてこったい、逃げられちまったい』

『グルウン・ブリッツ』のジェナ・スホーンデルヴルト中尉と『ブラウ・ブリッツ』のフーゴ・グラッツラ・ディンフィンブルム中尉が、呆然と言う。妙な形に変形した幻装兵(げんそうへい)は、まるでロケット花火の様に後から炎を噴射して、部品をばら撒きつつ放物線を描いて大空へと飛翔した。そう、『放物線』を描いて。

『あ、落ちた』

『あっちは帝国軍の陣の方ですが……。これで壊れてくれていると、嬉しいのですが』

『やれやれ、まいったねえ。駄目だと思うぜ?ジェナさんよう。幻装兵(げんそうへい)の機体耐久力なら、少なくとも修復可能なレベルじゃねえかな』

『……已むを得ん。とりあえず、奴がばら撒いた部品を拾って帰還する。ルージー、データ収集は完了しているか?』

『はい。ぎりぎりでしたが』

『そうか……。不幸中の幸いだな。ジェナ中尉は分析装置を回収してくれ。わたしとフーゴ中尉で部品を拾う』

傷だらけになった『ローター・ブリッツ』と、同じく傷だらけの『ブラウ・ブリッツ』が、敵幻装兵(げんそうへい)の落として行った部品を拾うべく動き出した。残された、これまた傷だらけの『グルウン・ブリッツ』は、吹き飛んだ落とし穴の周辺に設置されていた謎の装置を回収し始める。各々の機体の背中が煤けているのは、おそらく気のせいであろう。

＊

ハウゼンシュトリヒ攻防戦が終了して一週間後、中央都市アマルーナの冒険者組合にあるダライアスの執務室に帰還してきたアレクシア大尉たちは、飛んで逃げた敵幻装兵についての報告を行っていた。ダライアスは発掘品であるノートパソコンで、先だって提出されていた報告書や、例の落とし穴の周囲に仕掛けられていた分析装置のデータを見ながら、口頭での報告を確認している。

「……ふむ、なるほどな。いや、よくやってくれた。鹵獲はできなかったが、このデータだけでも充分な価値はある」

「そ、そうですか!?ほっといたしました」

「ああ。よくやってくれた諸君。ルージー、ジェリー、ブリジットも良く頑張ったな」

「「ありがとうございます、お義父さま」」

ダライアスはノートパソコンのキーを叩く。画面には、あの敵幻装兵を分析し、解析した結果が表示された。あの分析装置は、実は厳密に言うならばダライアスの発明品ではない。旧人類の古代遺跡から発掘された科学技術の分析装置を、魔導技術で稼働する様に造り変えた物だ。

「ふむ。これは勉強になるな……。こいつだな、この胸元、操縦槽の上にある装置。これが敵幻装兵の加速装置だ。

ああ、やっぱりそうだ。敵幻装兵が変形して飛んで逃げる際に部品をばら撒いたと聞いて、もしやと思ったのだが。アレクシア大尉たちが拾って来た部品を見て疑念は推測に変わり、今確証に変わったよ。この幻装兵、本来この機体の物ではないパーツを使って修復されている」

「「「「は？」」」」

「それは……大丈夫なのですか？」

彼の傍らに控えていたララが、小首をかしげて疑問を口に上らせる。彼は苦笑して答えた。

「大丈夫なわけは無い。大方、機装兵形態でのみ満足に動く様に修復したのだろうな。『兵の幻装兵シュナイダー』あたりのパーツを使ってな。だがそれではこの幻装兵のもう1つの形態である飛行形態に対応できているはずが無いのだ。だからこそ、パーツをばら撒きながら飛んだんだろう。墜ちるのも、当然と言う事だな」

「「「「「「あ」」」」」」

「もっとも、次に修復するときはその点も考慮に入れて直してくるだろうな。帝国の技師も、阿呆ではない。

……これは、造ってみなければ感覚が掴めんな」

ダライアスのその言葉に、他の一同は今度こそ驚愕する。

「「「「「「ええっ!?」」」」」」

「だ、ダライアス師！造ると言っても、あれは幻装兵ですが!?」

「技術中佐、以前わたしとジェリーの『グルウン・ブリッツ』や他二機の加速装置実験機についてお教えいただいた際、たしかあの三機が今の時点での技術中佐の造れる最も高レベルな機体であると……」

「親分、あいつにゃ俺たち三機がかりでなんとか互角だったんだぜぇ!?そいつを造れるってか!?」

「我が主、さすがに今の段階では工房の設備的にも不可能かと思われますが……」

「ああ、いや。これをそのまま造る事は、わたしでも流石に不可能だ。造れるのは劣化コピーだな。あちらこちらに、構造こそ分かったが何のためにあるのか分からないパーツもあるし、な。ここら辺はブラックボックスとして、デッドコピーするしかないだろう」

一同は納得して静まる。しかしダライアスは、更に先の事まで考えていた。

（……やはりあの計画、海洋温度差発電所の建設と、それをエネルギー源にした工業施設群の建設計画、それを実現させねばならないな。今回の帝国の侵攻は、本気ではなかっただろう。皇帝が本気になっていたら、冒険者義勇軍に加えて若干の志願者がいたところで、同盟は詰んでいた。

本気で動いたのは貴族……ラズール公爵家と、それに追随する有象無象だけだ。庶務第三課の知り合いが教えてくれた。帝国が……いや、聖王国もだ。両国が本気で同盟を潰そうと考えない内に、国力を整えなければ）

庶務第三課とは冒険者組合の暗部組織で、諜報や破壊工作を行う目的の部署である。庶務第三課というネーミングは、単に偽装や隠蔽、韜晦のなせる業であった。なお庶務第一課と第二課は、普通の庶務である。

（だが国力を整え、蓄えるだけでは意味が無い。その増えた国力を使って、矛と盾を揃えねばならない。

『歩』の操手はなんとか今回のハウゼンシュトリヒの攻防で、『と金』になったレベルの物がかなり確保できた。その『と金』は機体を乗り換えさせて、『桂馬』や『銀将』『金将』クラスの機装兵を宛がってやれば更に良い。そして空いた多数の『歩』に、新たに増産した多数の『歩』を加えて再編制すれば、とりあえずの形は整う。

だが……。国を……同盟を護るには、やはりそれだけでは無理、いや違うな。それだけでは効率が悪い、と言うべきか。『飛車』や『角行』級の機体も、必要だ。そのためにわたしも学び、研究し、技術と知識を鍛えねばならん）

ダライアスはノートパソコンから目を離し、立ち上がる。そして彼はララとアレクシア大尉に向かい、指示を発した。

「ララ、お前のお義父上に……エリベルト師に連絡を取ってくれ。内密の相談があるので、極秘に会談したい、と。悪いが直接、都市同盟軍研究所まで出向いてくれ。万が一の盗聴が怖い」
「了解しました、技術中佐」
「アレクシア大尉、君の中隊の第二、第三小隊は今それぞれ、『ブロッキアーラⅡ』と『ドランゲン・スタイン』の運用試験をしていたな？
それは今再編のために訓練中の、冒険者組合機兵隊の訓練中隊に実機訓練がてらやらせるから、量産開始したばかりの中位機装兵である、『ホルニッセ』を試験する様に通達してくれ」
「了解です、ダライアス師！」
「二人とも、頼んだぞ」

そしてその場の全員は解散し、各々の任務に散って行く。ダライアスは再び椅子に腰掛けると、ノートパソコンの画面に見入る。その頭脳は、高速回転していた。

（今まできちんとまともに調査できた幻装兵は、『兵の幻装兵シュナイダー』かその近縁種の機体、そして『ヴェイルー・ヌ・ザアンティス』ぐらいだ。いずれもが、能力を向上させるのに下手な手段は採らず、まっとうな真正面からの手段をもって高い性能を実現している。故に参考にならないとは言わないが、それらに使われている技術、手法を我々の機装兵に応用するには、我々の技術が相応に向上しなければ不可能だ。
だが今回データを取れた敵の幻装兵は、基本性能も高いは高いが、加速装置や変形しての飛行機能、更には未だ知られていない様々な『裏技』が満載だ。その『裏技』のうちには、幾つか今の技術でも量産機で実現可能な物もある。その大半が、科学技術による物であるためか、それとも帝国貴族どもの秘匿機体であるが故か、帝国機には反映されていないのは幸いだな。
とりあえずは、科学技術製の装備をなんとか魔導技術に置き換える事を考えねばな。それと現時点で最大の収穫は、加速装置周りの最新

技術？　いや幻装兵だから古代技術か。それが手に入った事だ。これで更に『ローター・ブリッツ』『グルウン・ブリッツ』『ブラウ・ブリッツ』の加速装置も改良できるし、今現在難航している量産型についても進展がありそうだ）

彼はノートパソコン上で自作の機兵ＣＡＤソフトを立ち上げ、幻装兵の劣化コピー機体の設計を始める。

「……そう言えば、兵器開発局局長が言っていたな。ホリフィールド武器工房が、フレームの設計段階から自己開発して、新型機を造る、と。その計画が、そろそろ動き出す頃か？フレーム設計はアナハイム・プロダクションの秘匿電子計算機が無ければ無理だと思うのだがな。……いや、ホリフィールドで電子計算機でも発掘したか？むむむ……。

あそこはある意味「身内」だからな。この幻装兵複製機用のフレーム、安く設計してもらえんかな。変形するから、『ローター・ブリッツ』とかの様に他機種フレームを流用と言うわけにもいかん。代価として、何かしら技術供与する事で……。なんなら名前を出さないと言う事で、ホリフィールドの新型機開発に参画してもいい。ふむ……」

独り言を呟きつつ、ダライアスはキーを叩く。彼の手によって、旧大戦期の失われた叡智への道標となり得る図面が、液晶ディスプレイの上に浮かび上がりつつある。彼は一心不乱に、設計に打ち込んだ。

＊

そして半年。聖華暦八三四年十月某日。あっさりと幻装兵の劣化コピー機である可変機装兵は完成した。いや、ダライアスが『海洋温度差発電所および完全電化工業都市群建設計画』で猛烈に忙しくなっていたためもあり、これでも完成は遅れた方なのだが。

機体を前に、フーゴ中尉が徐に言う。

「どことなく似てはいますがねぇ……。なーんか違いやせんか、ダライアスの親分？」
「まあ、完全再現はできんと言ってあったろう。機能的なものは、八割方再現できてるぞ？　流石に幻装兵のお家芸である魔導障壁は再現できなかった。いや、魔導障壁発生機構はデッドコピーして搭載されているんだがな……」
「それで何故、魔導障壁が発生しないのでしょう？」

問いを発したジェナ中尉に、ダライアスは苦笑しつつ答える。

「おそらくだが、幻装兵の魔導障壁発生機構には構造それ自体に、1つ1つ固有の認証コード……パスワードやシリアルＩＤの様な物が刻み込まれているのだろう。機体側のおそらく制御回路……。現在の機兵で、スフィアと呼ばれているものに相当する、幻装兵の制御回路が持つ認証コードと合致しなければ、おそらく起動しないのだ。
この複製機は、第七世代機兵として造られているからな。制御回路にはアーク・スフィア型の魔導制御回路が使われている。幻装兵は『兵の幻装兵シュナイダー』ですら高度な小型電子計算機を、八機神予備機と思われる超高級幻装兵である『ヴェイルー・ヌ・ザアンティス』では量子電脳とルシ（ＬＣＥ）の併用をしている程だ。現代のアーク・スフィアでは規格に合わん上に、認証用のコードも持っていないのだろうさ。
これに載せた魔導障壁発生機構は、なまじ厳密に正確にデッドコピーしたからなあ……。構造に刻み込まれている認証コードも、そのままコピーされたんだろうさ」
「お、おいジェナたん、理解できるか？」
「難しいが、なんとか……。量子電脳とか、わからん単語もあるが。と言うか、たん言うな。……って、アレクシア大尉!?　中隊長!?」
「うおおおぉぉぉ!?　やべぇ！　たいちょーが、頭から煙噴いてやがる!?」

しばし後、一同はとりあえず落ち着いた。復活したアレクシア大尉が声を上げる。

「死ぬかと思った……。それでダライアス師。本日はこの機体の試験を？」

「ああ、そう思って諸君らを呼んだのだが……。うっかりしていた。この機体は、最新型とは言え加速装置を積んでいる。制御にルシが必要なのだ」

「ああ、ルージー、ジェリー、ブリジットは士官学校でしたね。今日は任務扱いで呼ばなかったのでしょうか？」

「うむ、小さな任務でしょっちゅう呼び出していたら、いかにあの娘らが超人的な頭脳を持ってはいても、勉強に差し障りが出るからな」

「んじゃ、どうするんッスか？　親分」

フーゴ中尉の問いに、ダライアスは失笑する。

「已むを得ん、わたしが乗るさ。ララ、手伝いたまえ」

「了解です、技術中佐」

「ええっ!?　ララ中尉はルシ（LCE）だったのですか!?」

「ジェナたん、それぐらい気付けや。前にララ中尉、親分の事を『我が主（あるじ）』って呼んでたぞ」

「たん言うな。しかし八割方再現と言う事は、変形機能も？　これはまさか、飛ぶのでしょうか？」

痛い所を突かれたダライアスは、ジェナ中尉に肩を竦めて答えた。その表情には、苦いものがある。

「変形はする。だが飛ばん」

「「は？」」

「いや、機能的には飛べるとは思うのだがね。しかし空中での機動の制御ができん。それと航空管制に関しても駄目駄目だ。高高度まで

飛びあがったら、自分の位置を見失って迷子になること必定だな。まあ、そこまで行く前に、低高度でバランス崩して墜落するが。

飛行関連の機動管制プログラムが、機体の制御回路に入っておらんのだよ。ハードウェア情報は例の幻装兵を罠で捕まえて分析装置にかけたときに完全解析したが、ソフトウェア情報などはあの分析装置では読み取れるわけが無い。必然的に、飛行するための機体制御が、まったくもって不可能だ。

無論、何度も墜落して経験を積めば、低空飛行であれば操手の経験で機動制御できるかも知れんが……。先に操手が死ぬか再起不能になるだろうな。ルシ(LCE)の補助があってもだ」

唖然とした表情を狼顔に浮かべ、フーゴ中尉が問うた。

「……じゃ、変形して何するんでぇ、親分」

「浮揚走行する」

「「は?」」

「七〇〇年代に天才的な技術者かつ操手であったカトル・ビーダーフェルトの設計を元に、アイオライト・プロダクション社が開発した『オリジンジータ』……『ジータ』という第六世代機装兵は知っているだろう?あれの系列機は、エアボードに似た浮揚形態に変形し、高速かつ高効率で長距離移動を行う機能がある。それと似たような物だ。

地面効果……対地効果とも言うが、それを利用して揚力を得、地面すれすれをホバーを用いて高速移動する。飛行能力の代わりに、そう言った機能を『とりあえず』付けた」

エアボードとは、複数の風のルーンを組み合わせる事で浮揚し、高速で超低空を滑空できる、機兵の移動用補助装備だ。なお、このシステムを応用して帝国で製作されたのが、機装兵用の機動補助兵装である『グライデンパック』だ。また『グライデンパック』に発想の影響を受けたのではないかと推測されているのが、聖王国の魔装兵『ベアトリス』に搭載されている高機動ユニット『イムベル』である。

閑話休題（まあそれはともかくとして）、ダライアスとララは機体へと乗り込む。と、アレクシア大尉が今まで忘れていた事に気付き、大声で問いかける。

「ダライアス師!!　そういえばその機体の名称はなんと名付けたのでしょうか!?」

ゴウン、ゴウン、ゴウン……。

機械音を立てて動き出したその機体から、ダライアスの返答が帰って来る。その声は拡声器を通していたため、多少歪（ひず）んでいたが、はっきりと聞き取れた。

『この機体の名は……』

＊

聖華暦一〇四〇年、自由都市同盟（じゆうとしどうめい）の大空を、かつてダライアスが建造したあの可変機装兵（きそうへい）が飛翔していた。今現在この機体は、ルシ（LCE）の代わりにこの時代最新鋭の制御システムを搭載して動いている。ここで操手（そうしゅ）である少女に、地上にいるサポート用の、移動基地を兼ねた機装兵（きそうへい）運搬車両から通信が入った。多機能通信魔導器（ENIGMA）の発展タイプである魔導無線機から、少年を脱したばかりと思われる青年の声が聞こえる。

『よう！ご機嫌で飛んでるな！』

「兄さん。ほんとにこれ、二〇〇年以上前の機体なの？　凄い飛行性能よ？」

『ああ、ほんとに大昔の機体だ。ご先祖様は天才だったらしいからな』

そのご先祖様は、自分の知識や技術は努力で磨き上げた物だと思っているため、天才だとか言われると嫌がるのだが。

「でもさ……。そのご先祖様でも、この機体を飛行させることはできなかったんだよね」
『ハードウェアは完璧だったんだがな。機動制御や航空管制のソフトウェアが、当時は基礎すらも無かったらしい。いくら天才でも、零から一を生み出すのは難しかったって事だな』
「悔しかっただろうな……。完璧な機体を造り上げたって言うのにさ」
『だろうな……』

操縦槽(そうじゅうそう)に、しんみりとした空気が満ちる。いや、ご先祖様は単に習作と技術習得のため、当時敵機として出て来た幻装兵(げんそうへい)を劣化コピーして造ってみた、ただそれだけなのだが。

『でもよ。子孫の俺たちがこうやって、晴れてこの機体を飛ばす事ができたんだ』
「そうよね。これを作ったご先祖様、きっと草葉の陰で喜んでくれてるわよね。……じゃ、もう少しスピードアップいくわよ!」
『おう!けどあんま無理すんなよ!』

そしてこの飛行形態の機装兵(きそうへい)、『ヒンメルズ・フォイア』は天空を一気に駆け上って行った。

Ｆｉｌｅ１７「巨人の鎧」

その日、冒険者組合の兵器開発局に出向中の、自由都市同盟は都市同盟軍技術中佐であるダライアス・アームストロングは、苦渋の思いで自らの敗北を認めざるを得なかった。聖華暦八三四年十二月も末のこの日、彼はついに機兵用加速装置の量産化を断念したのである。

「……だめだッ!! く、残念だが……。残念だが現時点の同盟の、いや、わたしが知る限りの帝国や聖王国系技術はおろか、カナドのリュトフ族から学んだ技術をもってしても……。今現在の同盟で、加速装置の量産は不可能だ……!!」

「技術中佐……」

「ダライアス師……」

ララとアレクシア大尉は、ダライアスを慰めようとする。しかし、その言葉は途中で詰まってしまう。彼女たちはダライアスが、この研究にどれだけ多大な時間と労力をかけて来たのか、ずっとその傍らで見ていたのだ。彼の落胆の大きさが慮れる分、下手な慰めの言葉はかける事ができなかったのだ。

これまでアレクシア大尉と共に試験操手として、加速装置実験機を運用して来たジェナ中尉、フーゴ中尉もまた、無念そうな顔をしている。しかし一番無念であるのはダライアスである事も理解している二人は、自身の想いを口に出す事は無かった。

「……いや、この研究が完全な形で実を結ぶ事は無かったが。だが、それでも……。まったくの無駄であったわけではない。君たちが運用している三機の加速装置実験機は、充分に切り札として使える存在だ。更に、今はまだ無理でも……。今までの実験データは残るんだ。将来的には加速装置が量産化可能になるかもしれん。

……わたしが生きている間には、無理だろうがな」

ダライアスは、しかし肩を落として執務室を兼ねた研究室の椅子に、力なく座り込む。流石にこの件は、かなり来る物があった模様だ。彼は深い溜息を吐く。

と、そこでダライアスの懐の多機能通信魔導器（ENIGMA）が、呼び出し音を立てる。ダライアスは苦笑を漏らし、多機能通信魔導器（ENIGMA）のスイッチを入れた。

「はい、こちらダライア……」

『ダライアス師かね？　今、大丈夫かね？』

「局長ですか？」

通信の相手は、冒険者組合兵器開発局の局長であった。ダライアスは居住まいを正し、机上のメモ帳と鉛筆を手元に寄せる。

『ダライアス師。すまんが、急な来客だ』

「アポイントメントは無かったはずですが……」

『それが、冒険者組合の本部棟の前で座り込みをされてね……。ダライアス師に、たっての頼みがあるとの事で、どうにも動かんのだ。機兵（きへい）で引っ張っても、街灯の柱にしがみついて離れん。街灯を壊されるのも阿呆（あほ）らしい。済まないが、対応をお願いできないかね』

「……機兵（きへい）で引っ張っても、とは。相手は巨人か何かですか？」

その時ダライアスは、局長の言葉を何かしらの諧謔（かいぎゃく）だと受け取り、冗談に冗談で返したつもりだった。しかし局長は言う。

『よくわかったね。うん、巨人なんだ』

ダライアスは、ちょっとばかり頭痛がした。

＊

その巨人……『南』の氏族、かつての戦士長にして現在の族長相談役バラムの子、冒険者にして戦士ヴォランと名乗った彼は、今現在ダライアスの研究施設の一部である機兵工房で、床に設えられた機装兵用の台座に横たわっていた。普段はダライアス製作の機兵の類を整備なりなんなりしている作業員たちが、総出で彼に群がり、彼の身体のサイズを採寸している。

「う、むう……」
「ああ、動かないでくれたまえ。君の依頼を果たすために、採寸しているんだからな」
「し、しかし……。こそばゆい」

文句は言ったものの、巨人ヴォランは動きを止めた。それを眺めつつ、ダライアスは考えに沈む。

（さて、どうした物か。彼の依頼……。単に造るだけならば、そう難しくはない。だが、ただ造るだけでは芸が無さすぎるし、彼の本当に欲する物を造ったとは言えん。
そう……巨人である彼が『機装兵に勝つため』に、『バーニアの付いた』鎧が必要だと）

そうなのである。突然冒険者組合本部に押しかけて来た巨人ヴォランの依頼は、ダライアスに自身の鎧を造ってもらう事だったのだ。その目的は、機装兵に勝利する事。
かつて聖華暦五〇〇年以前の、自由都市同盟が生まれるより以前、アルカディア帝国とカーライル王朝・聖王国において造り出される機装兵には、バーニアの類はほとんど搭載されてはいなかった。
幻装兵を模した一部の機体に、機動性向上のため申し訳程度に搭載される事はあったが、その時点までの機装兵は地べたを這いずり回るだけの、接近すれば強いものの総合的には鈍重な陸戦兵器であったの

だ。

だが聖華暦六〇〇年代に至り、第五世代機兵と呼ばれる機体群が開発されるに至り、その常識は覆る。強力なバーニアを備えた機体は三次元的な機動を可能とし、かつて旧人類が運用していた空母に近い『機兵母艦』から、カタパルト発進なども可能になったのである。

バーニアによる機動力は機兵自体の戦闘能力をも大きく増進させた。単純な格闘戦能力、白兵戦能力だけであるならばそれ以前の機種と大差は無い。しかし三次元的機動による自由な位置取りや高速での接近、離脱は、それまでの機装兵では太刀打ちできない戦闘力を与えたのである。

（……そして巨人たち、か。巨人たちはかつての時代、機装兵に匹敵する戦力として、傭兵的に雇用されて重宝されていたとも聞く。実際、中古機兵の外装を打ち直して、鎧として身に纏って戦いに赴くらしいしな。

しかし機装兵にバーニアが搭載される様になってからは、その戦力価値は目減りする。白兵戦や格闘戦では機装兵と互角であっても、その機動力にはついて行けない。彼ら自身はその巨体と、魔力を持たないと言う種族特性によって、機装兵に限らず機兵の類は扱えんしな）

その様な理由により、巨人たちは聖華暦八〇〇年代において、非常に肩身が狭い思いをしているのだった。巨人は基本的に戦闘民族である。だがその本領であるはずの戦闘力と言う面で、技術の進歩に置いて行かれてしまった種族なのだ。

そしてこのヴォランと言う巨人は、それに我慢がならなかった。彼は必死に貯めた登録費用一千ゴルダで冒険者組合に冒険者登録し、魔獣退治などを主な仕事にして自己鍛錬に励んだ。巨人族の中でも素質に恵まれた方であった彼は、最新型機装兵とも白兵戦や格闘戦であれば戦えるほどの力量の戦士となる事ができた。

しかし先日、隊商の護衛仕事を請け負った際に、彼は野盗が擁していた機装兵に苦戦する。彼は敵機装兵のバーニアによる高機動力に、

追随する事が叶わなかったのだ。
味方機装兵との連携もあり、最終的には隊商を護り抜く事はできた。しかし彼は自身の機動力の無さ故に、基本的に隊商の直衛しかできず、敵の殲滅にはさほど寄与する事ができなかったのである。これは、彼の誇りを著しく傷つけた。
その後この巨人ヴォランは、都市同盟軍から冒険者組合へ出向中の凄腕技術士官であるダライアス・アームストロングに、鎧を造ってもらう事を思い付く。発想としては単純な物だ。彼が着用している鎧は、元々は機装兵の外装だった。それにバーニアノズルの取り付け跡が残っていたのが、発想の根幹であったのだ。
そして正しい手続きなど知らぬ脳筋である巨人ヴォランはあろうことか、冒険者組合本部の前で座り込みをして頼み込むと言う暴挙に出る。本人に悪意が無かった事が明白であったため、幸いにも取り次いでもらえたが、下手をしたらエラい事になるところであった。
ちなみにダライアスと面会が成った時には、彼は叩頭の礼をもって感謝の意を伝えた。頭突きをくらって道路の路面にヒビが入り、その補修作業の費用が彼に課されたのは言うまでも無い。

＊

座り込み事件から一週間が経過。ダライアスたちと巨人ヴォランは、冒険者組合の演習場へやって来ていた。試作品の巨人用鎧の、テストをするためである。『アーチャー・フィッシュⅡ』に乗ったダライアスが、巨人ヴォランに声をかけた。
『さて、今回はあくまでデータ収集のための試験だ。君が今着用しているのは、旧式の『シメオン』から引っ剥がして来た外装をベースに、バーニアとエーテル供給用の増槽を搭載しただけの、あくまで間に合わせの物だと言う事を忘れないでくれ』
「うむ、わかった。何から始めれば良い？」
『まず単純な跳躍の実験からだ。そこの白線がひいてある場所に立っ

て、向こうの赤い線がひいてある場所まで跳ぶつもりで、ジャンプしてくれ。理屈では、バーニアが自動で働いて、奥の黄色い線まで跳ぶはずだ』

「うむ」

のっし、のっし、と一見して機装兵『シメオン』に見える巨人ヴォランが、白線まで歩いて行く。その背中には、やや大きめに見える背嚢が装備されており、背嚢の両脇には円筒状の増槽が取りつけられていた。

巨人と言う種族は、もともと魔力と言う物を持っていない。そのため、鎧に装備されたバーニアを稼働させるためには、液体エーテルを詰め込んだ増槽を搭載するしか無いのである。

閑話休題、巨人ヴォランは赤い線めがけてジャンプする。と、下脚部や背嚢下面に装備されていたバーニアがジェットの奔流を噴き、巨人ヴォランの巨体が空中に浮きあがった。

「お、お、おおお!?」

『着地寸前に、小さくジャンプする様に足を動かすんだ！』

「わ、わかった!!」

巨人ヴォランは言われたとおりに小さく足を動かした。すると再度バーニアがジェットを噴き、落下速度を殺す。巨人ヴォランは、黄色い線がひかれた場所に、計算通りに着陸する。

「お、おおお！　は、ははははは!!　これはいい！」

『うむ。第一段階の実験は成功だな。続いて……あ、おい！』

「うおおおぉぉぉっ！」

巨人ヴォランはよほど嬉しかった様だ。彼は何度も何度も、跳ね飛んだりあるいは前方に高速ダッシュを繰り返す。ダライアスは慌てて制止する。

『待たんか!!　増槽には最低限の液体エーテルしか入ってない！　無茶をするな！』
「ぬお!?」
『言わんこっちゃない!!』

そして巨人ヴォランは全力での跳躍を行い、そこで増槽の液体エーテルが切れて全速力で地面に墜落した。ダライアスは、操縦槽（そうじゅうそう）の中で頭を抱える。

『……ララ、アレクシア大尉、ジェナ中尉、フーゴ中尉。あの馬鹿を回収してきてくれ』
『『『了解です……』』』

ララの乗った『ドランカード・タイガー』、アレクシア大尉駆る『ロイヤリタートＴｙｐｅⅣ』、ジェナ中尉とフーゴ中尉の『アーミィ・アント』二機が、巨人ヴォランの墜落地点へ歩き出した。彼女らは一様に、器用に機装兵（きそうへい）で肩を竦ませている。ダライアスは呟いた。

『……魔導制御回路（フィア）のプログラムを書き換えねばならんな。常に液体エーテル残量を監視させるようにして、減速用の液体エーテルが足りない様な跳躍はできん様にしておかないと……』

巨人ヴォランが墜落したときの土煙は、今だ現場に漂っている。ダライアスは、溜息を吐いた。

＊

更に一週間後、ダライアスたちは中央都市アマルーナの市門前で、巨人ヴォランを見送っていた。

「ダライアス師……。この度は、本当にお世話になった！　このバーニア付き鎧、本当に素晴らしい！　支払った金額以上だ！」
「いや、まあ。そう言ってもらえるのは、わたしも嬉しい。まあ、色々研究に詰まっていたからな。ある意味で、良い気晴らしになったよ」

巨人ヴォランの鎧は、見事に完成していた。防御力そのものも、着心地と言う点からも、普通に巨人たちが鎧として使っている機装兵の外装を打ち直した物より、飛躍的に向上している。
しかもジャンプの着地や危険回避などの自動制御は、旧世代の機装兵に使われている魔導制御回路『トワル・スフィア』にプログラムされており、安全度は飛躍的に高まっている。
また万が一の緊急時用として、増槽に詰め込まれた液体エーテルの他に、一瞬だけ爆発的な大出力を得る事ができる『マナ・カート』と言うカートリッジ式システムを3個搭載し、背嚢内部に装備された魔導スラスターと言う大出力推進装置を駆動するシステムも組み込まれている。あくまで緊急避難のためのシステムであるが、場合によってはこれを用いた突撃戦術なども可能である。
何にせよ様々な機構を組み込んだため、この鎧を着こんだ巨人ヴォランの姿は重機兵にも比肩する威容となっている。巨人ヴォランは、満足そうに頷くと右手の人差し指を伸ばして来た。ダライアスは笑みをこぼすと、自分も手を出して伸ばされた巨人ヴォランの指を握る。つまりは握手の代わりだ。

「ダライアス師、貴方の事は忘れない！　では！」
「うむ、ではな」

そして巨人ヴォランは、踵を返すと後ろを振り向かずに歩み去る。ダライアスは笑みを浮かべると、少し離れた場所で待っているララ、アレクシア大尉、ジェナ中尉、フーゴ中尉の所へと歩き出した。

＊

そして八三五年一月。ダライアスは、再び研究の日々に戻っていた。加速装置の量産実用化は断念せざるを得なかったが、自由都市同盟の、そして都市同盟軍の戦力強化は急がねばならない。

帝国と聖王国は、今現在の段階では各々それぞれの方向を向いている。しかし近い将来、その矛先が自由都市同盟に向かないとは言えないのだ。

「……この失敗作の新型魔力収縮筋だが、もしかしたら使えるかも知れんな。これまでの魔力収縮筋よりもはるかに高いパワーを引き出せるが、短時間で破裂、自壊してしまう……。だがそれを前提として、あくまで使い捨ての『外付け筋力増幅装置』として組み上げればどうだ？

それと、操縦難易度を下げるための仕組みとかがあれば、技量の低い操手であっても機体を取りまわせる。腕のいい操手の操縦データを、学習型の魔導制御回路で記録しておいて、それを操手データ移殖カートリッジの要領で他の機体に移殖する……。行けるかも知れんな」

「技術中佐、関連資料を纏めます」

「頼む、ララ。アレクシア大尉、済まんが試作品が出来上がるまで出番が無い。従来機の追試をしてくれるか？」

「は、了解です」

と、そこへ多機能通信魔導器（ENIGMA）の呼び出し音が鳴った。ダライアスは多機能通信魔導器のスイッチを入れる。

「はい、こちらダライア……」

『ダライアス師！　済まんが……！』

通信相手は、冒険者組合兵器開発局の局長であった。ダライアスはしばし彼と話すと、徐に椅子から立ち上がった。

＊

そしてここは、冒険者組合の本部棟前である。ダライアスはその場の状況、というか惨状を見て、大きく溜息を吐いた。

「貴殿がダライアス師か！　貴殿がヴォランに造ったあの鎧は、素晴らしい！」

「是非にわたしにも！」

「お、オラにも造ってほしいだ！」

「あたしにも造って！　おねがい！」

そこには十人近い、巨人たちが押しかけて来ていたのである。しかも彼ら彼女らは、わざわざ冒険者登録を済ませてから来ていたりする。熱意は分かる。熱意は分かるのだが……。

ダライアスは、頭を抱えた。

＊

結局のところ冒険者組合は、関係の深い超一流の中小企業である『ホーリーアイ武器工房』へと、巨人用バーニア鎧の製法をライセンスした。そして押し掛けて来た巨人たちは、『ホーリーアイ武器工房』でバーニア付きの鎧を造ってもらう事になったのだ。

この一連の出来事により巨人たちは、再び機兵（きへい）級の戦力としての立ち位置を手にする事になったのである。

Ｆｉｌｅ１９「試作実験機をテストしてみよう」

全高十メートルはある、巨大な人型の機械が大地を疾走する。魔力によって駆動する人型戦闘兵器である機兵……。その内でも大型の部類に入る、重機兵だ。

だがそれには、通常の機兵とは大きく異なる点がある。通常の機兵は、操縦者たる操手が搭乗する操縦席、操縦槽が胴体の中に収められているのだが……。

この重機兵『フェルジンバーグ』に限っては、それが当てはまらない。

「くっそ、なんだっての！　無理だろコレはよ!?　操縦槽を頭に持って来るってのは、無茶だろ！　高くて怖えよ！　そして揺れるっつの!!　Ｇがキツイっつの!!」

チェスターは身体にかかる強烈なＧに弱音を吐きつつも、重機兵特有の大パワーで幅広の長剣を振り回し、小型魔獣アレナイトテイルの群を切り払い、叩き潰す。そう、この重機兵の頭部は透明な強化ガラス製の天蓋になっており、そこから操手であるチェスターは、映像盤では無く自分の目で外部を見て、この機体を操縦しているのだ。

「そりゃ理屈はわかるぜ!?　自分の目で外見て操縦すりゃ、映像盤とか魔晶球とかいらんもんな!?　そして胴体から頭に操縦槽移せば、胴体に色々新型装置を搭載する余裕できるもんな!?
けどよ！　頭に座席押し込んだら、いくら重機兵でもよ！　狭いっつの!!」

チェスターの叫びと共に、アレナイトテイルの肉片が千切れ飛ぶ。彼は必死で操縦桿と足踏板を操作する。過剰なＧで操縦操作を誤らない様にするには、細心の努力が必要だった。

何故ここまで大きなGが、彼の身体にかかっているのか。それは操縦槽が頭部にあるという、ただそれだけの理由である。
本来人間の動きが、もっとも少なくなるのは胴体中央部である。それ故に、人間の形を模した機兵の操縦席、操縦槽は、本来は胴体中央という最も安定した場所に置かれているのだ。
しかしこの試作品の重機兵においては、そうではない。よりによって頭の天辺という非常に動きの激しい場所に、操縦槽が置かれているこの機体は、その操手に極めて大きな負担を与えていたのだ。
「ちくしょう……。まだ動きの鈍い重機兵で助かったぜ。……ぐうっ!!」
また一体のアレナイトテイルが吹き飛ぶ。しかしその際の機動で、激しいGがチェスターを襲う。
何故彼がこの様な機体に乗って、こんな荒野の真ん中で魔獣退治をしているのかと言うと、彼がそう言う依頼を受けたからだ。もう少し詳しく言うならば、冒険者であるチェスターはバフォメット事変での奮戦ぶりを買われ、冒険者組合より新型実験機の試験操手を任されたのである。
彼の脳裏に、開発者であるダライアス・アームストロング技師の語った言葉が蘇る。
『いや、わたしの下にはこういう実験的な機体をテストするための『実験部隊』も配されてはいるんだがね。彼らは皆、技量が高すぎるのだよ。彼らにもテストは頼むつもりだが、一般的な中堅操手の意見が、是非とも必要なんだ。試作実験機の参号機を、是非とも君に試験してもらいたい』
「いや、こいつぁ駄目じゃねえのか？　ダライアス師……。俺みてえな中堅どころにゃ、ちょっと扱いきれねえよ」
最後の魔獣を叩き斬ったチェスターは、大きく溜息を吐く。はるか

彼方から、蒸気トレーラーを改造した移動基地が、ゆっくりと近づいて来るのが見えた。

＊

まったく機体にはダメージを受けなかったが、精神的にはかなり疲弊したチェスターは、重機兵『フェルジンバーグ』を移動基地へと戻す。この移動基地は、蒸気トレーラーのコンテナ部分を大改造し、機兵の運用や整備ができる様に最低限の設備を詰め込んだ物だ。

移動基地では、蒸気トレーラーの運転手他を兼ねた整備員が待っていて、チェスターが頭部のキャノピーを開いて機体を降りると、一斉に機体に取りついて行く。当然ながらこの整備員たちは、冒険者組合のお抱えだ。チェスターはとりあえず、コンテナ内の片隅に設えてある椅子に深々と腰掛けると、大きく息を吐いた。

そこへ整備班長のブルドッグ顔の獣牙族中年男性が、ドリンクを差し出して来た。

「ようチェスター、ご苦労さん」

「おやっさんか、サンキュ。あくまで実験用だって話だが、この機体。でもこんな扱いづらいんじゃ、売り物にならねえぞ？」

そう言ってチェスターは、ドリンクをガブ飲みした。苦笑しつつ整備班長は、肩を竦める。

「まあ、そうだな。ダライアス師直属の『実験部隊』からも、そう言う意見は上がってきてるって話だ。ダライアス師も、これをそのまんま実用化しようとかは考えちゃいねえだろうさ。

けれどお前が実機をテストして上げられたデータに、ダライアス師は満足してるみたいだぞ？　流石に直接この機体を量産に回すつもりはなさそうだが、たとえば操縦槽を胴体じゃなくランドセルに移すとか、胴体中央を空けてそこに別の機器を組み付ける事を考えてる

とか言ってたな」
「だったら最初からそう言う機体造って欲しい気もするが」
「そう言うな。物事にゃ、試行錯誤ってのが付き物なんだ」

ちなみにこの『フェルジンバーグ』が重機兵として造られたのは、通常の中量級の機装兵では、頭部に成人が乗れるだけの余裕が無かったためだ。無理に頭部に操手を乗せようとするなら、13～14歳の子供でも連れてこない限りは無理だろう。

ビーッ、ビーッ、ビーッ……。

そのとき、移動基地内に緊急事態を表すブザーが鳴った。整備班長のブルドッグ顔が顰められる。チェスターも表情を引き締めた。
「なんだ!? 何が……」
「わからん! とりあえずお前も運転席まで来い!」
チェスターと整備班長は、移動基地を牽引している蒸気トレーラー運転席まで走った。

＊

「……やれやれ。緊急依頼かよ」
重機兵『フェルジンバーグ』の頭部で、チェスターは盛大に溜息を吐く。先ほどのブザーは、冒険者組合からの緊急連絡によるものだった。そして緊急連絡の内容は、彼に対する緊急依頼である。
その内容はと言うと、先ほど都市同盟軍から、緊急の協力要請があったのだ。それによると重犯罪者が中量級機装兵に搭乗し、アルカディア帝国との国境線に向けて逃亡中だとの事。だがしかし、今現在その重犯罪者が逃亡する方向に展開している部隊はいなかった。
そこで都市同盟軍は冒険者組合に、近場に居る冒険者への緊急依頼を行う様に要請する。目的は、重犯罪者機体の足止めだ。無理に敵機を撃破しなくても良い。時間さえ稼げれば、近隣部隊を呼び集めて包

囲網を完成させられるのだ。
　そして目標の重犯罪者の機体が逃走する先に居たのが、チェスターたち重機兵（じゅうきへい）『フェルジンバーグ』の試験部隊であった、というわけだ。間に合う位置に居るのは、チェスターたちのみ……。いや、試験部隊は彼以外は整備員とかだけなので、戦力外だから、戦えるのは彼しか居ない。

「やれやれだぜ……。けれど、これだけ軍が躍起になって追うからには、重犯罪者ってのは……。脱走軍人とかか？　いや、同盟の機密を盗んだ間諜（スパイ）とかもありそうだな。
……!?　来たか!!」

　チェスターの視界の端、荒野の地平線近くに土煙が見えた。彼は透明な強化ガラスの天蓋（キャノピー）ごしに、双眼鏡を使ってそちらを確認する。間違いなくその土煙は、疾走する機装兵（きそうへい）が立てた物だ。

「……機種は『スパルタクス』。カラーリングは濃緑色をベースにグレイとカーキ。間違いなく目標の機体だな。ただ、情報では第五世代型『スパルタクス』か、新型の第六世代型『スパルタクス』かは不明、か」

　この『スパルタクス』とは、冒険者組合の傘下にある傭兵管轄組織、傭兵協会が正規の傭兵に提供している機装兵（きそうへい）で、極めてローコストである代わりに性能はやや低目の機体だ。しかしあくまでそれは標準機体の話であり、『スパルタクス』はあくまで傭兵各自によるカスタマイズを前提にされた機体なのだ。
　限界までカスタマイズされた『スパルタクス』は、かなりの強敵である事は間違い無い。また八〇〇年代にマイナーチェンジされた後期型『スパルタクス』は、未カスタマイズの素体のままであっても旧態依然とした第五世代機兵ではなく、強力な部類である第六世代機兵と認められるだけの能力を誇っている。

「第六世代型の更にカスタマイズ機だとか言う冗談は、勘弁してくれよ……？」

チェスターは機体をその土煙に向けて走り出させる。主脚走行は頭部にある操縦槽が揺れるので、彼はあまりやりたく無いのだが、仕方なく機体を疾走させた。重機兵にしては基準をかなり超える速度で、『フェルジンバーグ』は爆走する。

そして敵機の姿が視界に捕捉される。チェスターは小銃型魔導砲を機体の腕に構えさせると、無警告で発砲した。砲弾が、敵機の足元に着弾。敵機は足を止める。

「こちら冒険者組合所属、冒険者チェスター！　自由都市同盟都市同盟軍の委託を受け、貴様を逮捕す……おわっ!!」

『……』

敵機は無言で斬りかかって来る。チェスターは機体の左腕に持たせた大盾で、その攻撃をかろうじて受けた。その瞬間、彼の血が凍る。

……敵機は、『フェルジンバーグ』の頭を狙って攻撃して来たのだ。

（そ、そりゃそうだろ!!　こっちは頭部がガラスの天蓋!!　頭に操手乗ってるの丸見えじゃねえか!!　頭が弱点だって、モロバレじゃねえかよ!!　こっちゃ重機兵だから普通に攻撃しても潰すのは面倒となりゃ、弱点狙うの当然だろ!?）

チェスターは牽制にしかならない小銃型魔導砲を捨てると、腰の長剣を抜き放ち斬りかかる。敵は自らの長剣でそれを受けた。圧倒的と言っていいパワー差で、敵機がよろめく。

しかし敵機『スパルタクス』はその反動を利用して機体をくるりと回転させると、空いている左手で腰にあった小剣を抜き打ちする。当然ながら狙いはチェスター機の頭部、彼の座る操縦槽だ。

小剣の切っ先が、天蓋を掠める。チェスターは叫んだ。

「うひいいいいい!?」

いくら強化ガラスと言えど、ガラスはガラスだ。錬金金属レイヴァスキンと高硬度パッテリートの複合装甲材で護られた胴体部と、ガラスの天蓋(キャノピー)では防御力も違い過ぎる。先ほどまで相手をしていた低級な小型魔獣と違い、機装兵(きそうへい)の攻撃を一撃でも受ければ、チェスターは絶命必至だ。

二度、三度と敵機はチェスターの乗る操縦槽(そうじゅうそう)を狙って攻撃を仕掛けて来る。このままでは命が危険だ。迫りくる死の予感に、彼は腹を括る。

「く、くそ！　こうなりゃヤケだ！」

チェスターは一歩自機を下がらせると、操縦桿を操ってその右手に長剣を構えさせる。敵の『スパルタクス』は、右手の長剣と左手の小剣を閃かせて躍りかかって来た。

「うおりゃあああぁぁぁ!!」

そしてチェスターは必殺の気合を込めて、『フェルジンバーグ』に長剣を突き出させた。

＊

「それで敵機の胴体中央、操縦槽(そうじゅうそう)を貫き通して、一撃で勝利を決めた、か」

頭部の天蓋(キャノピー)が砕けた重機兵(じゅうきへい)『フェルジンバーグ』を前に、この機体の開発者であるダライアス師はうんうんと頷いていた。その脇に立っていた、包帯でぐるぐる巻きのチェスターがダライアス師に噛み

付く。

「いや、この機体駄目だろ!? かろうじて天蓋を掠る程度で敵の攻撃間一髪で躱したけどよ!? その掠った一撃で天蓋砕けて、その破片で俺は大怪我!! こっちの一撃が敵の操縦槽貫くのに失敗してたら、俺は死んでたぞ!!」

「ふむ。格闘戦や白兵戦をする機体に、天蓋方式の操縦槽は危険か。法撃型魔導砲での火力支援機にのみ、採用すべきだな。感謝する。貴重なデータが取れた。例の重犯罪者を生かして捕らえられなかったのは、都市同盟軍からボヤかれたが……」

「そう言う問題じゃねえーーー!!」

絶叫するチェスターに、苦笑を向けたダライアス師は頷く。

「いや、言いたい事は重々わかっているとも。ただ、今回の緊急依頼に関しては、わたしは一切関与していなかった事も理解して欲しいな。試作実験機で無理をさせた件については、組合の上の方にしっかりとネジ込んで報酬増額を確約させる。というか、既にやった」

「はぁ、はぁ……。まあ、アンタに怒っても仕方ないんだろうけどよ。何にせよ、この形式の機体はアブな過ぎる。少なくとも、俺ぁコイツが発売されても、買おうとは思わんね」

「だろうな。こちらとしても、これをそのまま製品化するつもりは更々無い。ただ少なくとも、胴体を空けてそこに各種機材を搭載する方式が有力なのは、今回の実験で確定した。そしてお前さんが試験操手として有能なのも、な」

そしてダライアス師は言葉を紡ぐ。

「次の試作実験機も、お前さんにテストを依頼する事にしよう。何、次のは発売間近なタイプの追試験だ。今回みたいな事は無いから、安心しろ」

「……」

チェスターは、冒険者組合から強制依頼が行われない様に、できる限りたくさん先約依頼を受けておこう、自由都市同盟首都である中央都市アマルーナからは離れておこうと、そう心に決めたのだった。まあ普通、先約依頼があれば無理に組合からの強制依頼は発生しない。

けれど、冒険者組合がその気になれば、先約依頼を別の冒険者に代替させる事で、チェスターに強制依頼を発する事も不可能ではない。さすがにそこまでやらんだろう、と彼は思いたかった。しかしダライアス師の笑顔に、彼は不安を抑えきれないのであった。

Ｆｉｌｅ２０「ゲームセンターの少年」

今は聖華暦八三五年十二月、あの痛ましいバフォメット事変より二年弱の日々が過ぎていた。バフォメット事変とは、凶悪な魔王級魔獣バフォメットが、部下の８万にも及ぶ魔獣の群れを引き連れて南米大陸より北上、自由都市同盟の南部を蹂躙し、同盟首都である中央都市アマルーナ直前まで迫った事件を言う。

自由都市同盟はその事件により、致命傷一歩手前のダメージを負った。しかしながら幾人かの英雄たちの命を捨てた尽力と、数多の兵士たちの死を賭した挺身により、自由都市同盟は護られたのである。

更に言えばその事件の直後、同盟の力が弱まったのを好機と見たアルカディア帝国の、同盟領への侵攻などもあったのだが……。自由都市同盟は、からくもこれらの国難を乗り越えた。

そして今、自由都市同盟の人々は、逞しくも精神と生活を再建しつつある。バフォメット事変で相応に深刻な損害を受けたここ、中央都市アマルーナにおいても、人々は再起しつつあったのだ。

＊

『うわーっ!?　やられたっ!!』

『へへ、さっさと筐体を再起動するんだな。待っててやるからよ』

ある店の部屋の中に、少年たちの声が響いた。だがその店は、一見して何を売る店なのか、まったく分からない。

その店舗では広めの部屋の中に、まるで荷運び用のコンテナ程度の大きさの金属製の箱が８つ並んでいる。その箱の見た目も、荷運び用のコンテナそのものだ。その箱の側面には、１～８までの番号が錬金塗料ティーヴァで描かれている。

そして店の店員が、メガホンで声を張り上げた。

「えー、今回の戦闘時間、あと５分。あと５分です」

『ええっ!?』
『ち、これが最後の勝負になりそうだな』
『くそ、せめて一太刀……うわーっ!? だ、め、だあああぁぁぁ!!』

そして店舗内に、ベルの音が鳴り響く。するとコンテナ状の箱の壁面がスライドして、箱の中からぞろぞろと十代の少年少女がのろのろと出て来た。その数、箱と同じく8名。そして箱の出入り口から窺えるその中身は、まるで機兵の操縦槽に酷似していた。

そう、このコンテナ状の箱型機械は、機兵の操縦槽である。ただしそれが接続されているのは、実在の機兵ではない。この仮の操縦槽で動かしているのは、旧人類が用いていた電子計算機を模して作られた魔導計算機の記憶装置内、仮想空間上に存在する仮想の機兵なのだ。

この8台ある箱型の機械群は、いわゆる遊戯のための魔導器である。8名の少年少女はこの店に一定の金額を支払い、15分間の仮想機兵による戦闘ゲームを楽しんでいたのだ。つまりこの店は、いわゆる遊戯場だったのだ。

店員がメガホンで叫ぶ。

「次のゲームは二十分の休憩を挟んで、十三時三十五分より開始します! 繰り返します、次のゲームは二十分の休憩を……」
「なあ、どうする?」
「もうひと勝負やろうぜ?」
「あ、ごめん。あたしもうお金無いの」
「俺も無い。また城壁外の街外れの復興現場で、土木作業のアルバイトしないと。んじゃな」

少年1人と少女1人が、手を振って店の外へと去って行く。残りの面々は、残念そうにそれを見送った。少年の1人が、溜息と共に愚痴を吐き出す。
「なあ、店員の兄ちゃん。一回のゲームで一人三十ガルダはちょっと高かねえか? 三十ありゃ、定食屋で飯が食えるぜ?」

「俺に言うなよ。値段決めてるのは上なんだ。それによ。こんだけの魔導器動かして、整備して、更には仕事なんだから幾ばくかの儲けも計算に入れてよ？　それで一人一回三十ガルダは破格だと思うぜ？
　って言うかよ、今は真昼間で皆が仕事してる時間帯だ。客が少ないから、利用料を下げてるんだ。他の客が遊びに来る夕方以降の時間帯だと、一回六十ガルダなんだぞ？」

　少年は、ぐうの音も出なかった。

「……で、どうするストーム？　８台リンクのこの筐体じゃ、２台を空きにして動かすのは勿体ないけどよ？　二十分……ああ、もうあと十五分か。十三時三十五分からのゲーム、参加すっか？　参加すんなら、三十ガルダ払って参加登録してくれ」

　少年……ストームと呼ばれた彼は、仲間たちと目配せし合うと、懐から銅貨や小銅貨を取り出した。

＊

　ストームとその仲間たちがゲームプレイヤーの待合室で待っていた時の事である。次のゲームが始まるには、まだ７～８分はあるはずなのに、唐突に待合室の扉が開いた。一同の目が、扉に集まる。そして扉から入って来た人物が、口を開いた。

「ほほう。今回のゲームは、君らとご一緒する事になるのかの？　よろしく頼むぞ？　いや、ちょうど二人分のプレイヤー枠が空いておって助かったわい」
「……」

　入って来たのは、二人連れの大人である。片方は、七十近くにも見える老人であり、もう片方は壮年らしき男だった。ちなみに壮年の方

は、黙して右手で米神を揉んでいる。どうやら頭痛を堪えている模様だ。

ストームは首を傾げて言う。

「……よろしく、爺さん。けどよ、こんな真昼間からいい大人が遊戯場(ゲームセンター)に来て、いいのかよ？　ああ、いや。俺らも他人の事は言えねえけどよ」

「いや、わしは若いもんから怒られてしまっての。働き過ぎじゃ、と。それで強引に休暇を取らされてしまってのう。

それでこの見張り兼護衛付きで、今日一日は休みなんじゃよ。お前さんらは？」

「ん……。ほんとは学校(ガッコ)あったんだけどよ。バフォメットのせいで、校舎がブッ潰れて、経営も破綻しちまったんだ。成績いい奴らは別の学校(ガッコ)に割り振られたけどよ。俺らはこの二年間自宅待機で、仕方なく復興事業の現場でアルバイトと、遊戯場(ゲームセンター)との往復だな」

ストームがそう言うと、老人の表情が曇った。壮年の男も、沈痛な顔になる。

「そうか……。すまんのう。お主らが学校に行けぬのも、皆わしら大人の責任じゃて……」

「……」

「いや、気にすんなよ爺さん。爺さんたちが軍人なわけでもあるまいし」

「「……」」

「「「「「「え、」」」」」」

どうやら老人と壮年の男は、軍人かその関係者であった模様だ。ストームやその仲間は、引き攣った笑顔を浮かべた。そこへ、店員がノックをして入室して来る。

「皆さん方、あと少しでゲーム開始時刻になります。遊戯室へ移動を……」
「じ、爺さん！　おっさんも！　遊戯室に急げ！　ホラ！　ホラ!!」
「そうそう！　しょぼくれてないで！」
「い、いやー楽しみだなあ！　爺さんとおっさんの腕前、見せてもらうぜ？」

ストームと仲間たちは、これ幸いと老人と壮年の男の背を押して遊戯室へと急ぐ。まあ、重くなった空気をこれで全て誤魔化せたわけでもないが。

＊

ストームが乗った1番のゲーム筐体にある映像盤に、仮想空間内の都市を舞台に、カクカクした極めて単純なポリゴンの敵機兵が映し出されている。その胸板と背中には、大きく『8』の数字が描かれていた。映像盤の中の敵機兵は、手に持った長剣を振り下ろす。

「ちぃっ!!」
『ほう、これを受けるのか？　我流ながら中々の剣筋じゃの』

8番の敵機兵……8番のゲーム筐体に乗った、老人の操る機体は、ストームが苦し紛れに放った片手半剣の攻撃を左手に持った中盾で受ける。更にその勢いを右手の剣に乗せて、ストームの機体に突きを見舞った。

「うわっ！」
『ほほう、装甲の厚い、なおかつ致命傷になり難い肩で受けたか。だが、お前さんの機体は元より装甲が薄めで、代わりに機動力とパワーに長けたエクセレンザ。装甲で受け続けるわけには行くまいて』
「く、爺さん型落ちの旧式のミーレスなんか使ってるくせに、なんでこ

んなに強えんだ!?」
『ミーレスの輸入機は、わしが初めて乗った機装兵(きそうへい)での。当時既に型落ちであったが故に、訓練機として乗っておった。更に言えば、シメオンやスペーアが新型として配備されておったが、実戦部隊に配属されたときもわしに宛がわれたのは、ミーレスの改造機じゃったのう。
簡単に言うならば、慣れておるのじゃて』

ストームは、エクセレンザの機動力に任せて、必死で距離を取る。画面の中のカクカクしたミーレスは、滑らかな動きを見せて他の子供たちの乗ったキャットフィッシュやミーリテスを斬り捨てて行った。
なお、撃破された機体の筐体は、稼働停止する。筐体が稼働停止した場合、ゲームの時間が残っているならば、プレイヤーは引き続き再プレイに挑む事が可能だ。この場合、プレイヤーが筐体の再起動手続きを行い、再度ゲームに使う機体の選択から始める事になる。そうすると、選んだ機体が仮想空間内に配置され、再度ゲームを楽しむ事ができるのだ。
ちなみにストームはここ二ヶ月の間、一度も被撃墜記録が無い。このゲームで、彼はここしばらく無敗を誇っていたのである。

(ち、だけどその記録も今日で終わりかもな……)

やはり相手は、相応の実力のある本職の軍人なのだろう。爺さんだから、おそらくは後方の補給担当か何かに回されて、デスクワークばかりしているんだろう、とストームは思う。しかしそれでも、若い頃の重厚な経験は馬鹿にはできない。

(だけど……)

そしてストームは咆える。

「だけど、ただじゃ殺(や)られねえッ!!」

『その意気じゃ!!』

ストームは機体の両手で保持した片手半剣（バスタードソード）を突きに使い、エクセレンザの全速で老人操るミーレスに吶喊（とっかん）した。

＊

ストームは遊戯場（ゲームセンター）のロビーで、老人が皆に奢ってくれたドリンクを飲みながら、深々と溜息を吐いた。

「やれやれ、爺さん強いな。型落ちミーレスでアレか……。おかげでしばらく続いてた、無敗記録が途切れちまったぜ」

「そうは言うがな？　お前さん、最後は相打ちじゃろうて？　お前さんの勝ちとは言えんが、負けでもあるまいに」

そう、あの最後の吶喊（とっかん）は老人に防がれていた。あの瞬間老人は、機体に持たせていた中　盾（ヒーター・シールド）と長剣を投げつけたのだ。それで勢いの鈍（にぶ）った片手半剣（バスタードソード）を、老人のミーレスは真剣白刃取りしたのである。

突撃を見事に防がれたストームは、しかしその瞬間に機体の右脚部バーニアを全開にして、その勢いを乗せた蹴りを敵機の胴体真ん中……操縦槽（そうじゅうそう）へと叩き込む。一方の老人のミーレスは、白刃取りにしたストーム機の片手半剣（バスタードソード）を奪い、そのままストーム機の首元から操縦槽（そうじゅうそう）に突き立てたのだ。

結果、両者とも操手（そうしゅ）死亡判定で撃墜扱いになり、そこで１５分のゲーム時間が切れたのである。

「引き分けっちゃあ、引き分けかも知れねえけどよ……。気持ち的には、してやられたって感じしか無えなあ」

「ふむ……。それを言うなら、こちらも相打ちとは言え撃墜されてしまうとは思わなんだのだがの。

……のう？　もし良ければじゃがの。都市同盟軍兵員訓練学校（としどうめいぐん）

……訓練校と言えばわかるか？　そこへ通って見るのはどうかね？　お前さん、いやお前さんだけじゃない。他の子供らも、この遊戯場（ゲームセンター）が出来てからじゃろう？　あのゲームに触れたのは」

その言葉に、ストームも他の子供らも、目を丸くする。

「「「「「え？」」」」」

「ゲームとは言え、三ヶ月にも満たない期間であれだけ機装兵（きそうへい）を動かせる様になるとは、お前さんたちは才能あるぞ？　良ければ、わしが紹介状を用意してやろう。訓練校は学費は要らんし、薄給じゃが給与も出る。上手く推薦状を得られれば、士官学校に進む事も不可能では無い。と言うか、わしの紹介状があればその可能性は更に高まる」

「あ、い、いや。それは有難いけどよ。俺たちにゃ、他にも今は来てない仲間が……」

「じゃったら、後々で良い。そ奴らの腕前も見せてもらおうかの。さて、どうじゃ？」

ストームと仲間たちは、降って湧いた幸運に目を丸くした。しかし彼らがその幸運が、どれだけデカい代物だったかを知るのは、後々の話である。

そして老人の酔狂に、彼の見張り兼護衛役の壮年の男は、米神を抑えるのだった。

＊

自由都市同盟都市同盟軍（じゆうとしどうめいとしどうめいぐん）参謀本部事務局長であるナイジェル・サイアース中将は、この日急な来客を迎えていた。それは先日、あの遊戯場（ゲームセンター）でストームら子供たちに、訓練校への誘いをかけていた、あの老人である。今現在その老人は、きっちり軍服を着込んで応接用ソファに座していた。

「……それで、その子供たちの都市同盟軍（としどうめいぐん）兵員訓練学校への入学に、便

宜を図れ、と」
「できるならば更に、裏で士官コース要員としてマークして置いて欲しいんじゃがの。あの子らの才能は、歩兵や従機乗りを卑下するつもりは全く無いんじゃが、それで終わらすには余りに惜しい。明らかに、機装兵乗りとしての高い才能がある」
「……」

ナイジェル中将は、深く溜息を吐くと書類ケースから幾通かの書類を抜き出して、老人に見せる。老人は、驚きの表情を浮かべた。

「これは!?」
「あの遊戯場は、ロココ設計所とホーリーアイ武器工房の共同出資で創設された、ロココ・アイズ・アミューズメント社の店舗でしてね。そしてホーリーアイ武器工房が、冒険者組合のひも付きである事は、知っての通りです」
「……」
「あのゲーム用魔導器自体、もとはと言えば冒険者組合に出向中のダライアス・アームストロング技術中佐が開発した、機兵シミュレーターなのですよ。ゲーム用にするにあたり、少々操縦難易度は落としておりますが、ね。
無論、軍や訓練校、士官学校、その他諸々の準士官学校級の民間学校などに、このシミュレーターは量産して配備されつつあります。しかしそれに先立って、遊戯場はホーリーアイ武器工房の幅広い展開力を借りて、自由都市同盟全土に出店しております。……何故かわかりますか?」

老人は、手に持った書類を見遣りつつ頷いて見せる。

「あのゲームを遊んだプレイヤーのデータを、軍が入手していた。そしてゲームで優秀な成績を出した者には、軍のスカウトが接触して訓練校への紹介を行っていた……。違うかね?」

「正解です。……先ほどお話のあった、ストーム少年……ストーム・ティレット君とその友人たちには、近日中にスカウトが接触する予定でした。もっとも、そちらに先を越されてしまった模様ですが」
「やれやれ……。それでは……」
「ええ。彼らの入学への便宜を図る事と、士官コース要員としてのマーク、どちらも了解しました。特にストーム君は逃がしたくない逸材です。ただ、そちらの紹介状はきっちり用意してくださると有難いですな。閣下が唾(ツバ)を付けていた人材となると、下手に他所に持って行かれ難くなります」

ナイジェル中将と老人は応接セットのソファから立ち上がり、徐(おもむろ)に両者は敬礼と答礼を交わした。

「さて、今回の事はわしの借りにしておいてくれて構わんよ、事務局長」
「ありがたく、そうさせていただきます。アデルバード・ビスマルク大将……提督閣下」
「くくく、階級こそ上だが、実際の権力は貴殿の方が何倍もあるからな。その貴殿から閣下と呼ばれると、尻が痒くなる」
「とは言っても、規律は規律ですからな」

そして二人は硬く握手をする。老人……自由都市同盟(じゆうとしどうめい)都市同盟(としどうめい)軍(ぐん)機甲師団の第一師団『リベリオン』を率いる提督、アデルバード・ビスマルク大将は、ナイジェル中将の執務室を立ち去って行った。

Ｆｉｌｅ２１「旧きを以て新たなる力に」

従機と言う名を冠した簡易型の機兵が二台、必死になって崖っぷちにある大岩を転がして除けようとしていた。どちらの従機も、初号機ロールアウトが百年から二百年も前の、旧式機である。そのうちでも更に旧式タイプの『ミメラ・スプレンデンス』と言う機体に乗った方の操手がボヤいた。

「くっそ、パワーが足りねえ……」

『ミメラ』は操手が乗り込む操縦槽が外部に対して開放されており、操手がむき出しだ。それ故、彼の声は明瞭に響く。

もう一方の、若干だが新型であるが、それでも旧式としか言いようが無い機体『センクリクテ・クラーベ』の操手もまた、それに言い返す。ちなみに『クラーベ』は操縦槽が密閉式で、操手の声は拡声器を通して外部に伝達されるため、くぐもって聞こえた。

『黙って働けよ。旧式従機でも、二台あれば何とか動かせそうなんだからよ』

「けどよお……」

そこへ、機体の無い徒歩の人員が応援の声を上げる。

「たのむぜ、おい！　この岩を除ければ、その向こうの崖の壁面に、入り口があるはずなんだ！」

「そこにゃ、大昔の倉庫があるらしいんだ！」

「そこに眠ってるかも知れないお宝が手に入れば……」

「『んな事ぁ、最初から知ってるわい!!　何度も聞いたわ!!』」

従機の操手たちは、徒歩の面々に言い返す。そしてその瞬間、大岩がぐらりと揺れて横方向に転がった。徒歩の面々から歓声が上がる。

「「やったぁ!!」」
「『つ、疲れた……』」

一方の、従機を動かしていた連中は疲れ切ってヘトヘトだ。相応に魔力を消耗し、彼らはよろよろと機体を降りて来る。
彼らの努力によって大岩が除けられた崖の壁面には、たしかに大きな扉が存在していた。徒歩の者たちは、大急ぎでその扉に群がる。だが操手連中は浮かない顔をしていた。

「なあ、おい……」
「ああ……。あの扉の材質、もしかして……」
「やった！　開いたぞ!!」
「待て待て！　扉には無かったが、罠とかに注意を……」

大喜びで崖の内部にある遺跡……大昔の倉庫とやらに入って行く仲間を見遣りつつ、操手二人は嫌な予感を覚える。だがそれでも一縷の望みを胸に、彼らは仲間の後を追って倉庫の中へと足を運んだ。
そして彼らは、呆然としている仲間の姿を見て、引き攣った笑みを浮かべる。その更に向こう側には、十数台もの機兵の姿があった。そう、十数『台』である。そこは昔の、従機の倉庫であったのだ。いや、昔とは言ってもそこまで大昔ではない、二百年ちょっと前あたりの、単に古いだけの倉庫だ。
……ぶっちゃけ、あまり価値は高く無かった。

＊

「……と言うわけでな、ダライアス師。その発見された十六台の従機『サルファガス』なんだが。なんとか使い道は無い物かね？」
「開発局長……。わたしは今、非常に忙しいのだがね」
「すまん！　それは重々分かっているんだ！　しかしそこを曲げて願

いたい！　新人冒険者どもが冒険の戦利品として持ち込んで来たんだが……。
営業の連中は一応、従機を買い取る際の規準価格で買い上げてやったんだ。彼らの今後に期待する、という事でな」

兵器開発局局長の、熊耳がピコピコと動く。動物耳がオッサンにくっついていても、あまり嬉しくはない。局長は持ってきた書類を残念そうに眺めつつ、繰り言を漏らす。

「しかし、モノが『サルファガス』では……。改良型の『ノイ・サルファガス』であったなら、まだ作業用機としてでも使えたのだが……。『ノイ・サルファガス』に改修する事も考慮してもおるのだがね」

ダライアスは、大きく溜息を吐く。そして彼は、冒険者組合兵器開発局局長に対し、頷いて見せた。まあ、研究室にまで押しかけてこられて、いきなり迷惑な話を振られたと言っても、相手は兵器開発局の局長だ。そうそう邪険にするわけにも行かない。

「わかった、局長。なんとか考えて置くよ。だが今現在の、急ぎの仕事が終わってからだ。都市同盟軍中央軍の参謀本部事務局長、ナイジェル・サイアース中将閣下から、依頼が入っているのは知っているんだろう？」
「う、うむ」
「中将閣下によれば、地盤・岩盤掘削用の大型従機『モール』をもっと増産して欲しいとの事だ。あれの設計基はもう局長経由でホーリーアイ武器工房の会社側に渡しているんだがね」

ダライアスの言葉には、異様な迫力が満ちている。その丸眼鏡の奥の瞳が、局長を射抜く。局長はひるんだ。

「今現在『モール』の設計に改めて手を加え、製造効率を少しでも向上

させられないか、やっているところだ。その仕事が終わってから、そちらの案件に取り掛かる。
それについては、断じて動かすわけにはいかん。何が最優先なのか、は局長も理解してくれると思っているのだが、ね？」
「わわわ、わかっているともダライアス師。それが済んでからで構わないとも。ああ、何かあったら多機能通信魔導器（ENIGMA）で連絡してくれたまえ。では失礼するよ！」
半眼になったダライアスの視線を受けて、局長は熊耳をパタパタさせながら、引き攣り笑顔でダライアスの研究室を立ち去った。ダライアスは、局長が置いて行った書類を眺めて、再度大きく溜息を吐いた。

＊

そして二日後、ここはダライアスの工房である。とりあえずダライアスは、作業用大型従機（じゅうき）『モール』の設計に手を加え、その図面を局長経由でホーリーアイ武器工房社へと送り出した。そして今、局長から押し付けられた仕事を片付けるべく、彼は工房にやって来た。
目的は、冒険者組合の営業部が新人冒険者グループから買い取った、従機（じゅうき）『サルファガス』を調査するためである。今、彼の眼前には、二百年以上も昔の旧式軍用従機『サルファガス』が一台鎮座していた。
「これが『サルファガス』ですか……。初めて見ましたよ。士官学校で戦史の教科で教わった程度しか、知りませんが……」
「……すまん、ジェナたん。俺ぁ、戦史の時間は寝てたんで全然知らん」
「たん言うな。って、フーゴ中尉！　貴官どうやって士官学校卒業した!?」
「戦史はノート借りて、代わりにソイツが苦手だった実技試験でペア組んでカバーしてやった」

口々に言い合うのは、ダライアスの護衛を兼ねた実験部隊に所属する、ジェナ・スホーンデルヴルト中尉と、フーゴ・グラッツラ・ディンフィンブルム中尉だ。ちなみにこの二名は、ジェナ中尉がシェパード耳のスレンダーな美女、フーゴ中尉が狼頭の細マッチョ男性で、どちらも獣牙族と呼ばれる獣人型の亜人に属している。

そして実験部隊の指揮官であるアレクシア・アーレルスマイヤー大尉が、ガチャリと着用している重装鎧を鳴らして、肩を竦める。と言うか、なんで彼女はこんな安全な冒険者組合の内部にある建物の中で、完全武装をしているのか。その謎は、未だ解けない。

「わたしも『サルファガス』は名前をちょっと聞いたくらいでしか無いな。戦史の教科は、なんとかぎりぎりで通るぐらいしか点数は取れなかったし……」

「たいちょー、お仲間ですな！」

「フーゴ中尉！」

実験部隊の面々に苦笑しつつ、ダライアスは『サルファガス』に目を遣る。そして深く、深く溜息を吐いた。

その『サルファガス』だが、どうにも言い様の無い妙ちくりんな形状をした機体であった。まず本体だが、玉ねぎかもしくは何かの球根かとでも言う様な形状をしている。そして左右に細くてパワーの無さそうな腕が伸びて、単純な形状のマニピュレーターに繋がっていた。

特徴的なのは、脚が四本存在する事だ。移動性能は低そうだが、安定性は確保されているだろう。そしてもっとも重要なのは、機体の天辺に背負わされた巨大な魔導砲であった。

「この『使えない』事で有名な旧式もいいところの従機を、どう使ったものかね……」

「「使えない？」」

「ああ。ぶっちゃけた話、何にも使えん。ララ……」

「はい、技術中佐」

ダライアスに書類の束を渡したのは、表情に乏しい十四歳ぐらいに見えるスレンダーな美少女だ。名をララ・エルナンドと言うこの少女は、こう見えても都市同盟軍士官学校アマルーナ校を主席卒業した英才であり、中尉であった。彼女は参謀本部の所属であり、ダライアスの秘書兼護衛であり、ダライアスと都市同盟軍との間の連絡士官でもあるのだ。

書類を捲りながら、ダライアスは眉を顰める。彼は頭を振りつつ苛立たし気に言った。

「不幸中の幸いは、ほぼ完全に倉庫が密閉状態であったため、劣化がまったくと言っていい程に無かった事だな。だがそれでも、魔導炉とか魔力収縮筋とかを他の従機用のパーツとして切り売りするぐらいしか、価値は無いに等しい」

「一応は、軍用の従機なのでしょう？　本来の用途には、用いる事はできないのですか？」

アレクシア大尉の言葉に、士官学校での成績が良かったジェナ中尉が何がしか言いたげな風情になる。だが言い出せないその様子に苦笑して、ダライアスが口を開いた。

「間違った戦術ドクトリンに乗っ取って開発された、失敗作兵器だからな、これは……。もともと、陸上艦が開発された時代にまで話は遡る……」

そうしてダライアスは、ゆっくりと語り始めた。

＊

陸上艦が開発された聖華暦三二〇年代当時、戦場の花形である機兵

の足は遅かった。いや、単純に歩いたり走ったりする速度は、八三〇年代現在の機兵とさほど変わらない。ただ大きく変わる点は、今現在の機兵と違って噴射推進装置の類を搭載していなかった事だ。

この機動力の無さは機兵、それも戦場の王者であった機装兵の地位を失墜させた。かわって戦場の覇者となったのが、陸上艦である。遠距離から大口径大出力の砲戦を行い、しかも自身は強大な魔導障壁……無論、古代の芸術品である幻装兵が装備するソレとは比べ物にならない拙い出来の代物ではあったが、ソレと重装甲とで身を守った陸上艦は、あっと言う間に戦場の支配者となったのだ。

仮に機装兵が陸上艦に対抗しようとするならば、なんとかしてそのセンサーを掻い潜り、奇襲攻撃を仕掛ける以外に道は無い。そうでなくば、遠距離からの大火力砲撃で一方的にやられるだけなのだ。そして奇襲攻撃は、極めて困難、至難であった。

その後、聖華暦五八〇年。この年、アルカディア帝国とカーライル王朝・聖王国の間における紛争、ラマー平原の戦いが起きる。ここで聖王国は、新機軸のホバー駆動の陸上艦にて、圧倒的なまでに帝国艦隊を打ち破った。わずか1隻の損害で、帝国艦隊を壊滅させてしまったのである。

この勝利に気を良くした聖王国は、来たる第三次聖帝戦争においては艦船の機動力と火力とが勝利を決定づけると判断。そしてホバー駆動の陸上艦艇に搭載し、艦の火力を補助するための機体を大量生産したのだ。

それが、砲戦型従機『サルファガス』である。

動きは鈍重だが、搭載した大口径魔導砲の威力は絶大。四本足による安定性は、圧倒的な命中率を保証する。仮に帝国艦がホバー駆動を実装していたとしても、細かい機動力に欠ける艦艇であれば『サルファガス』の砲であれば命中し、敵艦の魔導障壁にダメージを与えられるはずであった。……そう、『はずであった』のだ。

＊

「……だが帝国軍は、それに付き合う気などさらさら無かった。帝国軍は、ゲーム盤をその下のちゃぶ台ごと、ひっくり返したのだよ。具体的に言うならば、第五世代機兵『レギオン』の投入だ」

ダライアスはララが手渡したコップの水を呷ると、言葉を続ける。

「第五世代機兵は、すべからく噴射推進装置を搭載している。最初の第五世代の機装兵たる『レギオン』は、その高機動力をもってして聖王国の艦艇にまとわりつき、白兵攻撃をもってして魔導障壁を叩き壊し、次々に聖王国艦を沈めた」

「「「……」」」

ゆっくりと語られるダライアスの言葉に、他の面々は声も無く聞き入る。彼は更に言葉を重ねた。

「従機『サルファガス』は、命中さえすれば機装兵にダメージを与えられ、当たり所さえ良ければ場合によっては撃破も不可能では無い、大口径大威力の魔導砲を一門搭載してはいるがね？　高機動の『レギオン』にはなかなか命中は見込めない。

それだけでなく、味方艦にまとわりついている『レギオン』を狙って、味方艦を撃ってしまえばどうなる？」

「それは……」

「逆効果もいいところ、ですな」

「そんなわけで、『サルファガス』は何もできずに続々と帝国の『レギオン』にスコアを献上するだけだったのだよ。まあ、その後聖王国も『ミーレス』と言う第五世代機を戦場に投入して、なんとかなったがね。『サルファガス』は結局は役立たずのまま、戦争は終わった。これは今の機兵が殆ど大口径砲を搭載しない理由でもあるな。

ちなみに戦後、作業用に大改修して転用した『ノイ・サルファガス』と言う物もあるんだが」

そしてダライアスは、やれやれと言う表情で従機『サルファガス』を見遣る。

「コイツは、本来の『サルファガス』そのままだからな。このままではまったく使い物にならん。パーツとして見ても、結局は旧式従機。発掘してきた新人冒険者たちにボーナスをやった物と考えて、諦めるのがいいんじゃないかね」

肩を竦めるダライアスは、そして溜息を吐く。それはもう深々と。

「それよりも、作業用従機『モール』の不足が大問題だ。設計図を書き直して、多少は手軽に製造できる様にはなったが……。これほどまでに同盟全土からの需要が大きいとは。いや、同盟各地の鉱山から、地盤・岩盤掘削用大型従機『モール』がどうしても欲しいと、ナイジェル中将閣下を通してホーリーアイ武器工房の会社に注文が殺到しているんだ」

「技術中佐、今回の設計図の手直しでは所詮は焼け石に水です」

「わかっている、ララ。なんとかせねばならん。第一なあ……。どこの鉱山でも『モール』を欲しがっているが、大規模鉱山でも無い限りは、『モール』だとオーバースペックなんだ。中小の鉱山だと、『モール』よりも小型の機材でもあれば」

「たとえば、そこの『サルファガス』程度のサイズでしょうか？　ダライアス師」

そうアレクシア大尉が言った瞬間、彼女に全員の視線が集まった。アレクシア大尉は、焦り言葉を吐き出す。

「あ、い、いや。何かわたしは悪い事でも言……」

「天才か、君は」

「そうですね、そのひらめきは。良いアイディアです」

ダライアスとララ中尉は、手放しでアレクシア大尉を褒めたたえる。そして二人は足早に近場の作業机まで駆け寄ると、そこに置いて

あったダライアスのノートＰＣで猛然と書き物を始めた。ちなみにノートＰＣは古代の発掘品だ。今現在、この世界にはノートＰＣなどという物は、基本存在しない。

「あ、あ、え、なあジェナ中尉、フーゴ中尉。わたし何かしたか？」
「いや、何かしましたって。無論良い方向で。な？　ジェナたん」
「たん言うな」

後に残された三人は、一人は唖然と、一人は苦笑しつつ、一人はうんうんと頷いて、その場に立っていたのである。

＊

そして半月後、ここは自由都市同盟は都市同盟軍中央軍参謀本部の、ナイジェル中将の執務室である。今現在、ダライアスはララ中尉を伴って、中将に対する報告に来ていた。
ナイジェル中将が、満足げに頷く。
「ふむ、それでこの『ネオ・モール』という作業用従機を新規開発して量産。従来の『モール』は大規模鉱山や大規模な工事現場にのみ送り、中小の鉱山や現場にはこの『ネオ・モール』を送ったわけか」
ナイジェル中将の手元の書類には、その『ネオ・モール』という従機の写真が添付されている。それは紛れもなく、『サルファガス』そのものであった。正確に言うならば、その改造機と言えるか。
ダライアスは徐に語る。

「これまでの『モール』は、二基の大型ドリルを装備して、それにより地盤や岩盤を掘削するという物でした。ですがこの『ネオ・モール』は『サルファガス』の天辺部分に装備されていた大型魔導砲を撤去し、それと入れ替える形で一基の大型ドリルを装備しております。
『サルファガス』由来の四本足は、掘り進んだ坑道内部でも安定して姿勢を保てます。小柄ですので、大規模な坑道を掘る事に特化した今

までの『モール』よりも汎用性も高いかと」
「なるほど。今までの『モール』は、もともと大規模土木工事用であったからな」
「手に入った十六台の『サルファガス』は、全て『ネオ・モール』に改造して出荷済みです。また、聖王国から『サルファガス』のデザインやライセンスなどの権利を兵器開発局局長が買い叩き、極めて安価に手に入れました。今現在、それにより完全新造版の『ネオ・モール』がホーリーアイ武器工房で製造開始されています」

ちなみに中古『サルファガス』を改造した物よりも、完全新造版の『ネオ・モール』の方が、安くて高性能に仕上がっている。ナイジェル中将は、大きく頷いた。

「うむ。現状『海洋温度差発電所および完全電化工業都市群建設計画』は順調に進んでいる。そしてこの『ネオ・モール』を我々に協力的な会社や組織に優先的に渡すことで、その足場もなお一層に固まった。見事だ、ダライアス・アームストロング技術中佐」
「いえ……。優秀な協力者たちが、わたしには大勢います。わたしだけの力ではありませんよ」
「そうか。だがその者達が集まって来るのも、貴官という存在があるが故だ。今後も頼むぞ」
「はっ」

そしてダライアスとナイジェル中将は、固く握手を交わした。

File22「筋力増強」

Darius Report：File022「筋力増強」

ガゴオオオオオオン……!!
ガギイイイイイン……!!

鋼と鋼がぶつかり合う、轟音が響く。いや厳密には鋼よりも更に強靭であったり、あるいは更に堅固であったりする、錬金金属の装甲板や武器だったりするのだが。そう言う素材でなくば、全高八メートルものサイズである巨大な機兵の機体や武具にはなかなか使いづらい。

何故ならば、物体と言うものは巨大に作れば作るほど、脆く壊れやすくなるからだ。例えて言えば、高さや幅、奥行きなどが一メートルサイズの巨大な豆腐を作ろうとすれば理解してもらえるだろうか。そんな巨大な豆腐は、自重を支えきれずに潰れてしまう。まあこれは極端な例であるが。

ピピピピピピピピピピピピピピピピ……!!

『……タイマーが鳴った！　パワーアンプ機構、切り離しします！』
『こっちもだ！　時間切れ、パワーアンプ機構、切り離しだ！』

自由都市同盟首都、中央都市アマルーナの城壁外に広がる冒険者組合の演習場に、ジェナ・スホーンデルヴルト中尉と、フーゴ・グラッツラ・ディンフィンブルム中尉の叫びが響き渡る。その声は、機装兵のコクピットである操縦槽に装備されている、拡声器を通しているために少々歪んでいた。

二人の中尉は、どちらも自由都市同盟に数多く居る亜人族、その中でも身体に獣の特徴を色濃く残した獣人、獣牙族だ。ちなみに獣人タイプ亜人であっても、猫や鼠など一部の種族は猫人族や鼠人族など、固有の種族名で呼ばれるものも多々存在するが。

そして、演習場に轟音が響く。

ガゴン！　ゴゴオオオォォォォォン!!　ガラガラガラ……!!

二人が乗っていた機兵……。機兵の内でも上位の標準的な中量級機体である機装兵という機種なのだが、それに外付けにされて肘や膝、肩や腰にくっついていた装置が切り離されて大地に転がった。

するとその装置は、地面の上で煙を吐き出して、ジュウジュウと音を立てつつ融け崩れて消滅して行く。ジェナ中尉が乗る旧式機装兵『ミーレス』と、フーゴ中尉が駆る同じく旧式機装兵『レギオン』は、そちらに機体の眼球たる魔晶球を向けて動きを止めていた。

『ふぃ～。機構の切り離しは、時間がきたら自動でされる様に作った方がいいんじゃねえかな。うかつに装置をくっつけたまま戦ってたら、装置が融解しちまう際に機兵本体がダメージ受けちまう』

『それはわたしも思うな。ただ、戦闘中に唐突に時間切れして勝手に切り離しされてしまうのも問題だ。タイマーの警告音は残して置いた方が良さそうだ』

ちなみに彼らの周囲では、同様の機構を機体に装備した雑多な機装兵が、彼らと同じように模擬戦を繰り広げていた。その機種は『ミーレス』系列機、『レギオン』系列機、『ミーリテス』や『マーセナル』など他国からの輸入機の他、『ロイヤリタート』系列機、『スペーア』系列機、『フォート』系列機、『フォッシュ』系列機、『シメオン』等などの自由都市同盟は都市同盟軍オリジナル機も見られる。

更には『バルザック』に『キャットフィッシュ』『ジュダ』と言ったアイオライト・プロダクション製の機体、『イグナイト』や『カヴァリエーレ』に『セレンザ』『エクセレンザ』と言った同盟企業カルマッド機兵工房製の機体、『リャグーシカ』系列機や『ヴェーチェル』と言ったロココ設計所の機体、傭兵協会の標準機体である『スパルタクス』、冒険者組合設計の『ブロッキアーラ』『ドランゲン・スタイン』『アー

ミィ・アント』『ホルニッセ』までも存在していた。
数は少ないが聖王国の軽機兵メーカー、アリアンス・ディー・アトリー社設計で同盟企業シームド・ラボラトリーがライセンス生産している『フィガロ』、そしてそのシームド・ラボラトリーが独自生産した『オートクレール』等、軽機兵の姿も見える。まあ軽機兵は軽量であるが故の機動性能が大事なので、追加装備により重量が嵩むと言うのは、あまり歓迎はできないはずだが。とりあえずその軽機兵も、数機ばかりだが在る。
もっとも機体を動かす操手の数が足りない事もあり、それら機兵の大方は、操縦槽の扉を開けて駐機姿勢を取っていたのだが。
と、そこへ新たに三機の機装兵が姿を見せる。一機は今現在模擬戦を繰り広げている実験部隊の隊長、アレクシア・アーレルスマイヤー大尉の乗機である、『ロイヤリタートＴｙｐｅⅣ』だ。そして一機は試作実験機で『ドランカード・タイガー』と呼ばれる機体であり、都市同盟軍中央軍参謀本部所属の士官、ララ・エルナンド中尉が今現在借り出している。
最後の一機は、実験部隊の直接の上官であり都市同盟軍研究所より冒険者組合へ出向中の技術中佐、機兵技師ダライアス・アームストロングが自身の専用機として用いている『アーチャー・フィッシュⅡ』だ。ちなみに初代『アーチャー・フィッシュ』はかつての惨禍、バフォメット事変の際に撃破されて喪失している。この機体はその初代『アーチャー・フィッシュ』の代替として、ダライアス師が用意した機体であった。
アレクシア大尉が『ロイヤリタートＴｙｐｅⅣ』から叫ぶ。
『ああ、手を休めるな！　敬礼は不要だ！　全員パワーアンプ機構の試験を続けろ！』
『『『『了解!!』』』』』
実験部隊の面々は、引き続き模擬戦を続けた。そんな中、とりあえず試験項目を完了してパワーアンプ機構を破棄していた、ジェナ中尉

の『ミーレス』とフーゴ中尉の『レギオン』が歩み寄って来る。
フーゴ中尉とジェナ中尉は、ダライアス師たちに報告を行った。
『親分、たいちょー、『レギオン』と『ミーレス』の、パワーアンプ機構に関する一通りの試験は終わりましたぜ。一応は想定された試験項目については問題なしですな。けれど……』
『はい、時間切れになったパワーアンプ機構を切り離し措置をするのは手動ではなく、自動装置によって行われるべきかと愚考いたします。ただ、突然に切り離しされると操手側が混乱する可能性もあるので、警告音は残しておいた方が良いかと』
『うむ、その件は他からも上申を受けているよ。次の試作品からは、その様に修正が為される予定だ』

やはり皆、考える事は同じだと見える。ジェナ中尉もフーゴ中尉も、問題点が既に改善されている事に安堵した。
ここでフーゴ中尉が、ぽつりと疑念の言葉を漏らす。

『しかし……。この機兵の筋力を短時間だけとは言え劇的にパワーアップさせる、パワーアンプ機構……。これ、効果のほどは物凄いとは思うんスけどね。
でも、こんな旧式の『レギオン』や『ミーレス』、あっちにあるⅡ型系列の『リャグーシカ』とかに対応できるかまで、検証する必要あったんで？』
『あるんだ』
『あるんスか』

この『レギオン』と『ミーレス』という機装兵は、それぞれアルカディア帝国と、カーライル王朝・聖王国における、第五世代機兵の走りとも言える機体である。厳密に言えば、聖王国においての初の第五世代機兵は、『ミーレス』の原型となったプロトタイプ、伝説的な戦果を為した機装兵『ノヴレス』シリーズなのであるが。

更に言えば、『レギオン』は帝国だけでなく聖王国や自由都市同盟まで含めた三国、それどころか全世界的に見ても初の第五世代機兵である。この『レギオン』は、それまでの戦術ドクトリンをひっくり返した画期的な機装兵であった。

『レギオン』登場前の時代、機兵には噴射推進装置の類は搭載されておらず、基本的に機動力はその両の足による主脚移動によるものであった。そのため、聖華暦三〇〇年代初頭から半ばにかけて、遠距離砲撃が可能でなおかつ機兵よりも航続距離が長い当時は理想の兵器、陸上艦が出現すると、それまで戦場の王者であった機兵はその王座を滑り落ちる事になる。

陸上艦側からすれば、鈍重な機兵など遠距離からの集中砲火で潰してしまえば良く、敵が接近を試みてもしょせんは足で歩くしか無い機兵はこちらが退き撃ちをすれば簡単に対処できる。故に陸上艦、それも巨大な陸上戦艦は陸戦の花形であり、戦場の覇者であったのだ。……大艦巨砲主義の時代の、幕開けであった。

だがしかし、聖華暦六一〇年、第三次聖帝戦争開戦。この戦争に、アルカディア帝国はそれまでの第四世代機兵に代わり、第五世代機兵『レギオン』を投入する。これは強力な噴射推進装置を搭載しており、凄まじいまでの機動力と移動力を兼ね備えていた。

カーライル王朝・聖王国の陸上艦は、ホバー推進システムによる高機動が売りの新型艦艇で統一された、強力な艦隊であった。しかしながら細かい機動性は望むべくもなく、まるで軍隊アリにたかられる獲物の様に、高機動性を誇る『レギオン』にことごとく叩き潰されたのである。これが大艦巨砲主義の時代の、幕引きであった。

だが聖王国も黙ってはいない。第五世代機兵『ノヴレス』でデータを取って、その生産型である『ミーレス』を完成させてなんとか戦況を持ち直したのだ。そして『レギオン』と『ミーレス』はその派生機まで合わせて莫大な数が生産された。

閑話休題。ダライアス師は語る。

『『レギオン』と『ミーレス』は、既に二百年前に初号機がロールアウ

トした旧式機ではあるんだがね。第三次聖帝戦争が終戦して、ダブついた中古機体が大量に同盟へと流れて来た。まあ、その結果として『ロイヤリタート』系列機とかが同盟で生まれたりもしたんだがね』

『『はぁ』』

『その結果、時代遅れになったはずの八三五年現在に於いても、近代化改修された『レギオン』や『ミーレス』は都市同盟軍の正規軍からこそは姿を消したものの、冒険者や傭兵には未だに使用されている。……未だに使われているんだ。』

ダライアス師の機体、『アーチャー・フィッシュⅡ』の眼である魔晶球が、フーゴ中尉の『レギオン』、ジェナ中尉の『ミーレス』を走査する。『アーチャー・フィッシュⅡ』は、器用に肩を竦めた。

『だからこそ、冒険者組合としてはこの機兵の筋力を一時的にではあるが爆発的に向上させるパワーアンプ機構を実売前に試験するにあたり、色々な機種で対応できるかどうか確認しておく必要があるんだ』

『なるほど、親分』

『まだ使われてたんですね……』

納得したジェナ中尉とフーゴ中尉は、試験する機体を乗り換えると、再度パワーアンプ機構のチェック作業に戻った。

＊

『……で、トライアルの操手が俺ですかい？　『ロイヤリタートＴｙｐｅⅢ』を使うんなら、その発展機である『ＴｙｐｅⅣ』に慣れてるアレクシアたいちょーの方がいいんじゃないスかね？　いや、既にトライアル会場に来てまで文句言うのも何だと思いますがね』

「アレクシア大尉は、ちょっとばかり腕が立ち過ぎるとの事で、都市同盟軍の方から却下された。かと言って、並の操手だとパワーア

ンプ機構の利点を上手く引き出した戦いぶりができるかどうか、不安だからなあ」
「ジェナ中尉か、貴官か、どちらかの選択肢しか無かったのだ。で、ジェナ中尉はちょっと心持ち体調不良だったからな。自信を持て！胸を張れ！」

ここは自由都市同盟首都、中央都市アマルーナ東側城壁外に存在する、都市同盟軍演習場である。ちなみに都市本体を挟んで西側の城壁外には、冒険者組合の演習場が広がっている。
今、都市同盟軍演習場では、先日ほぼ完成のレベルまで出来上がったばかりの、機兵用の外付けパワーアンプ機構を都市同盟軍の装備として採用するかどうかの、トライアルが行われるところである。トライアルの相手は都市同盟軍の現役機。それに対し、旧式機である『ロイヤリタートＴｙｐｅⅢ』で善戦できれば合格であった。
今ここに、機体各所にパワーアンプ機構を装備した『ロイヤリタートＴｙｐｅⅢ』が、ダライアス師、ララ中尉、アレクシア大尉と共にやって来ていた。『ロイヤリタートＴｙｐｅⅢ』の操手は、先ほどのやり取りで判る通り、フーゴ中尉である。
やがて都市同盟軍研究所、一般には開発局と言われる事が多いが、そこで軍事工学研究部門を率いている技術大佐、エリベルト・エルナンド師がトライアル相手の機体を引き連れてやって来る。ダライアス師、ララ中尉、アレクシア大尉は敬礼を送った。ワンテンポ遅れて、フーゴ中尉の『ロイヤリタートＴｙｐｅⅢ』も敬礼を送る。
エリベルト師と周囲の技師たち、そして彼が引き連れて来た重機兵が、答礼を返してくる。それを見て、フーゴ中尉が機上から小さな声で言葉を漏らした。
『……重機兵『フォート』。……うそーん』
「聞こえてるぞ、フーゴ中尉」
この『フォート』という重機兵は、聖華暦八一二年に初号機がロー

ルアウトし、配備開始された都市同盟軍の主力機兵である。この機体はなんと、魔導炉に出力を増強するエーテリック・アクセラレーターと言うシステムを組み込んだ、第七世代機兵だ。

まあその内でも、比較的廉価なタイプではあるのだが、第七世代は第七世代。基本的な魔導炉のエーテル出力は第五、第六世代機兵とは段違い。そして重機兵であるが故に、そのエーテル出力を使いこなせるだけポテンシャルの高い、魔力収縮筋をも搭載している。

普通であれば、第六世代機の端になんとか手が届く程度の『ロイヤリタートＴｙｐｅⅢ』では、太刀打ちする事すら難しい。それほどに、基本的な値段とそれに基づく性能の差が顕著なのである。

だがエリベルト師が、にこやかな笑顔を浮かべて言葉を発する。

「フーゴ中尉、だったな。そんなに心配するな。無理に勝つ必要は無いからな。善戦してくれれば、それで目的は達成される」

「そう言う事だ。負けてもかまわん。一矢報いるぐらいはして欲しいし、無様な負け方をしなければ大丈夫だ。……無論、勝ってしまっても構わんよ？」

ダライアス師も、にやり笑いを浮かべて『ロイヤリタートＴｙｐｅⅢ』にサムズアップを送る。フーゴ中尉は、やれやれとコクピットである操縦槽の中で、肩を竦めた。

やがて、のんびりと談笑しながら都市同盟軍の高官たちがやって来る。いよいよトライアル本番が始まるのだ。

＊

そして都市同盟軍高官たちは、目を見張った。ダライアス師とエリベルト師は、にこやかに笑みを浮かべる。ララ中尉は無表情だし、アレクシア大尉はいつも通りバケツ型ヘルムを被っているので表情が分からない。

何が起きたかと言うと、フーゴ中尉の『ロイヤリタートＴｙｐｅⅢ』

が『フォート』の叩きつけたランスを、真正面から片手半剣（バスタードソード）で抑え込んで見せたのだ。普通であるならば、『ロイヤリタートＴｙｐｅⅢ』の片手半剣（バスタードソード）が『フォート』のパワーに負けて弾（はじ）き飛ばされ、『ロイヤリタートＴｙｐｅⅢ』の胴体にランスが叩き込まれているのが当たり前なのである。

軍高官の、驚愕の声が響き渡った。

「こ、これは！」

「『フォート』のパワーに真っ向から対抗している!?　対抗できている、だと!?」

いや、『ロイヤリタートＴｙｐｅⅢ』は『フォート』のパワーに対抗するどころか、そのランスを逆に弾（はじ）き飛ばす。まるで万歳をするかの様な姿勢になった『フォート』に、フーゴ中尉は自機の手に持たせた片手半剣（バスタードソード）の切っ先を突き付けた。

そして、バシュン、バチュン、バシューッと音がすると、『ロイヤリタートＴｙｐｅⅢ』機体各所に装備されていたパワーアンプ機構（ユニット）が切り離（パージ）しされてガラガラと轟音と共に落下、融解して溶け崩れた。

軍高官たちは、呆然自失状態だ。

「どうでしたか？　ダライアス技術中佐の新型装備は」

「あ、ああ……。い、いや、素晴らしい以外に、言葉も無い」

「しかしながら、欠点もありましてね。確かに普通の機装兵（きそうへい）の筋力を、『フォート』並にパワーアップできるのですが……。短時間だけしか保たない、しかも使い捨ての装備だと言う事です。」

軍高官の賞賛の言葉に、しかしダライアスは残念そうに言う。彼としては熟練者を更に強化する装備を作りたかったのは確かなのだが、未熟者を補助するシステムにもなれば、と考えていたのだ。だがしかし、やはり未熟な操手（そうしゅ）には荷が重い模様だ。

「操手が熟練の練達の腕利きであれば、見ての通り使いどころを間違える事なく、的確に使用できるでしょうが……。並以下の一般操手では、上手く使いこなせずに無駄に消費してしまう可能性も高いですな」
「いや！　だがこれを『フォート』そのものに搭載すればどうだ!?『フォート』の乗員は、もとより練達の腕利き揃いだ！　ただでさえ強力な『フォート』のパワーが更に増強されるとならば！」

ダライアス師の言葉に割り込んで、軍高官の一人が叫ぶように言う。他の軍高官も、激しく頭を上下させ、頷く。ダライアス師とエリベルト師は、苦笑しつつ顔を見合わせた。

＊

一方その頃、『ロイヤリタートＴｙｐｅⅢ』の操縦槽で、フーゴ中尉は大きく溜息を吐く。

「はあああぁぁぁ～。や、やっべぇ、やっべぇ。パワーアンプ機構の時間切れ前に、ぎりぎり間に合ったぜえ……。
俺が機構の運用試験とかで、こいつの使い方に慣れてなかったら、勝てなかったどころか無様に負けてたかも……。負けても善戦すりゃいいって言ったって、この装備の性質上、勝つかはたまた無様に負けるか、だろうに……」

フーゴ中尉の視線の先では、駐機姿勢になった『フォート』から、その操手が降りて来るところだった。相手もまた、獣牙族の様である。その青年士官の頭には狐耳が生え、尻には大きなフサフサした狐の尻尾が存在していた。
フーゴ中尉もまた、自機を駐機姿勢にさせて機体を降りる。相手操手は、フーゴ中尉に敬礼を送って来た。フーゴ中尉もまた、答礼を返す。

「……お見事です。まさか『フォート』で『ロイヤリタートＴｙｐｅⅢ』に負けるとは……」
「あ、いや。俺も勝てるとは思わなかったけどよ。ダライアスの親ぶ……い、いやダライアス師の作った新装備のおかげだから。えーと、ちゅ、中尉？」
「あ、失礼しました。僕はジェローム・ジャッジ中尉です。気軽にＪ・Ｊと呼んでいただければ」
「あ、おう。俺はフーゴ・グラッツラ・ディンフィンブルム中尉だ。フーゴでいいぜ、Ｊ・Ｊ中尉」
「了解です、フーゴ中尉」

二人は互いに右手を差し出し、それを握り合った。

＊

後日、フーゴ中尉とジェナ中尉は日課の訓練後、清涼飲料水を片手に語り合っていた。話題は先日の、パワーアンプ機構（ユニット）トライアルについてだ。

「ほう、フーゴ中尉。あのパワーアンプ機構（ユニット）があったとは言え、『フォート』に勝つとはな。見直さなければいけないか」
「いやいや、ジェナたん。装備のおかげを自分の実力だと勘違いするほど、図に乗っちゃいねえよ」
「たん言うな。いや、あれは使いこなすのに相応に技量が必要だ。卑下（ひげ）や謙遜（けんそん）する事は無い」

日頃手厳しいジェナの賛辞に、フーゴは失笑する。

「あんがとよ。さて、んじゃあ俺ぁ寮に帰るわ」
「そうか。わたしは一休みしたら、もう少し機兵に乗って行く」

「ん」

フーゴ中尉は頷くと、右手を挙げて挨拶代わりにして、その場を立ち去った。ジェナ中尉は、椅子に腰かけたまま呟く様に言う。

「やれやれ。実力はわたし以上に確かなのだが。もう少し規律正しくなってくれればな。さて、わたしも奴に追いつけるよう、努力せねばならん」

そして彼女もまた立ち上がると、訓練用に用意されている機装兵（きそうへい）『アーミィ・アント』の方へ歩き出したのだった。